平成 28 年度　学位論文

異年齢交流活動による社会性育成に関する研究

―特別活動の観察を通して―

兵庫教育大学大学院

学校教育研究科　人間発達教育専攻

教育コミュニケーションコース

M15006D

施　姍

目次

序章

第一節　問題の所在と研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第二節　先行研究の検討と本研究の特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第一章　研究の方法

第一節　データ収集法―エスノグラフィー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第二節　参与観察の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

(1) フィールドの配慮点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
(2) フィールドの実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
(3) フィールドにおける観察者の立場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
(4) 観察の記録方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第三節　分析の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

第二章　教師の言動から見られる「社会性の育成」に関する分析

第一節　各観察記録から見られる教師の「関わり方」・・・・・・・・・・・・・・17

第二節　教師の言動から見られる「育成したいもの」・・・・・・・・・・・・・・27

第三章　子供の言動から見られる「社会性の育成」に関する分析

第一節　各観察記録から見られる子どもの「行動形態」・・・・・・・・・・・・・38

第二節　子供の言動から見られる「身に付けたもの」・・・・・・・・・・・・・・47

終章　結論と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

参考文献

資料

謝辞

序章

第一節　問題の所在と研究の目的

子どもたちは社会の形成者であって、国の未来を担うものである。よりよい社会になるため、どの国も人材育成を大事に考えている。そこで、人材育成の主な方法として、学校教育が注目を浴びている。しかし、グローバル化、情報化、都市化と高学歴化の進行につれて、人間疎外の状況になり続けている現代社会において、人との直接的かかわりや自然体験の乏しい子供が増えている。その結果、いじめとか、社会規範を無視するとか、学校暴力とか、他人を傷つけたり、殺したりするとか、子供たちは学校生活や社会生活上に様々な問題を起こしている。特に、「詰め込み教育」と呼ばれている中国の学校教育において、児童生徒による問題行動や殺傷事件が絶えず起こっている。

2004 年、雲南大学で全国を驚かす悪質な殺人事件があった。優等生である馬加爵（容疑者）は、大学寮で友達とトランプをするとき、些細なことで、彼らと口喧嘩になって、結局恨みを抱いて、友達 4 人を殺害してしまったという [(1)]。2006 年第 9 期『法庭内外』という雑誌で、北京大学の学生安容疑者は友達との恨みを拡大し、刀で 80 回を刺し、自分の親友を殺した。また、北京外国語大学の罗容疑者は生活の中で起きた些細な揉め事で、同じ宿舎の友達を殺した [(2)]。2013 年、复旦大学の林森浩（容疑者）は日頃の些細な出来事で、同じ宿舎の黄洋（被害者）に恨みを抱き、黄洋を毒殺した [(3)]。この子たちは全部優秀な学生であるが、残念なことに全員犯罪者になってしまった。学校にとっても、家族にとっても、痛ましいことである。そして、今になっても、中国の学校で、学生の殺人事件や青少年の犯罪行為や不良行為が次々と現れる。

以上のような少年犯罪事件に対して、人民公安大学の犯罪心理学教授李文瑾は、馬容疑者の犯罪の主因は命に対する漠然とした感情であると指摘している [(4)]。そして、复旦大学の毒殺事件に対して、上海政法学院教授および刑事司法学院院长姚建龙は、林容疑者はずっと学校で勉強していて、まだ社会に入っていないから、社会経験や社会的スキルが足りなくて、社会化はまだ完成していないと述べている [(5)]。北村（2011）は、些細なことで他人を傷つけたり、時には死に至らしめたりする事態は、「社会性」の欠如・欠落に繋がると言っている。また、前述のような青少年の問題行動に対して、平成 13 年日本の「少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議」は『心と行動のネットワーク—心のサインを見逃すな，「情報連携」から「行動連携」へ—』という報告書で、現在の児童生徒の問題行動の背景や要因について、都市化、情報化や少子化の進展などによって、子供たちが大勢で遊んだり、話し合ったりする機会が減っていることで、社会性や対人関係能力を身につける機会もなくしていると言っている。そして、本来社会性を育成する場としての学校や地域社会の中でも、社会性が育まれにくくなっていると指摘している。つまり、児童生徒の問題行為が起こりつつあるのは、子供たちの社会性の育成が不十分と考えられる。また、それが現代社会の子ども全般に当てはまると言えよう。

では、社会性とはなにか。デジタル大辞泉の解釈によると、社会性は、「①集団を作って生活しようとする、人間の根本的性質」、「②他人との関係など、社会生活を重視する性格。また、社

会生活を営む素質・能力」、「③広く社会に通じる性質。社会生活に関連する度合い」である。塩見は、「その社会がもつ文化への適応であり、その社会において生活するのに必要な行動全般を指すと言える」(2000, p21) と述べている。北村は、「一般には、一定の規範を有する社会において、これに参加する個人として集団や社会に能動的・適応的に存在し、行動することをいう」(2011, p104) と言っている。簡単に言えば、社会性は社会生活に適応する能力のことであると言える。

ところで、社会生活は集団生活であり、様々な人間関係によって構築される。社会性は社会生活に適応する能力であるというよりも、人間関係を構築し、維持する能力のほうが適切だと考える。なぜならば、社会生活を営むとか、集団生活に適応するなどは、よりよい人間関係の構築がなしにはうまくできないからである。そもそも、人間の本質は社会的存在であって、社会の中で生まれ、育ち、生活し、社会なしに生存することのできない生き物である。生まれたときから、すでにいろいろな人間関係に巻き込まれている。例えば、家族とか、保育士など、そして、成長に連れて、先生や友達、仕事仲間などもっと複雑な人間関係とかかわりあう。この社会で生きている限り、このような人間関係から脱離することができない。そして、社会性について、田中は、「相互扶助、相互活動、協同性、互恵性と呼ばれるような存在の様態である」(2009, p4) と述べている。相互扶助にしても、相互活動にしても、協同性にしても、互恵性にしても、いずれにしても、相手がなしにはやり遂げない。塩見 (2000) も、社会性は関係性のことであり、対人関係の高まりによる社会性の高まりは人格も精錬されると言っている。つまり、社会性は対人関係から離れられないのだ。

そこで、本研究は、社会性を「様々な対人関係の中で、よりよい人間関係を構築し、維持するためのあらゆる力のこと」ととらえる。よりよい人間関係と言っても、曖昧で捉えにくいから、ここで「仲間関係」として捉える。なぜならば、家族関係にしても、恋愛関係にしても、教師生徒の関係にしても、あらゆる関係から仲間関係を抜きにしてはうまくやっていけからである。簡単に言えば、社会性は「仲間関係を営む力」であると考えられる。

では、児童生徒の問題行動の背景を踏まえて、学校で、このような「仲間関係を営む力」はどうやって育成されるのか。山口は、「社会性は, 子どもがお互いに一人ひとりの個人の特性を認め合い, そのような特性に応じて集団活動の役割や機能をお互いに協力しながら果たしてゆく過程の中で育成される」(2001, p118) と指摘している。北村は、「児童生徒の社会性は、多様な集団生活におけるさまざまな体験を通して育成されるものである」(2011, p105) と言っている。文部科学省も「学齢期の子どもへの教育活動は集団での活動を基本として行われる。学校外での活動とあいまって、集団内の様々な人間関係の摩擦や集団で行動することで得られる独特の成就感・達成感等を通じて、集団を維持するために自らを律する精神や集団活動の意義を学び、社会性を徐々に体得していくものである」[6] と指摘している。

つまり、子供たちの社会性を育成するためには、学校での集団活動を重視しなければならないと考える。

しかし、「詰め込み教育」と呼ばれている中国の学校教育では、子供たちの社会性を育成することが難しい。中国の学校では、受験のための教科（国語、算数など）だけが中心で、それ以外は付け足しのようなものとして扱われている。言い換えれば、表1が示すように、学科類課程が中心で、活動類課程や学生の人文精神や創作精神などを養うための地方安排課程は重視されていない状況である。つまり、教育活動といった集団活動に関心を持たない。

表1　中国の国家カリキュラム

国家教育委員会『九年義務教育全日制小学校，初等中学課程方案（試行）』1992年8月

- 国家規定課程
  - 学科類課程
  - 活動類課程
    - 晨会・夕会（全校朝会）
    - 班団隊活動（学級活動）
    - 体育鍛錬（業間体操）
    - 科技文体活動（クラブ活動）
    - 社会実践活動（生産労働・軍事訓練）
    - 学校伝統活動（儀式・体育祭・芸術祭・遠足）
- 地方安排課程

（　）内は日本において類似した活動名を記した

出典：山口満（2001）『特別活動と人間形成』，p. 246（部分）。

表2　2001年より実行している中国小学校教育課程

領域＼学年	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
各教科	品徳と生活	品徳と生活	品徳と社会	品徳と社会	品徳と社会	品徳と社会
			科学	科学	科学	科学
	国語	国語	国語	国語	国語	国語
	数学	数学	数学	数学	数学	数学
			外国語	外国語	外国語	外国語
	体育	体育	体育	体育	体育	体育
	芸術（あるいは音楽、美術）					
			総合実践活動			
	地方と学校課程					
週間総授業時数	26	26	30	30	30	30
年間総授業時数	910	910	1050	1050	1050	1050

（表内の学年総授業時数は、いずれも年間35週間で計算、一単位時間は45分とする。）

出典：藤雪麗・福田隆眞（2010：60）表2

そして、表2によると、中国の小学校は教室での授業が多いことも分かる。総合実践活動といっても、名ばかりの存在である。また、学校行事や学級活動などの集団活動が少ない。集団活動が少ないだけではなく、かえって、活動の時間を勉強の時間にすることが多い。活動類教科である体育の授業をほかの授業（例えば国語とか）にすることも多い。運動会や文芸活動などの学校行事も全員参加のではなく、一部の生徒しか参加できない。例として、表3に示すように、山口（2001）の「運動会と学習発表会の日中比較」があげられる。

表3　運動会と学習発表会の日中比較

比較項目	出場・出演する対象		公開する対象		活動の目的	
	中国A中学校	日本の学校	中国A中学校	日本の学校	中国A学校	日本の学校
運動会	運動能力のある生徒	全員参加		保護者や地域の人々	学校の学習活動が優れたものであることをアピールする。	保護者がわが子の成長と学校での活躍を確認するため。
学習発表会	指名を受けた一部の生徒だけ	全員参加	教育委員会の関係者、地元の有力者	保護者や地域の人々		

山口満（2001）『特別活動と人間形成』, p.250－252による作成。

以上のように、中国の子供たちは、普段の学校生活で、すでに教科外活動に参加する時間やチャンスが少ないのに、学校行事まで全員参加することができないのは、人間関係を構築するチャンスを無くしているともいえる。山口（2001）はこのような能力によって選ばれた生徒を、能力を生かすことのできる行事に参加させることは、生徒たちの潜在的能力を見逃すことや、活動の場が制限されることによって能力を発掘するチャンスを無くす恐れがあると述べている。言い換えれば、その子たちの人間形成にダメージを与えている。そして、活動の場が制限されることで、いろいろな人間関係と向き合うことも制限されている。

つまり、集団活動の中で育成される社会性は、教室での教科を教えるだけではうまく育成されないのである。教室での教科指導を中心とする授業のみを重視し、教科以外の教育活動（あるいは集団活動）に関心を払わないという中国の学校教育の下では、子供たちの社会性が育てられないことが深刻な課題になっている。

第二節　先行研究の検討と本研究の特色

前に述べたように、現代社会のグローバル化、情報化と都市化による人間関係の希薄化につれて、様々な間接体験や疑似体験に接触している子供たちは、人との直接的かかわりや自然体験が減少しつつあることで、引きこもりになるとか、他人とかかわることを嫌がるとか、問題行動や犯罪行為をなさるなど、「社会性の欠如」といった事象が増えているのは、子供たちが大勢で遊んだり、話し合ったりする機会が減っていることによる社会性や対人関係能力を身につける機会

も減っているからである。そこで、一番簡単なやり方では、そうした機会を学校が増やすことにあると考えている。なぜならば、学校生活は子供たちにとって、体験できる身近な集団生活であるからである。学校側が解決方法を取らないと、子供たちはますます社会性を欠如していく。また、集団活動の中で育成される社会性は、学校での集団活動を重視しない中国の「詰め込み教育」といった学校教育の下には育てられないことを解決するため、学校での集団活動に力を入れるしかないと考えている。

では、児童生徒が健全な社会性を身につけ、自ら問題を回避し、または自分で解決するようにさせるため、学校側はどんな集団活動を通して、どのように社会性を育成すべきか。国立教育政策研究所の報告書によると、学校教育での「社会性」は、「集団活動の場で自分の役割や責任を果たす、互いの特性を認め合う、他者と協力して諸問題を話し合う、その解決に向けて思考・判断する等の能力や態度であり、さらにはそれが自らの個性と統合され個人の資質として昇華されたもの」[7]と述べている。また、育成される社会性の主な内容は表4のように示している。

表4　育成される社会性の内容

基本的な生活習慣	人間として自ら自立していく基本になることである。
対人関係の在り方	社会生活を営むうえでは、豊かな人間関係を築くことが目標の一つである。人とかかわる基本は、他者との信頼の感情をどのようにもつかである。自分の気持ちや考えを適切に伝えたり、相手に思いやりを持って受け止めたりすることなどを指す。
集団活動の体験	子どもは社会性を獲得していく過程で、多様な集団や組織とかかわり、その体験・事実の中からその筋道を習得する。集団に参加する喜び、責任をもって役割を果たすこと、集団の中で自己のよさを発揮することなどを指す。
規範意識の獲得	集団や社会の中で多くの人が生活するうえで必要な「社会規範」を積極的に受け入れ、自分を適切にコントロールできることなどを指す。
社会生活の体験	学校生活は、一つの社会生活を模擬的に学ぶ意味があり、学年の発達に応じて社会の一員としての自覚がもてるようにする場である。地域行事への参加、ボランティア活動、職場体験などの体験を通して、社会の中で生きている実感を味わい、地域の人々や環境とのかかわりを深め、そこでの役割を果たす充実感や社会参加の意識、社会貢献への喜びなどを体験していくことなどを指す。

出典：国立教育政策研究所（2004：8-9）による作成。

簡単に言えば、集団活動を通して、どのように他人とのやり取りをするか、または人間関係の中で、問題に直面した時、どのように解決したらいいか、人間関係を円滑に維持するための規範意識や責任感、共感や問題を解決する能力などの育成が必要だと理解できる。

また、その報告書では、「児童生徒の社会性を育む教育を推進するために」必要となるプログラムは、「青少年施設や社会教育団体などでなされている、多様で効果的なプログラムに基づく様々な活動などを参考にし、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などで実施が可能な

もの」と言っている。つまり、子どもの社会性を育てるため、多様なプログラの開発ができる。

そこで、本研究は、その報告書に基づいて、学校での社会性育成に関するいくつかの研究を、研究A,B,C,Dのようにまとめた。

研究A	
研究タイトル	社会性を身に付けた児童を育てる特別活動の指導の在り方:集団の一員としての自覚をもち，生活の向上のためのルールづくりを行うモデル授業の開発
研究の目的	よりよい人間関係を築くための社会性を身に付けさせるために、社会性を身に付けた児童を育てる特別活動の指導の在り方について模索する。
研究方法	ルールづくりのサイクルを設定し、生活向上のためのルールづくりの話合いを学級活動で実践する。
社会性の捉え方	よりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力、社会の一員としての自覚をもって生活の向上のために進んで貢献していこうとする態度などを指す。
育成したい社会性	協調性、責任感、規範意識、人権尊重。
研究の結果	折り合いをつけながらルールをつくることが協調性・人権尊重の態度や、学級の一員としてルールを守っていこうとする責任感・規範意識を育成するうえで有効であることを実証した。

出典:大竹晋吾ら(2009:1-20)による作成。

研究B	
研究タイトル	社会性を育む学級活動の在り方：授業のグループワーク化を通して
研究の目的	児童生徒の社会性を育成する授業プログラムを提示する。授業実践することで、社会的な行動（「関わる力」・「創る力」）の表出を実証する。
研究方法	現実課題を扱う学級の話し合い活動を社会性の育成に有効とされる学校グループワークの観点で見直し再構成（授業のグループワーク化）する。
学級活動で育む社会性の捉え方	自分と自分を取り巻く環境を見つめ、自らが所属する集団を仲間と共によりよくしようとする資質や能力。
社会性の発達に伴って表出される力	○「関わる力」：他を思いやり、協調しようとする行動。 ○「創る力」：よりよい生活を創るために、役立とうとする行動。
研究の結果	学級活動の授業をグループワーク化する取組は、児童生徒の社会性の育ちに、有効な手立ての一つとなりえると実証した。

出典：松崎宏行ら，〈http://www.keins.city.kawasaki.jp/kiyou/kiyou16/16-133-148.pdf〉による作成。

研究C	
研究タイトル	児童生徒の社会性をはぐくむ生徒指導の在り方に関する研究 第1報
研究の目的	学校における生徒指導の改善と充実のため、児童生徒の社会性をはぐくむ生徒指導上の問題点や課題を把握し、社会性をはぐくむ生徒指導の在り方を明らかにする。
研究の方法	実態調査。
社会性の捉え方	個人が自己を確立しつつ、人間社会のなかで適応的に生きていく上で必要な資質や能力・態度のこと。
社会性を育むために必要なもの	共感性、役割取得、思いやりの態度、向社会的行動、自己調整力、自己有用感
研究の結果	○児童生徒に社会性をはぐくむことの今日的課題とその重要性、学校において児童生徒にはぐくまれる社会性のとらえと生徒指導とのかかわりについての基本的な考え方を明らかにした。 ○児童生徒の社会性をはぐくむ生徒指導についての実態調査とその分析及び検討を行い、これまでの学校における児童生徒の社会性をはぐくむための指導体制の見直しと、集団のなかで自己を生かす活動の必要性を明らかにした。 ○実態調査の分析から明らかになった課題を基に、児童生徒の社会性を育む生徒指導の在り方に関する基本構想の立案を行い、さらにこの基本構想を基に、指導体制の見直しと自己を生かす活動についての推進試案を作成することができた。

出典：岩手県立総合教育センター教育研究（1999），〈http://www1.iwate-ed.jp/db/db1/ken_data/center/h11_ken/11_05/11_05.html〉による作成。

研究D	
研究のタイトル	知的障害のある児童の良好な人間関係を築くための支援に関する研究：社会性の育成に視点を当てた「個別の指導計画」の作成と活用を通して
研究の目的	知的障害のある児童が良好な人間関係を築くことができるため。
研究の方法	『個別の指導計画』を作成し、これに基づいた授業とその評価・改善を行う。
社会性の捉え方	他者理解 、役割 、自己統制 、集団参加 、コミュニケーション 、見通し、基本的生活習慣 、社会生活上のマナー。
研究の結果	こうした授業改善に継続的に取り組むことは、児童が良好な人間関係を築くことに有効であることと実証した。

出典：福新智幸，〈http://www.ysn21.jp/tyousa/tyoukikensyu/houkoku/houkoku22/hou_fuku.pdf〉による作成。

以上のように、日本では、様々な社会性育成プログラムを開発し、実施してきた。このほか、社会的スキル訓練（小林・相川, 1999）、構成的グループエンカウンター（國分, 2000）、アサーショントレーニング（平木, 1993）、またソーシャルスキルトレーニング（岡田・古橋, 2009）やストレスマネジメント（中村, 2008）などのプログラムが挙げられる。

しかし、いろいろなプログラムを設置し、行ったところで、それらの効果は一時的な効果であるとよく言われている。また、それらのプログラムはほとんど学級内で実施されてきた。一つの班の子供たちを対象にして、活動に参加させるとか。あるいは、同じ学年の子供たちを集めて、計画した活動に参加させるとかである。同じ年頃の子供たちは考えや行動などが似ていて、相手の気持ちを容易に理解し、関わりやすいことは否めないが、彼らの社会性がうまく育成されたとは言い難い。なぜならば、社会といった大集団の中で、異年齢の人がいっぱいいるし、地域によって様々な考え方も違ってくるからである。日常生活の中で常に同じ年頃の人とやり取りをするのではなく、異年齢の人とのかかわり機会もたくさんある。異年齢の人と出会ったとき、どう関わればいいか体験しない限り分からないし、理解することも容易にできない。社会性はよりよい社会生活を送るために欠かせない特質であって、人間関係を構築し、円滑に維持するものでもあるから、子どもに健全な社会性を身に付けさせるため、異年齢との交流を看過してはいけないと考える。滝充は子どもの社会性育成の手法について、「公立小中学校には，発達途上にある異年齢の子どもたちが教育を受ける目的で同じ地域から集まっている。だから，異年齢交流や地域との交流の機会を容易に提供できる。・・・教師が協力しあうだけで，学校の持つ好条件を活かした実体験の機会をいくらでも提供できる。わざわざ同年齢の子どもだけの学級に閉じこもり，あえてエンカウンターやスキル訓練等の疑似体験で代用する必要など，どこにもない。」[8] と指摘している。毛利（2007）も、異年齢集団で様々な活動に取り組むことを通して、社会性を身に付けることができると述べている。

そこで、学校側は、子供の社会性を育成する際に、どんな集団活動を通して、育成できるかという問題について、異年齢交流活動が挙げられる。そして、異年齢交流活動に関する研究を調べると以下のようなものがあった。

研究１	
研究タイトル	集団生活を営む力を育む異年齢交流活動の在り方：気付きを行動化につなげる話合い活動の工夫
研究目的	異年齢集団による交流を主とした全校児童による集会活動において、６年生児童の集団生活を営む力を育むために、児童の気付きを行動化につなげる６年生による話合い活動の充実を図ることの有効性を明らかにする。
研究方法	○主体的に考えることができるための話合い活動前の事前アンケート活用。 ○振り返りの場面での「話合いシート」。 ○主体性を高めるロールプレイ 。 ○自己有用感や達成感を高める「振り返りカード」と教師による支持的言葉がけ 。
研究の結果	異年齢の交流活動を、年間を通して同じ班員で継続して実施しているという点で、活動の質を高めるために、気づきを行動化につなげる話合い活動の工夫が有効である。

出典：江城佐和子（2013：1-12）による作成。

研究2	
研究タイトル	異年齢集団活動を工夫して小学校中学年児童の自己有用感を高める取り組み
研究目的	中学年児童が自らの体験を基に相手に寄り添う視点を見付け出し，異年齢集団活動に生かすことにより，中学年児童の自己有用感を高める。
研究方法	異年齢集団活動において，中学年児童が支援を受ける体験を基に話し合いを行い，支援をするための目当てを作り出す過程を通して，相手に寄り添う視点を見付け出す工夫を行った。
研究の結果	中学年児童が相手に寄り添う視点を持ち，低学年児童を支援したことにより，中学年児童の自己有用感が向上したことを明らかにした。

出典：谷本早知子，〈http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chouki/study/h21/tanimoto.pdf〉による作成。

研究3	
研究タイトル	子どもたちの豊かな仲間意識を育むために：異学年集団での活動を生かして
研究目的	○異学年集団での活動を通して、子ども一人一人の自己有用感を高めるにはどのような活動を組織したらよいのか実践を通して明らかにする。 ○異学年交流活動実施後の子供たちの自己有用感はどのように変容したか考察する。
研究方法	異学年集団での交流を中心としたピア・サポート活動の実践研究を行った。
研究の結果	自己有用感を高めるための効果的な異学年交流活動プログラムを明らかにすることができた。

出典：広瀬紀一，〈http://www.kochinet.ed.jp/center/research_paper/h17_center_students/hirose.pdf〉による作成。

研究4	
研究タイトル	社会性の育成を目指した生徒指導の在り方に関する研究Ⅱ：規範意識をはぐくむ異学年交流の活動を通して
研究目的	調和のとれた統合的な人格の形成に向けた生徒指導の在り方として，規範意識を中心とした社会性の育成について考察する。
研究方法	異校種間及び同一校における異学年交流活動を実践し，規範意識の育成に取り組む。
研究の結果	異学年交流活動によって「愛着・信頼感」，「モデルの形成 」，「自己有用感」が高まることなどを実証した。

出典：石原利樹ら，〈http://www.hiroshima-c.ed.jp/web/publish/ki/pdf1/kk31/4.pdf〉による作成。

研究5	
研究タイトル	他と協力して生活しようとする態度を育てる異年齢集団活動の研究：縦割り班活動を基軸として
研究目的	縦割り班活動と学級活動を，児童会活動を接点に連携させることを通して，縦割り班活動の効果的な展開の仕方を探る。
研究方法	アンケート；文献や資料を読む。
研究の結果	子どもたちの課題意識や活動意欲を高めていくための手立てを明らかにした。

出典：田辺聖子，〈http://www.saga-ed.jp/chouken/choukikenshuu_jigyou/chouken_report/h14/pdf/15tanabe.pdf〉による作成。

このように、従来の異年齢交流活動に関する研究は、子どもの規範意識とか、仲間意識とか、自己有用感とか、集団を営む力とか、活動を通して得られるといろいろ論述してきた。これらすべて子どもの社会性育成に関わるものであるから、異年齢交流活動は子供の社会性育成に役立つことは理解できる。

しかし、異年齢交流活動の社会性育成機能に着目して、実際の活動場面で、子供たちはどんなやりとりをしているか、具体にどんなものを身に付けているか、どのような言動が「子どもの社会性が育成されている」と見られるかについて、具体的、かつ、詳細的に記述したものはなかった。また、それらの研究は全部子供が研究対象になっている。子供の社会性を育成するのが目的だから、それは当然のことであるけれども、教師のかかわり方も子供たちの社会性の育成に大きな影響を与えていることを看過してはいけないと考える。なぜならば、教師は、子供たちにとって、第二の親であり、知識や技能を教えたり、問題解決の方法を教えたりする存在であるからである。子供たちは学校で先生を見て、先生の言い方を聞いて過ごすことが多い。そして、各班の教師は自分の個性を持っていて、自分なりの教え方があって、言葉や行動なども直接に子供たちに影響を与える。

そこで、教師の関わり方も検討しなければならないと考える。滝充は子供の社会性育成について、学校に求められているのは、「・・・学級や学年を超えた異年齢間や地域との活動を意図的・計画的に組むこと，そして教師の関わり方を見直すことである。」[9] と述べている。また、教師に求められる関わり方に関して、「 ①子どもが「活動の中心＝主体」となって課題や問題に取り組み，それらを達成・克服していける交流活動等の機会を準備すること。 ②その後は子どもに任せ，「支える」「見守る」裏方に徹すること」と言っているが、具体的にどのように「支える」か、どのように「見守る」かについては、詳しく論述していない。

それゆえ、本研究では、子供の社会性育成に有効的だと言われる異年齢交流活動に注目し、活動中、教師と子供たちはなにをめぐって、どのようなやりとりをしているか、媒体物や状況にも注意しながら、教師と子供の行動や言葉を観察対象として記録し、①子どもの社会性を育成するために、教師はどのような関わり方をしているか、何を育成しているか、②実際の場面で、子どもたちの中にどのような社会性が育成されているのかという二つの問題を明らかにすることを

目的とする。中国の学校における「子どもの社会性育成が不十分」という教育課題を解決するため、子供たちに健全な社会性を身に付けさせるため、学級での集団活動はもちろん、異年齢交流活動の社会性育成機能も重視し、教師の関わり方を含めて検討しなければならないと考える。

注：

(1) 「馬加爵故意殺人案」
〈http://legal.people.com.cn/GB/43027/32605/index.html〉,2016年12月19日アクセス。

(2) 李晶(2006)「象牙塔里丢失的人性」
〈http://legal.people.com.cn/GB/43027/32605/32606/5146140.html〉, 2016年12月19日アクセス。

(3) 中国教育报（2014）「复旦高才生毒杀室友引发的反思」
〈http://www.edu.cn/gao_jiao_news_367/20140220/t20140220_1076012.shtml〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。

(4) 周贺（2004）「心理学教授専訪：馬加爵悲劇源于対生命的淡漠」
〈http://www.people.com.cn/GB/shehui/1061/2462955.html〉,2016年12月19日アクセス。

(5) 同（3)。

(6) 文部科学省（2008）「体験活動の教育的意義」
〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。

(7) 国立教育政策研究所（2004）『「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」:「人とかかわる喜び」をもつ児童生徒に』
〈https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/syakaisei.pdf〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。

(8)滝充（2006）『「異学年交流」「地域交流」こそ育成の要諦：徹したい教師の「学習支援」『CS 研レポート』第 58 号,p.29。

(9) 同上。

第一章　研究の方法

本研究は、兵庫教育大学の附属小学校の特別活動の観察を通して、エスノグラフィーという研究手法を取り、フィールドに出かけ、特別活動に参加している子供たちと先生たちの言動を分析することで、異年齢交流活動の社会性育成機能を明らかにするものである。なぜならば、附属小学校の特別活動は「縦割り班活動」といった異年齢交流活動で仕組まれているからである。本研究にとって、異年齢交流活動に参加している先生たちと子供たちの言動や関わり方を観察する際に適切である。

そして、特別活動について、日本特別活動学会は、「特別活動は望ましい集団活動を通して豊かな人間性や社会性を育成する実践活動」（2010, p19）であると指摘している。全国特別教育活動研究会は、「特別活動は集団活動そのものを通して社会性の育成を図るところに、その独特の意義がある」（1968, p208）と述べている。山口（2001）によると、社会性の育成という目標は、特別活動の目標として欠くことのできないものである。また、北村（2011）は、「なすことによって学ぶ」ことが特質である特別活動は、学校における社会性の育成の中心的な役割を果たすと述べている。杉田（2013）も、特別活動の一環である学級活動において、生徒たちに身に付けてほしいことは、「社会性」や「自治的な能力」など、社会に出てから直接生きて働くような実践的な態度であると述べている。以上の多言説から、特別活動は子供の社会性を育成することに大きな役割を果たしていることも明らかである。

それゆえ、子供の社会性を育成する集団活動を考察する際に、異年齢交流活動を含めている特別活動はとても有効的であると考える。

ところで、観察された特別活動の中に、5年生向けの林間学校も含めていたが、異年齢交流活動と言っても、活動中、必ず上級生と下級生が関わりあっているのではないから、同級生の間も、いろいろなやり取りをしているがゆえに、同級生の間でのやりとりも観察すべきだと考え、観察を行った。簡単に言えば、異年齢交流活動は、「同級生の間のやりとり」と「上級生と下級生の間のやりとり」という二つの側面を持っているから、普段「縦割り班活動」の中で、見逃しやすい同級生の間で生じるものを正確に把握するため、そういう同級生だけの活動に注目する必要もあると考える。また、先生たちの関わり方を詳しく観察するためにも必要だと考える。そして、学校行事（入学式、始業式、卒業式、終業式など）を観察したのは、全体の学生に向かって、教師は何を教えているかをはっきりさせるためである。

以上が本研究の研究方法についての説明である。

第一節　データ収集法—エスノグラフィー

実際の活動場面で、子供の社会性を育成するために、教師たちはどのように子供たちにかかわっているか、子供が他者とやり取りをする中で、どのようなものを身に付けているかを検討するためには、その場に居合わせて、彼らの行為、発話と相互作用を丁寧に記録しなければならないと考える。なぜならば、いくら資料を読んで豊富な予備知識を得ても、実際の場面で事前の予測

と違うことが起きたり、まだ人に知られていない問題や想像と違うことを発見したりすることがあるからである。現場に赴き、自ら活動を観察する方が、そういう数量的・統計的データによる見えない部分を把握することができる。例えば、一緒に集団活動に参加している同級生の間で、上級生と下級生の間で、協力し合うようになったときや仲間関係が形成したとき、どんな状況の下で、どういった考えで行動したか、発話したか、自ら観察し、記録し、分析することで明らかになれる。また、一人の生きている主体として、その場に居たら、周りの人と同じような気持ちが生じることが可能であるから、子どもたちの思いや気持ちを受け止めることもできる。簡単に言えば、現場で生起した文脈を理解し、子供たちの意味世界を解明することができる。

そこで、本研究は参与観察が基本の調査方法であるエスノグラフィー（小田,2010）を採用することにした。文化人類学、社会学、心理学、教育学など、様々な分野で応用されたエスノグラフィーは現場で出会う問いを解明するための方法論であって、人々が実際に生活したり、活動したりしている現場を内側から理解するための調査・研究の方法である（小田,2010）から、現場に行って、実際に起きた出来事を自分の目で確かめることができるし、いろいろな人の物の見方や考え方を理解することもできる。また、中村・広岡は、「エスノグラフィーの記述は,自分たちの文化とは異なる人びとの文化や生活を,主として調査者と同じ文化に属する人びとに読まれることを目的として行われた」(2000,p49）と述べている。それゆえ、中国の学校にない異年齢交流活動をエスノグラフィーの手法で研究するのも相応しいと考える。

第二節　参与観察の実際

小田（2010）は、エスノグラフィー調査の基本は参与観察であると述べている。また、志水は、「エスノグラフィーとは,フィールドワークの方法を用いた調査研究のことであり,またその成果としてまとめられた文章・テキストのことである」(1998,p6）と言っている。つまり、エスのグラフィー調査をするためには、参与観察あるいはフィールドワークを行う必要がある。

そこで、筆者は現場に赴くフィールドワークを実施した。

(1) フィールドの配慮点

① 附属小学校に入っていく時、病気などの影響がフィールドに及ばないように心掛ける。

② 各フィールドの抱えているそれぞれの都合に対して、こちら側で合わせる。予定通りにフィールドに行くことができない場合も、こちらが日を改める。

③ 事前にその日のスケジュールを調べ、何時訪問したらいいか、どういう条件で訪問することができるかなどのことをメールで打ち合わせておく。

④ フィールドの安全を確保する。

⑤ フィールドの現場に介入する時、フィールド側に迷惑をかけないように気をつける。

⑥ フィールドに出かける時、自分の目的を心に銘記する。

以上が観察に行く時の配慮点である(鯨岡，2005)。

(2) フィールドの実際

観察対象：兵庫教育大学の附属小学校の特別活動に参加している子供たちと先生たち。

観察時間：筆者は 2016 年 2 月から 9 月まで、計 32 回の観察を行った。

表 1－1　観察された活動一覧

H27 年度		
観察期日	観察した特別活動	活動の性質
2 月 11 日（木）	うれしのフェスティバル	異年齢交流活動
2 月 23 日（火）～24 日（木）	ありがとううれしの班	異年齢交流活動
3 月 18 日（金）	卒業式	行事
H28 年度		
観察時間	観察した特別活動	活動の性質
4 月 8 日（金）	始業式	行事
4 月 11 日（月）	入学式	行事
4 月 25 日（月）	なかよし遠足の顔合わせ会	異年齢交流活動
5 月 13 日（金）	なかよし遠足	異年齢交流活動
5 月 17 日（火）～19 日（木）	はじめましてうれしの班	異年齢交流活動
5 月 24 日（火）～ 26 日（木）	わくわく給食	異年齢交流活動
5 月 27（金）	旗を作る活動	異年齢交流活動
6 月 2 日（木）	うれしのスポーツ　綱引き	異年齢交流活動
6 月 23 日（木）	うれしのスポーツ　玉入れ	異年齢交流活動
6 月 10 日、14 日、17 日、20 日、21 日、23 日、24 日	林間学校に参加するための「業前ランニング」	5 年生向けの集団活動
6 月 26 日（日）～ 28 日（火）	林間学校	5 年生向けの集団活動
7 月 1 日（金）	うれしのスポーツ　大玉リレー	異年齢交流活動
7 月 7 日（木）	うれしのスポーツ　玉入れ	異年齢交流活動
7 月 20 日（水）	終業式	行事
9 月 6 日（火）	うれしのスポーツ　大玉リレー	異年齢交流活動
9 月 15 日（木）	うれしのスポーツ　綱引き	異年齢交流活動

(3) フィールドにおける観察者の立場

学校の子どもとともに居て、特別活動の邪魔にならないように心がけ、必要な時に手伝う。従って、本研究における立場は、「観察者としての参加者」―参与観察者（佐藤, 1992, p133）である。関与の度合いによって、参与タイプをいうと、moderate participation（Spradley, 1980）になる。柴山（2006）によると, moderate participation という「中程度参与」は、「積極的な参与」（フィールドの正式メンバーではないが、何らかの役割を持ってフィールドに参加しながら観察

をする立場を言う）と「消極的な参与」（フィールドで観察者以外の役割を担わずに観察をする立場を言う）の中間にあるタイプである。筆者は、学校での特別活動を観察するとき、ほぼ「消極的な参与」になる。子供たちが筆者に声をかけてくれないときは、いつも活動の場所の片隅で静かにメモを取りながら子供たちの様子を観察した。しかし、「なかよし遠足」とか、「林間学校」の時とかは、サポートする先生として、活動に参加し、子供たちと会話しながら、観察をした。

(4) 観察の記録方法

フィールドにおける観察記録は、筆記記録（フィールドノーツ）と写真撮影（許可がもらえたうえで）をともに行った。記録は主に子供の社会性を育成することが目標とする異年齢交流活動のある特別活動の中で、①どんな場面で（状況説明）、②子供の社会性を育成するために、教師たちはどのような関わり方をしているか、③子供たちのどんな行動が「社会性が育てられている」と見られるか、という三つの視点から記録した。ここで、注意すべきなのは、自分の心を動かしたり、研究に必要だと思われたりする子供の社会性に関わる行動が毎回発見できるとは限らないことである。一日かけて、何も書けないことがある。そこで、何回も現場に行って、観察し、記録する必要がある。

また、活動の現場では常に整然としたものではなく、話声が混ざって、聞き取れないときや、子供たちの表情や身振りなどをその場できちんと書き留めることはできない。佐藤は、フィールドノーツについて、「調査地で見聞きしたところについてのメモや記録（の集積）という程度のもの」(1992, p180) であると言っている。ゆえに、筆者は主な言動を短く記録し、細かいところは後でフィールドノーツを見ながら回想して補足することにした。最後は、断片的なメモを完全な文章にして、ワープロに入力した。そして、フィールドノーツの作成は表 1−2 を参考にした。

表 1−2　フィールドノーツ作成の要点

I. 観察データの記録	
○実践全体の大局的な記録を書く。	○実践の詳細な記録を書く。
・時間	・出来事や人びとの言動を具体的に書く。
・出来事の順序	・その場の雰囲気も書き込む。
・登場人物　など	・出来事が生起した場所の見取り図を書く。
II. データについての解釈・考察の記録	
○3 種類のメモ(覚書)を書く。	
・理論メモ	
・方法論メモ	
・個人メモ	

出典：柴山（2006：98）表 8-1

観察された子どもたちと先生たちのプライバシーを守るため、顔写真は一切撮らない。材料としての活動写真だけを撮った。また、活動の全体的状況を把握するため、必要な時、活動の後、先生に簡単なインタビューをした。インタビューについては、限られた時間の中で、質問項目があらかじめはっきりしている半構造化インタビュー（小田, 2010, p161－162）を採用した。聞き逃すことや書き忘れることのないように、インタビューされた相手の許可を得たうえで、録音を行った。そこで、本研究は写真撮影記録、筆記記録（フィールドノーツ）、録音によるインタビューの記録に基づいて成り立つ。

第三節　分析方法

箕浦は、「エスノグラフィーは, フィールドワーク中に見聞したことを〈書き物へ移す〉作業で、フィールドノーツはその最初のステップ, エスノグラフィーの作業は, それを読み手に呈示する作業である」（1999, p77）と述べている。そこで、筆者は附属小学校の特別活動に参加している先生たちと子供たちはどういう状況で、どんなやりとりをしているかを観察し、記録し、フィールドノーツにまとめることにした。さらに、フィールドノーツから「意味的なまとまりをもった一連のやりとり」（山本, 1995, p. 210）、すなわちエピソードを切り出して、分析の単位とした。また、観察された子供たちと先生たちのプライバシーを保護するため、エピソードに登場した名前はすべて仮名とした。

それから、切り取ったエピソード（教師の行動と子供の行動に注目したもの）を読み込み、分析の枠組みに照らし合わせて分類した。まず、エピソードに、「子どもの社会性を育成するために、教師たちはどのような関わり方で、何を教えているか」と「社会性が身に付けている証拠として、子供たちの行動から、どんなものが見られるか」という二つの観点から、教師の行動と子供の行動にラベル付けを行った。ラベルを付けた後、それぞれの行動には「どんな特徴があるのか」という観点からカテゴリー化した。類似の特徴があると考えられた行動は束ねてカテゴリー化した。なお、1つのラベルで1つの行動の特徴があると考えられるものは束ねずに、1つの行動の特徴があると見なしてカテゴリー化した。

本研究は異年齢交流活動を通して、子供たちの社会性育成を把握するため、以上のような分析方法で研究を進めた。

第二章　教師の言動から見られる「社会性の育成」に関する分析

本章は観察記録から教師の言葉と行動を取り出して、子どもの社会性を育成するために、教師はどのような関わり方をしているか、何を育成しているか、という問題を分析するものである。

まず、教師はどんな行動（関わり方）をしているかを観察記録から切り出して、その行動にはどんな特徴があるかを分析し、ラベル付けを行う。その後、同じような行動をまとめて、カテゴリー化する。

それから、教師の言葉から何を育成したいかを分析し、ラベル付けを行い、カテゴリー化する。

しかし、同じ観察記録の中で重なっている部分があるから、例えば、責任をもって役割を果たすとか、責任感と役割を果たすという二つのものが読み取れるので、そのときは、責任感と役割を果たす能力を区別して書くが、同じ言葉はそれぞれの育成したいところに入れることにする。

第一節　各観察記録から見られる教師の「関わり方」

第一に、正式な活動が始まる前の行動を「事前誘導」とラベル付けした。具体的には以下のようなものが挙げられる。

〈エピソード1〉　ラベル：事前誘導

状況：なかよし遠足の顔合わせ会で、随行の先生が子どもたちの前に自己紹介をしているところである。(2016/04/25)

X先生：・・・4年生のみなさんとはあまり関わりがなかったので、はじめてでどうなるのかなって楽しみにしています。で、2年生のみなさんとは1年生の時によく会いましたね・・・えっと、今年も4年生のみなさんと、一緒に、2年生の人とどういう関わりができるのかな、そして、遠足場所もちょっと今年変わっていますので、4年生がどんなリードしてくれるかな、楽しみにしておりますので、みなさん、一緒に楽しみにしましょう。

エピソード1において、X先生はなかよし遠足が正式に始まる前に、なかよし遠足という活動で、子どもに他の人との「関わり」を期待していると伝えている。このように、活動が始まる前に、育成したいもの、言い換えればその活動の目的や意義を言葉で誘導し、子供に意識させる行動を「事前誘導」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下の通りである。

ラベル：事前誘導		
観察記録番号	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録3	①・・・4年生のみなさんとはあまり関わりがなかったので、はじめてでどうなるのかなって楽しみにしています。 ②えっと、今年も4年生のみなさんと、一緒に、2年生の人とどうい	活動が始まる前に、育成したいもの、

	う関わりができるのかな、4 年生がどんなリードしてくれるかな、楽しみにしておりますので・・・	言い換えればこの活動の目的や意義を言葉で誘導し、子供に意識させる。
観察記録 26	①ランニングを始める前に、考えてほしいことがあります。ランニングをするとき、何が大事なのか、考えてみて。 ②ランニングをするのは、自分の体のことを考えながら、動いていくことです。自分の心と体をどのように転換するか、どのように扱うのが大事です。走る前に、自分の体調をよく考えて、どこまで走れるかを考えておく必要もあります。	
観察記録 28	①今日、何かをするというと、一体感、リズムを覚えることです。みんなと一緒に走るとき、隣の人のことを考えるのが重要です。じゃ、どうしたら、リズムを保つことができると思いますか？ ②声をかけることで、お互いの状況を把握することができます。	
観察記録 29	①・・・声掛けは、必要な時と必要ではないときがあります・・・みんなはそれぞれの役割がある。自分の役割を意識して、自分はなんでここにいるのかな、どういうことをすればいいのかな、それを意識しながら走りください。じゃ、こんなことをするのはなぜなのか、考えてみてください。 ②だから、周りの人と一緒に、前後左右、どのように走っているかを見ていく。自分が声をかけないといけないと思うとき、声を出す。	
観察記録 32	体を整えることは大事だけど、心構えをするところを整えることも大事です。登山するときは、今の知っている道ではないから、危険な道はいっぱいあります。そして全部はじめての道です。中途半端な気持ちではいけない。トラブルに巻き込まれないように、チーム、集団の力としての自分の力、班の力、みんなと協力して、しっかり頑張っていきましょう。	
観察記録 34	安全に登るため、どのような登り方をするか・・・前の人がどんなところに足をついているか。どんな歩き方をしているのか。手はどこに掴まっているのか。安全なのか。自分の歩き方は、後ろの人に伝わっていくから・・・そういう安全面の目を使って、後ろの人の体調、元気かな、気を付けることが大事。業前ランニングの時、隣の人、前の人、後ろの人、体の心配をしてあげる。今はどうですかって。	
観察記録 35	登り方の技術、まずは、自分はどのぐらいの体力があるか。自分、今はどんな調子なのか。そして、後ろの人はどうなのか。顔色とか、汗の量とか、そういうところをちゃんと見なさい。	
観察記録 41	・・・命をいただくときに、自分も命であることを考えておく。魚も命です・・・	

以上のように、先生たちは活動が始まる前に、この活動の目的や意義を言葉で誘導し、子供に意識させることを通して、子供たちに、これから何を目指して頑張るべきか、今回の活動で、何を学ぶべきかを教えているのである。こうすることで、子供たちも、いろいろと自ら考えて、活動の目当てを意識しながら活動していくのである。思考力や行動力も鍛えられると考える。

第二に、本番の活動が終わった後の行動を「事後反省」とラベル付けした。具体的には以下のようなものが挙げられる。

〈エピソード2〉　ラベル：事後反省

状況：青組が負けたから、青組のV先生は、今回の試合について、子供と話し合っている（2016/06/02）

V先生：今はどんな気分ですか？　（「悔しい」とある二三人の子供が小さい声で答えた。）

V先生：悔しいですか？じゃ、今日、何で負けたと思います？全力を出しましたか？全力を出したと思う人、手をあげて。（すると、何人か手をあげた。少しずつ手を挙げる人が増えて、最後、ほぼ全員手を挙げた。）

V先生：全力を出したなら、それでいいです。先生は、みんなが頑張ったから、嬉しいです。次回、また頑張ればいいです。でも、今回が負けた理由を考えてほしい。（一人の男の子は「もうちょっと頑張れば」と小さな声で言った。）

V先生：もうちょっとですか？そのもうちょっとは何かを考えてほしい。次につながるんです。みんな力を出す時、周りの人を見ていましたか？周りの人と力を合せましたか？一人の力では何もならない。自分のことばかり考えてはだめです。周りの人のことも考えて、合わせる気持ちを大切にするのが大事です。

注：（　）内には,状況説明である。

エピソード2において、V先生は今回の試合について、負けた理由を整理して、子供に聞かせた。このようなことをするのは「次につながるんです」であるから。このように、活動後、活動について、子供たちと一緒よいところやよくないところを検討し、次の活動に生かすため、注意すべきことや大事なことを教える行動を、「事後反省」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下の通りである。

ラベル：事後反省		
観察記録番号	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録23	今はどんな気分ですか？・・・悔しいですか？じゃ、今日、何で負けたと思います？全力を出しましたか？・・・みんな力を出す時、周りの人を見ていましたか？周りの人と力を合せましたか？・・・一人の力では何もならない。自分のことばかり考えてはだめです。周りの人のことも考えて、合わせる気持ちを大切にするのが大事です。	活動後、活動について、子供たちと一緒によいところやよく

観察記録 25	・・・やっぱりその役割っていうのは、大事です。だけど、今までは、それをあなたたちはしていなかった・・・一つしっかり頑張れば、他の活動にもしっかりし、いい影響を与える・・・	ないところなどを検討し、次の活動に生かすため、注意すべきことや大事なことを教える。
観察記録 31	どうして楽になったと思う・・・隊列は意味がある。声をかけたり、ペースを合わせたりすることです。林間学校に当たっては、それぞれの良さ、それぞれの役割があって、みんなで一貫になって登っていく。	
観察記録 33	・・・そういうところが大事で、前後の声掛けが大事・・・後ろの人がまねしているから、登るとき、前に何があったら、危ない・・・縦の意識の声掛け、自分がその場所で OK ではない。後ろの人が安全に通れることが大事・・・自分のためではないです。後ろの人のためです。もしできなかったら、その責任は、前の人にある。あなたたち、後ろの人に対する責任を果たしてください・・・	
観察記録 41	こうやって、命をいただくことで、みんなの命が生かされていく。だから、自然、命を、もっと考えてほしいです・・・・これから、明日も、いろいろな命と出会えるとき、自然や命とどう向き合うか、どう使うか、しっかりと考えてほしい・・・	
観察記録 56	・・・いろんな出来事があったと思います・・・どんな出来事があって、自分の頭の中に何をして、どういう気持ちで見なしたかということを思い出してください・・・うまくできなかったことを振り返って、反省して、次からできるようにするというのが一番大事です。	
観察記録 58	青組勝ちましたね・・・なんで勝ったと思いますか？・・・先生は、もうね、技術とかじゃないと思います・・・これだけの大差が出たってことは、もう気持ちしかない。勝つぞっていう気持ち・・・	
観察記録 59	・・・今日青組が勝ったのは、青が速かったわけじゃない・・・黄色と赤のミスがすごく多くて、見てって分かるでしょう・・・カーニバル本番に向けて、今の分、よしよし、出ると思ってったら、本番もし赤と黄色のミスがなかったとしたら、接戦になるよ・・・ぎりぎりの勝負っていうのはやはりそれ経験しないと力にならない・・・だから、やっぱり、あなたたちが、気を抜いたらいけない・・・今以上にもっと速くできないかなと、しっかり意識していく。それが大事・・・	
観察記録 60	・・・で、みんなはたくさんのことを学んだと思います。例えば、チームの仲間と力を合わせて、心ひとつで頑張ることとか、チームの中で、自分の役割を果たすことの大切さなど・・・それぞれいろんなことを感じ取ったと思います。この経験はね、次のうれしのカーニバル、生かしてほしいなと思います・・・	

以上のように、活動後、振り返りをすることで、子供たちの行動や考えをよいところに導くのである。子供たちも、先生の話を聞きながら、自分の足りないところやよいところを改めて認識し、これからどう行動すべきかを自ら考えるようになると推測できる。

第三に、活動中の先生の行動を「指摘教育」、「介入援助」、「事後教育」、「賞賛」、「参加支援」、「事後注意」とラベル付けした。具体的には以下のような事例がある。

〈エピソード3〉　ラベル：指摘教育

状況：なかよし遠足中、随行の Mz 先生は、私のことを「外国人」と呼び続ける 2 年生の J くんに話をしているところである。（2016/05/13）

Mz 先生：その外国人って言い方、失礼でしょう。先生と呼んで・・・

エピソード3において、Mz先生は、子供の問題行動を直ちに指摘し、教育した。このように、活動中、直接に問題行為を指摘し、教育する行動を「指摘教育」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：指摘教育		
観察記録番号	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 7	ダメ、ダメ、踏みつぶさない、命あるもの。	活動中、直接に問題行為を指摘し、教育する。
観察記録 11	その外国人って言い方、失礼でしょう。先生と呼んで・・・	
観察記録 39	①どうしてケガしたか、考えてください、みんなが心配するだろう。 ②違うだろう。不注意だから滑っただろう。	
観察記録 42	なんで、ここの生き物を加東市に持って帰らなきゃならないの。自然という言葉をもっと理解しなさい。	
観察記録 47	何で挨拶しなかったの？ここに来る意味があるの？ちゃんと考えてください。	
観察記録 48	・・・これをゴミとして置いていくの？・・・・誰が捨てたかは問わない。ただし、君らの中で、まだそのようなことをする人がいることを忘れないでください・・・	
観察記録 49	はやく。みんなが待っているでしょう。もっと周りのことを考えなさい。	
観察記録 54	近くに言わないとわからないでしょう。	

活動中、直接に問題行為を指摘し、教育することを通して、子供たちに、自分の行動はよくないと認識させているのである。

それから、活動中の「介入援助」について、以下のような例が挙げられる。

〈エピソード4〉　ラベル：介入援助

状況：なかよし遠足の顔合わせ会で、随行の先生が子供たちに感想を聞くとき、K 先生はペアである F くんと G くんに向かって、話をしているところである。（2016/04/25）

F くん：僕は、僕のペアがはしゃぎ回るので今回はちょっとしんどいかなと思いました。
G くん：ごめんなさい。
K 先生：そうですか？ペア（G くんに向かって）は楽しかったですか？
G くん：楽しかったです。
K 先生：よかった。楽しかったって言いましたよ。（F くんは納得したように頷いた。）

エピソード4において、FくんとGくんの対話から、関係の構築はいつもうまくいっているわけではないことが分かる。4年生は、2年生の面倒を見てあげたり、助けてあげたりすることが、しんどいとか、面倒くさいとかの考えがあるのも当然のことである。だから、FくんはGくんとのやり取りの中で、しんどいと感じて、それを正直に言った。Gくんは、自分の行動が先輩に迷惑をかけたことに気付き、「ごめんなさい」と謝った。このような葛藤に対して、K先生は、先輩に迷惑をかけたGくんを責めるのではなく、Gくんがはしゃぎ回る原因を考えてから、Gくんが楽しいからはしゃいだことをFくんに分かってもらうために、わざとGくんに楽しかったかと質問した。Gくんに自分の気持ちを言わせることで、FくんにGくんは楽しいからはしゃいだと理解させているのだ。「よかった。楽しかったって言いましたよ」といったのも、しんどいけど、Fくんの努力には価値があるとFくんのことを認めている。そうすることで、Fくんも改めてGくんの気持ちを考えて、理解することができたと考える。ここで、K先生の行動は、FくんとGくんの仲間関係の構築で、お互いが理解しあう架け橋になったと考察できる。

このように、活動中、子ども同士の間で起きた問題を解決するために、お互いが理解しあうように手助けする行動を「介入援助」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：介入援助		
観察記録番号	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 4	①そうですか？ペアは楽しかったですか？ ②よかった。楽しかったって言いましたよ。	活動中、子ども同士の間で起きた問題を解決するために、お互いが理解しあうように手助けする。

以上のように、活動中、子ども同士の間で起きた問題を解決するために、お互いが理解しあうように力を入れる介入援助を通して、子供たちの関係構築にチャンスを与えていると考える。子供たちも、先生の介入で、仲間関係の構築がうまくいかないときに、再び相手のことを考えるようになって、お互いが仲間になれるために、落ち込まずに努力すると推測する。

次は、活動中の「事後教育」という関わり方について、以下のようなものが挙げられる。

〈エピソード5〉　ラベル：事後教育

状況：2年生のTくんは指示に従わず、自己紹介しなかったし、踊らなかった。リーダーとしてのRくんはTくんの行動を見て、いろいろ頑張ったが、活動後S先生に呼び出された。(2016/05/18)

Tくんは自己紹介をしたくないように、ただ笑っていた。ほかの子は、Tくんの発言を待っていたが、Tくんはなかなか自己紹介をしない。すると、5年生のリーダーRくんはTくんに近づき、「早く立って自己紹介しな」と、両手を伸ばし、Tくんの両脇に挟み、Tくんを立てらせようとした。しかし、Tくんは動かないまま。ほかの子供も勧めに来て、Tくんに話をかけたりした。みんなTくんを抱きながら、立てらせようとしたが、今度、Tくんは床に横になった。Rくんは「みんなが待っているよ」と言ったが、Tくんは聞かないままだった。私の隣にいるS先生もそれを見ていたが、何の行動も取らなかった。・・・班行動が終わった後、TくんとRくんのやりとりを見ていたS先生はRくんを呼び出した。

活動後のインタビュー　(Q:筆者　S：黄組の先生)

Q：さき、赤い服を着ている男の子に何を教えたのですか？

S：あの子は高学年なんで、5年生なんで、5年生の人と、意識は全然違って、ほかの学年と、同じような意識でやってたから、あなたやってることは1年生、2年生、3年生、4年生と一緒だよ、5年生として、何できるのと話ししたんです。

エピソード5において、S先生はRくんとTくんの間で起こっていることを見て、何の行動も取らなかった。そして、活動後、R君を呼び出して、Rくんに高学年生として、5年生であることを自覚し、責任をもって、役割を果たすべきだと改めて意識させていると分かる。このように、活動中、子供同士の間で起きた問題に介入しないで、活動後で教育する行動を「事後教育」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：事後教育		
観察記録番号	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録17	あなたやってることは1年生、2年生、3年生、4年生と一緒だよ、5年生として、何できるの？	活動中、子供同士の間で起きた問題に介入しないで、活動後で注意する。

活動中、子供同士の間で起きた問題に介入しないで、活動後で注意するというかかわり方は、子供に、問題に直面した時、どうすればいいかを考えさせて、体験させることを通して、子供の問題を解決する力を鍛えていると推測できる。

それから、活動中、「賞賛」という関わり方について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード6〉　ラベル：賞賛

状況：なかよし遠足の途中、随行のMz先生は歩き疲れた4年生のために、背中を押してあげた2年生のJくんを褒めてやった。（2016/05/13）

（Jくんは止まっていた4年生のKくんの背中を押しながら、坂を上っていた）
Mz先生：お、すごいな、4年生を助けるなんて。
（J君はもっと力を入れて、4年生と一緒に前に進んでいった。）

注：（　）内には、状況説明である。

エピソード6において、Mz先生は子どものよいところを褒めてあげた。そうすることで、Jくんはもっと頑張るようになった。このように、活動中子供たちのやりとりを見て、子供のよいところを褒めることで、子供の行動意欲を高める行動を「賞賛」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：賞賛		
観察記録番号	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録10	お、すごいな、4年生を助けるなんて。	活動中、子供たちのやりとりを見て、子供のよいところを褒めることで、子供の行動意欲を高める。

以上のように、活動中、子供たちのやりとりを見て、子供のよいところを褒めることでは、子供の行動意欲を高めることができるのである。

次は、活動中の「参加支援」というかかわり方について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード7〉　ラベル：参加支援

状況：綱引き大会が始まった。各組の先生たちは子供のために応援するときのこと。青組のY先生は一所懸命に応援した。（2016/06/02）

・・・3人の青組の先生は青い旗を持って、子どもたちが引っ張っていく方向に旗を強く振っていた。声を嗄らして応援しながら、両手で旗を強く握りしめ、風音の聞こえる力で、旗を振っていた。私に一番近いY先生は、顔が真っ赤になって、目を大きくして、まるで自分が綱を引いているように息が荒っている。・・・Y先生は後ろに行って、旗を振りながら、子どもたちを見て、大きな声を出して、応援

してあげた。気持ちが抑えられないように、地面に跪き、声を嗄らしても、子どもに何かを話している。そして、Y 先生だけではなく、他の先生たちも同じ、紅組の先生たちも、一所懸命に旗を振っていた。

エピソード7において、Y先生たちがチームの一員として、仲間として、子供たちのために一所懸命応援していた。青組、紅組、黄組、いずれにしても教師と子供で成り立っている。そして、組の中には、1年生から6年生までの子供がいる。1年生みたいな活動になれていない子供に対して、教師たちは見守ったり、支えたりする役割がある。また、活動をどう行うべきかも指導しなければならない。このように、チームの一員として、仲間として、一緒に活動しながら、子供の活動を支える行動を「参加支援」とラベル付けした。観察記録から切り出したものは以下のとおりである。

ラベル：参加支援		
観察記録番号	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 22	なし	チームの一員として、仲間として、一緒に活動しながら、子供の活動を支える。
観察記録 52	なし	

以上のように、先生たちはチームの一員として、仲間として、一緒に活動しながら、子供の活動を支えるのである。このようなかかわり方を通して、教師は生徒との関係の構築もできるし、子供たちが安心に活動することもできる。

それから、活動中、「事後注意」という関わり方について、以下のような例が挙げられる。

〈エピソード 8〉　ラベル：事後注意

状況：なかよし遠足で、班活動の後、みんな集合して、随行の Mo 先生の話を聞いているところである。(2016/05/13)

Mo 先生：生き物を持っている人は、アメリカザリガニなら、事務所の人に報告をすれば、持って帰ることができます。でも、もって帰ったら、必ず、最後まで大切に育てて、死ぬところを見て、土に返してあげてください。それが約束だそうです。で、それ以外の植物や生き物は、置いて、持って帰らないでください。池で捕まった生き物は、池に返してあげてください。いいですか？

エピソード8において、班活動の後、Mo先生は、子供に注意すべきことを教えている。そこで、活動後、注意すべきことを教える行動を「事後注意」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：事後注意		
エピソード番号	言葉の具体例	行動の特徴
エピソード 15	生き物を持っている人は、アメリカザリガニなら、事務所の人に報告をすれば、持って帰ることができます。でも、もって帰ったら、必ず、最後まで大切に育てて、死ぬところを見て、土に返してあげてください。それが約束だそうです。で、それ以外の植物や生き物は、置いて、持って帰らないでください。池で捕まった生き物は、池に返してあげてください。いいですか？	活動後、注意すべきことを教える。

このように、事後注意することで、子供が正しく行動するように意識させているのである。

以上の分析を踏まえて、さらに、活動前、活動中、活動後という三つの時期に分けて、まとめてみると表2-1が示しているようになる。

表 2-1　教師の関わり方

時期	行動形態カテゴリー	行動形態カテゴリーの特徴	観察記録番号	頻度
活動前	事前誘導	活動が始まる前に育成したいもの、言い換えればこの活動の目的や意義を言葉で誘導し、子供に意識させる。	3、26、28、29、32、34、35、41	8
活動中	指摘教育	活動中、直接に問題行為を指摘し、教育する。	7、11、39、42、47、48、49、54	8
	介入援助	活動中、子ども同士の間で起きた問題を解決するために、お互いが理解しあうように手助けする。	4	1
	事後教育	活動中、子供同士の間で起きた問題に介入しないで、活動後で注意する。	17	1
	賞賛	活動中、子どもたちのやりとりを見て、子供のよいところを褒めることで、子供の行動意欲を高める。	10	1
	参加支援	チームの一員として、仲間として、一緒に活動しながら、子供の活動を支える。	22、52	2
	事後注意	活動後、注意すべきことを教える。	15	1
活動後	事後反省	活動後、活動について、子供たちと一緒によいところやよくないところなどを検討し、次の活動に生かすため、注意すべきことや大事なことを教える。	23、25、31、33、41、56、58、59、60	9

小結：

教師の関わり方について、活動前の「事前誘導」、活動中の「指摘教育」、「介入援助」、「事後教育」、「賞賛」、「参加支援」、「事後注意」と活動後の「事後反省」が見られた。一番多いのは事前誘導（8）、事後反省（9）、と指摘教育（8）だった。以上のような関わり方を通して、先生たちは子供たちの思考力や行動力を鍛えていることが考えられる。また、子供たちも先生たちの指導を受けて、徐々に自ら問題を考えて、自分で解決するように自立していくのである。

第二節　教師の言動から見られる「育成したいもの」

まず、観察記録から教師の言葉と行動を取り出して、その言葉と行動から、何を育成しているかを分析し、ラベル付けをする。異年齢交流活動の社会性育成機能を研究するものであるため、子供たちの行動に「年齢指向」を入れることにする。「年齢指向」というのは、何年生が何年生のために行動を取ったという意味である。その後、またカテゴリー化する。

第一に、「関わる力の育成」について、以下のような事例があげられる。

〈エピソード1〉　ラベル：関わる力の育成

状況：なかよし遠足の顔合わせ会で、随行のX先生が子どもたちの前に自己紹介をしているところである。（2016/04/25）

X先生：・・・4年生のみなさんとはあまり関わりがなかったので、はじめてでどうなるのかなって楽しみにしています。で、2年生のみなさんとは1年生の時によく会いましたよね・・・えっと、今年も4年生のみなさんと、一緒に、2年生の人とどういう関わりができるのかな、そして、遠足場所もちょっと今年変わっていますので、4年生がどんなリードしてくれるかな、楽しみにしておりますので、みなさん、一緒に楽しみにしましょう。

エピソード1において、X先生は子どもに向かって「関わり」という言葉を2回も言った。子どもに仲間や先生との関わりを期待しているというメッセージを伝えている。このように、本番の活動が始まる前に、仲間関係の構築において、他人との関わりを促す行動を、「関わる力の育成」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：関わる力の育成			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録3	4年生	・・・4年生のみなさんとはあまり関わりがなかったので、はじめてでどうなるのかなって楽しみにしています・・・今年も4年生のみなさんと、一緒に、2年生の人とどういう関わりができるのかな・・・	仲間関係の構築において、他人との関わりを促す。

以上のような行動を通して、先生たちは子供に他人との関わる力を育ちたいと分かる。
それから、「命の教育」という育成したものについて、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード2〉　ラベル：命の教育

状況：なかよし遠足の途中、子供たちは道端で毛虫を発見した時、随行のMz先生は子どもが毛虫を踏みつぶさないように阻止しているところである。（2016/05/13）

Mz先生：ダメ、ダメ、踏みつぶさない、命あるもの。

Mz先生は小さくても、それは命、命あるものを大事にするという、命の大切さを知ると子供に教えている。このように、命を大事にすると教える行動を「命の教育」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：命の教育			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 7	対 4・2 年生	ダメ、ダメ、踏みつぶさない、命あるもの。	他の生き物の命を大事にすると教えたり、自分の命も大切にすると教えたりする。
観察記録 15	対 4・2 年生	・・・でも、もって帰ったら、必ず、最後まで大切に育てて、死ぬところを見て、土に返してあげてください・・・池で捕まった生き物は、池に返してあげてください・・・	
観察記録 41	対 5 年生	①・・・命をいただくときに、自分も命であることを考えておく。魚も命です・・・ ②こうやって、命をいただくことで、みんなの命が生かされていく。だから、自然、命を、もっと考えてほしいです・・・・これから、明日も、いろいろな命と出会えるとき、自然や命とどう向き合うか、どう使うか、しっかりと考えてほしい・・・	
観察記録 42	対 5 年生	なんで、ここの生き物を加東市に持って帰らなきゃならないの。自然という言葉をもっと理解しなさい。	

このように、他の生き物の命を大事にすると教えたり、自分の命も大切にすると教えたりすることで、子供たちに「命」という「実感」を与えていると考える。

次は、「自尊感情の育成」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード3〉　ラベル：自尊感情の育成

状況：なかよし遠足の途中、随行のMz先生は歩き疲れた4年生のために、背中を押してあげた2年生のJくんを褒めてやった。（2016/05/13）

（Jくんは止まっていた4年生のKくんの背中を押しながら、坂を上っていた）
Mz先生：お、すごいな、4年生を助けるなんて。
（J君はもっと力を入れて、4年生と一緒に前に進んでいった。）

注：（　）内には,状況説明である。

エピソード3において、Mz先生は4年生を助ける2年生を褒めてやったから、先生の褒め言葉を聞いたJくんは、自分の行動には価値があるとかの考えでもっと頑張るようになった。このように、子供たちの努力やいいところを認めて褒める行動を「自尊感情の育成」と、ラベル付けした。自尊感情とは、自分には価値があり尊敬されるべき人間であると思える感情のこと。子どもの自尊感情は、教師の褒める行為から得られる。

ラベル：自尊感情の育成			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録4	対4年生	よかった。楽しかったって言いましたよ。	子供たちの努力やいいところを認めて褒める。
観察記録10	対2年生	お、すごいな、4年生を助けるなんて。	
観察記録23	対5年生	全力を出したなら、それでいいです。先生は、みんなが頑張ったから、嬉しいです。	
観察記録58	対全員	青組勝ちましたね・・・なんで勝ったと思いますか？・・・先生は、もうね、技術とかじゃないと思います・・・これだけの大差が出たってことは、もう気持ちしかない、勝つぞっていう気持ち・・・	

以上のように、子供たちの努力やいいところを認めて褒めることで、子供たちは自分の努力には価値があると自己肯定し、次また頑張るように努力するのではないか。

それから、「社会生活上のマナーの育成」について、以下のようなものが挙げられる。

〈エピソード4〉　ラベル：社会生活上のマナーの育成

状況：なかよし遠足中、随行のMz先生は、私のことを「外国人」と呼び続ける2年生のJくんに話をしているところである。（2016/05/13）

Mz先生：その外国人って言い方、失礼でしょう。先生と呼んで。（少し膝を曲げて、Jくんを見て真剣に話をした）

このように、社会生活上に必要な礼儀やマナーを教える行動を「社会生活上のマナーの育成」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：社会生活上のマナーの育成			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 11	対 2 年生	その外国人って言い方、失礼でしょう。先生と呼んで・・・	社会生活上に必要な礼儀やマナーを教える。
観察記録 47	対 5 年生	何で挨拶しなかったの？ここに来る意味があるの？ちゃんと考えてください。	

以上のように、失礼な言い方とか、挨拶しないとか、指摘して、よい人間関係の構築に必要とする社会生活上に必要な礼儀やマナーを教えているのである。

次は、「集団意識の育成」について、以下のようなものが挙げられる。

〈エピソード5〉　ラベル：集団意識の育成

状況：綱引き大会が終了し、青組のV先生は子どもと今回の試合について話している。（2016/06/02）

V 先生：・・・みんな力を出す時、周りの人を見ていましたか？周りの人と力を合せましたか？・・・一人の力では何もならない。自分のことばかり考えてはだめです。周りの人のことも考えて、合わせる気持ちを大切にするのが大事です・・・

集団意識とは、仲間のことを思って、あるグループの一員としての自覚を持って行動しようとする思いのことである。エピソード5から、子供たちに周りの人、仲間のことを考えて、みんなと力を合わせて頑張ることが大事だと伝えている。このように、自分のことだけを考えるのではなく、自分勝手な行動をせずに、仲間のこと、集団のことを意識しながら行動すると教える行動を「集団意識の育成」とラベル付けした。

ラベル：集団意識の育成			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 23	対 4 年生	みんな力を出す時、周りの人を見ていましたか？周りの人と力を合せましたか・・・一人の力では何もならない。自分のことばかり考えてはだめです。周りの人のことも考えて、合わせる気持ちを大切にするのが大事です。	自分のことだけを考えるのではなく、自分勝手な行動をせずに、仲間のこと、集団の
観察記録 28	対 5 年生	今日、何かをするというと、一体感、リズムを覚えることです。みんなと一緒に走るとき、隣の人のことを考えるのが重要です。	

観察記録 29	対 5 年生	だから、周りの人と一緒に、前後左右、どのように走っているかを見ていく。	ことを意識しながら、みんなと協力して行動すると教える。
観察記録 31	対 5 年生	隊列は意味がある。声をかけたり、ペースを合わせたりすることです。	
観察記録 32	対 5 年生	トラブルに巻き込まれないように、チーム、集団の力としての自分の力、班の力、みんなと協力して、しっかり頑張っていきましょう。	
観察記録 33	対 5 年生	意味も分からずに、ただ、声を出すのではなく、仲間意識を高まる声掛けを意識してください・・・	
観察記録 60	対全員	チームの仲間と力を合わせて、心一つで頑張ることとか。	

以上のように、集団意識を教えることで、子供たちが社会生活を送るとき、周りのこと、社会のことを考えて行動するようにさせるためだと考える。

次は、「自己管理能力」の育成について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード6〉　ラベル：自己管理能力の育成

状況：業前ランニングが始まる前に、W先生は子供たちに体のことや目標を立てて走ることを教えている。（2016/06/10）

W先生：・・・ランニングをするとき、何が大事なのか、考えてみて・・・ランニングをするのは、自分の体のことを考えながら、動いていくことです。自分の心と体をどのように転換するか、どのように扱うのが大事です。走る前に、自分の体調をよく考えて、どこまで走れるかを考えておく必要もあります。では、今回の業前ランニングで、何を目標とするか、目当てを立ててみてください・・・自分のその目当てを考えながら、走りましょう・・・

W先生は、自分の体、自分の体調や能力を考えて走ると教えている。また、走る前に子供に目標を持たせるのは、走るモチベーションや意欲を高めるためだと考える。このように、自分の身体状態、心理状態を注意し、目的（目標）を意識しながら行動すると促す行動は「自己管理能力の育成」とラベル付けした。自己管理能力とは、自分をどう律し、どう管理し、体調や精神面などをコントロールして、行動するという自己を管理する能力のことである。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：自己管理能力の育成			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 26	対 5 年生	ランニングをするのは、自分の体のことを考えながら、動いていくことです。自分の心と体をどのように転換するか、どのように扱うのが大事です。走る前に、自分の体調をよく考えて、どこまで走れるかを考えておく必要もあります。では、今回の業前ランニングで、何を目標とするか、目当てを立ててみてください・・・自分のその目当てを考えながら、走りましょう・・・	自分の身体状態、心理状態を注意し、目的（目標）を意識しながら行動すると促す。
観察記録 32	対 5 年生	体を整えることは大事だけど、心構えをするところを整えることも大事です。	
観察記録 35	対 5 年生	登り方の技術、まずは、自分はどのぐらいの体力があるか。自分、今はどんな調子なのか。	
観察記録 59	対 5 年生	だから、やっぱり、あなたたちが、気を抜いたらいけない・・・今以上にもっと速くできないかなと、しっかり意識していく・・・	

以上のように、自分の身体状態、心理状態を注意し、目的（目標）を意識しながら行動すると促すという自己管理能力の育成を通して、将来、子供たちが社会に進出するときに、心身の状況で問題を起こすことも少なくなると考えられる。

次は、「役割遂行能力の育成」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード7〉　ラベル：役割遂行能力の育成

状況：玉入れ大会が終わり、青組のY先生は今回の試合について子どもに話している。（2016/06/23）

Y 先生：・・・やっぱりその役割っていうのは、大事です。だけど、今までは、それをあなたたちはしていなかった・・・林間学校で、学校の生活をつなげていくよって、それだけじゃなくて、学校の生活の中でも、5 年生が意識してやっていることが、この色別の活動の中に、繋がっていく・・・

エピソード7から、Y先生は、子供に役割を果たすことが大事だと教えていることがわかる。そこで、子供に自分の役割を意識させて、役割を果たすと促す行動を「役割遂行能力の育成」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：役割遂行能力の育成			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 3	対 4 年生	4 年生がどんなリードしてくれるかな、楽しみにしております・・・	子供に自分の役割を意識させて、役割を果たすと促す。
観察記録 25	対 5 年生	・・・やっぱりその役割っていうのは、大事です。	
観察記録 29	対 5 年生	・・・声掛けは、必要な時と必要ではないときがあります・・・みんなはそれぞれの役割がある。自分の役割を意識して、自分はなんでここにいるのかな、どういうことをすればいいのかな、それを意識しながら走りください。	
観察記録 31	対 5 年生	林間学校に当たっては、それぞれの良さ、それぞれの役割があって、みんなで一貫になって、登っていく。	
観察記録 32	対 5 年生	・・・トラブルに巻き込まれないように、チーム、集団の力としての自分の力、班の力、みんなと協力して、しっかり頑張っていきましょう。	
観察記録 54	対 5 年生	・・・座らせて・・・近くに言わないとわからないでしょう・・・	
観察記録 60	対全員	チームの中で、自分の役割を果たすことの大切さなど。	

子供に自分の役割を意識させて、役割を果たすと促すという役割遂行能力の育成を通して、将来、子供は自分の仕事や役目などを責任もって、うまくすると推測できる。

次は、子供たちの「責任感の育成」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード8〉　ラベル：責任感の育成

状況：業前ランニングが終わった後、Mu先生は子供たちに向かって、話をしている。（2016/06/20）

Mu 先生：・・・登るとき、前に何があったら、危ない・・・自分がその場所で OK ではない。後ろの人が安全に通れることが大事・・・意味も分からずに、ただ、声を出すのではなく、仲間意識を高まる声掛けを意識してください・・・自分のためではないです。後ろの人のためです。もしできなかったら、その責任は、前の人にある。あなたたち、後ろの人に対する責任を果たしてください。自分のためにできることではなくて、ほかの人のためです。

Mu 先生は、子供に声掛けは自分のためではなく、仲間のためである。前に歩いている人は、後ろの人の安全を確保する責任がある。責任をもって声掛けをする必要があると教えている。このように、子供に自分の持っている責任を意識させる行動を「責任感の育成」とラベル付けした。

ラベル：責任感の育成			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 17	対 5 年生	あなたやってることは 1 年生、2 年生、3 年生、4 年生と一緒だよ、5 年生として、何できるの。	子どもに、自分の持っている責任を意識させる。
観察記録 29	対 5 年生	自分が声をかけないといけないと思うとき、声を出す。	
観察記録 33	対 5 年生	・・・あなたたち、後ろの人に対する責任を果たしてください。自分のためにできることではなくて、ほかの人のためです。	
観察記録 34	対 5 年生	自分の歩き方は、後ろの人に伝わっていくから・・・そういう安全面の目を使って、後ろの人の体調、元気かな、気を付けることが大事・・・	

以上のように、子どもに、自分の持っている責任を意識させることで、子供の責任感を育成しているのは間違いないのである。

次は、子供の「規範意識の育成」について、以下のような事例があげられる。

〈エピソード9〉　ラベル：規範意識の育成

状況：林間学校の二日目の時のことだった。頂上でみんな昼ご飯を食べた後、随行のMu先生は地面で二つ飲みかけのミネラルウォーターを発見し、それについて子供たちに話をしているところである。（2016/06/27）

Mu：・・・これをゴミとして置いていくの？・・・・誰が捨てたかは問わない。ただし、君らの中で、まだそのようなことをする人がいることを忘れないでください・・・
（ミネラルウォーターを手でもって、みんなの前に示す。）

注：（　）内には，動作を示す。

エピソード 9 において、Mu 先生は子どものゴミ捨て問題を指摘し、子どもに注意をしている。Mu 先生の話から、戸外で食べるときは、自分のゴミを片付けて持って帰るべきだという意識を子供たちに教えていることが分かる。このように、社会生活上で守るべき規則やルールなどを教える行動は「規範意識の育成」とラベル付けした。そして、観察記録から取り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：規範意識の育成			
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の特徴
観察記録 15	対 4・2 年生	生き物を持っている人は、アメリカザリガニなら、事務所の人に報告をすれば、持って帰ることができます・・・で、それ以外の植物や生き物は、置いて、持って帰らないでください・・・	社会生活上で守るべき規則やルールなどを教える。
観察記録 42	対 5 年生	なんで、ここの生き物を加東市に持って帰らなきゃならないの。自然という言葉をもっと理解しなさい。	
観察記録 48	対 5 年生	・・・これをゴミとして置いていくの？・・・・誰が捨てたかは問わない。ただし、君らの中で、まだそのようなことをする人がいることを忘れないでください・・・	

以上のように、社会生活上で守るべき規則やルールなどを教えることで、将来、子供が社会に進出するとき、一般的な問題を起こすことも少なくなると考える。例えば、無礼な言い方で相手との関係を悪化させるとか、ゴミを適当に捨てることで、他人に嫌われるとか。

次は、子供の「思いやりの育成」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード 10〉 ラベル：思いやりの育成

状況：終業式で、C 先生が話をしているところである。（2016/07/20 ）

C 先生：明日から夏休みが始まります・・・この長い休みに、C 先生からみなさんにしてもらいたいことが一つだけあります・・・それはですね、おうちの人のお手伝いをしてほしい・・・お部屋の掃除でもいいですし、片付けでもいいです・・・何でもいいですから、何か手伝うことを見つけてそれを、できれば毎日してください・・・おうちの人は皆さんのためにいろんなことをしてくれています・・・今度は皆さんの方から・・・何かできることをしてあげてください。

エピソード10において、C先生は、子供たちに、自分のためにいろいろしてくれた家族のために、何かしてあげてほしいと伝えた。思いやりとは、他人のために気遣ったり、配慮したり、心配をかけないように心構えをしたりする気持ちであるから。J先生が教えたいことはそれに相応する。そこで、他人のことを思って、気を配ってあげたり、相手が喜ぶようなことをしてあげたりすると促す行動を「思いやりの態度の育成」とラベル付けした。

ラベル：思いやりの態度の育成			
観察記録番号	年齢指向	言動の具体例	行動の特徴
観察記録 34	対 5 年生	業前ランニングの時、隣の人、前の人、後ろの人、体の心配をしてあげる。今はどうですかって。	他人のことを思って、気を配ってあげたり、相手が喜ぶようなことをしてあげたりすると促す。
観察記録 35	対 5 年生	そして、後ろの人はどうなのか。顔色はとか、汗の量とか、そういうところをちゃんと見なさい。	
観察記録 39	対 5 年生	どうしてケガしたか、考えてください、みんなが心配するだろう。	
観察記録 49	対 5 年生	はやく。みんなが待っているでしょう。もっと周りのことを考えなさい。	
観察記録 56	対全員	おうちの人は皆さんのためにいろんなことをしてくれています・・・今度は皆さんの方から・・・何かできることをしてあげてください。	

このように、思いやりの態度の育成を通して、将来、子供が他人の気持ちを無視し、自己中心的な考えで行動することが少なくなれると考える。

以上の分析を踏まえて、教師の育成したいものを表 2-2 のようにまとめた。

表 2-2　教師の育成したいもの

行動形態カテゴリー	行動形態の特徴	年齢指向（頻度）	観察記録番号
関わる力の育成	仲間関係の構築において、他人との関わりを促す。	対 4 年生（1）	3
命の教育	他の生き物の命を大事にすると教えたり、自分の命も大切にすると教えたりする。	対 4・2 年生（2） 対 5 年生（2）	7、15、41、42
自尊感情の育成	子供たちの努力やいいところを認めて褒める。	対 4 年生（1） 対 2 年生（1） 対 5 年生（1） 対全員（1）	4、10、23、58
社会生活上のマナーの育成	社会生活上に必要な礼儀やマナーを教える。	対 2 年生（1） 対 5 年生（1）	11、47
集団意識の育成	自分のことだけを考えるのではなく、自分勝手な行動をせずに、仲間のこと、集団のことを意識しながら、みんなと協力して行動すると教える。	対 4 年生　（1） 対 5 年生（5） 対全員（1）	23、28、29、31、32、33、60

自己管理能力の育成	自分の身体状態、心理状態を注意し、目的（目標）を意識しながら行動すると促す。	対5年生（4）	26、32、35、59
役割遂行能力の育成	子供に自分の役割を意識させて、役割を果たすと促す。	対4年生（1） 対5年生（5） 対全員（1）	3、25、29、31、32、54、60
責任感の育成	自分の持っている責任を意識させる。	対5年生（4）	17、29、33、34
規範意識の育成	社会生活上で守るべき規則やルールなどを教える。	対4・2年生（1） 対5年生（2）	15、42、48
思いやりの態度の育成	他人のことを思って、気を配ってあげたり、相手が喜ぶようなことをしてあげたりすると促す。	対5年生（4） 対全員（1）	34、35、39、49、56

小結：

以上のように、教師たちは「関わる力の育成」、「命の教育」、「自尊感情の育成」、「社会生活上のマナーの育成」、「集団意識の育成」、「自己管理能力の育成」、「役割遂行能力の育成」、「責任感の育成」、「規範意識の育成」、「思いやりの態度の育成」を育成したいことが分かった。

第三章　子供の言動から見られる「社会性の育成」に関する分析

第一節　各観察記録から見られる子どもの「行動形態」

子どもの言葉と行動に注目して、子どもの言葉を取り出して、分かりやすいように、年齢指向（何年生が何年生のために行動を取った）や行動の説明（何が起きたか）を加える。行動説明をした後、その行動にはどんな特徴があるかを分析し、ラベル付けを行う。最後、その行動から何を身に付けているかも分析し、ラベルを付けて、カテゴリー化する。

〈エピソード1〉　ラベル：注意する行動

状況：なかよし遠足の途中、私の前に歩いている4年生の女の子Hさんは仲間の安全のために、いろいろ注意してあげた。（2016/05/13）

・・・前方に歩いていた2年生の男の子が道端にある溝に落ちたみたい。すると、私のすぐ前に歩いている4年生のHさんは、大きな声で「4年生は2年生と位置を交換しましょう」と言って、自分のペアの内側に歩くことにした・・・途中、「よそ見しないでね」とか、「危ないから、走らない」とか、他の2年生のことをずっと留意していた。

Hさんは、仲間が危険にさらさないように、「よそ見しないでね」、「危ないから、走らない」と注意した。このように、悪いことが起こらないように仲間に気を付けさせる行動を「注意する行動」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：注意する行動				
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録8	4年生 ↓ 2年生	①よそ見しないでね。 ②危ないから、走らない。	危険にさらさないように、呼びかけをする。	悪いことが起こらないように仲間に気を付けさせる。
観察記録14	4年生 ↓ 先生	先生、ザリガニを池に返してやって。アメリカザリガニじゃないと、捕っちゃダメ。	規則違反をしないように、話しかける。	
観察記録18	5年生 ↓ 2年生	Vくん、食べるときは食べる。	食事のマナーを守らない子に注意を促す。	
観察記録30	5年生 ↓ 5年生	①00ちゃん、少し左に走って。 ②XXちゃん、少し距離が空いているよ、もっと走って。 ③Iちゃん、左すぎ。	ランニングの隊列を崩さないように、仲間に声掛けをする。	

観察記録 38	5年生 ↓ 5年生	Fちゃん、それ以上行くとあかんで。	危険にさらさないように、呼びかけをする。	
観察記録 45	5年生 ↓ 先生	足、足。	危険にさらさないように、呼びかけをする。	
観察記録 50	5年生 ↓ 低学年生	危ない、危ない、待っててよ。	危険にさらさないように、注意する。	

以上のように悪いことが起こらないように仲間に気を付けさせるという注意する行動は、人間関係においても、仲間との間での信頼関係の構築ができると考える。注意された子供は、仲間が自分のことを思っていることも感じるのである。そして、このように、上級生が下級生に対する思いを日に日に覚えて、そのうち、下級生の子供たちも仲間のために注意する行動を取ると推測できる。そこで、お互いの絆も深まると考える。

次は、子供たちの「助ける行動」について、以下のようなものが挙げられる。

〈エピソード2〉 ラベル：助ける行動

状況：玉入れ大会が始まる前に、子供たちは地面に座って、これから試合に出る仲間たちのために、応援する準備をしていた。1 年生は落ちた仲間のはちまきを付けてあげるところである。(2016/07/07)

・・・地面に座っている1年生たちは、先輩たちを見ながら、小さな声で話し合ったりしている。そのとき、C くん（男）のはちまきが落ちた。すると、後ろの A さん（女）は鉢巻きを拾って、C くんの帽子に結びようとしていた。でも、帽子が斜めになっていて、結びにくい。そこで、C 君の隣に座っている B さん（女）は二人の様子に気付き、C 君の帽子を頭から取って、また、彼の頭にきちんと被った。A さんは鉢巻きを持って、やっと C くんの帽子に結び付いた。C くんはずっとおとなしく座っていた。

エピソード2において、A さんは C くんのために、落ちたはちまきを付けてあげようとしていたが、なかなかできない。そこで、B さんも A さんが付けやすいように、C くんの帽子を調整し、A さんを助けてあげた。このように、他人のために、助けてあげる行動を「助ける行動」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：助ける行動				
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録 1	4 年生 ↓ 2 年生	お姉さんがつけてあげる。	上級生が下級生のためにはちまきを付けてあげた。	他人のために、助けてあげる。
観察記録 4	4 年生 ↓ 2 年生	・・・4 年生がいろいろ考えてくれて、助けてくれて・・・	下級生は上級生が助けてくれたと話す。	
観察記録 8	4 年生 ↓ 2 年生	なし	歩き疲れたペアの重たい水筒を持ってあげた。	
観察記録 10	2 年生 ↓ 4 年生	なし	疲れた上級生のために、下級生が背中を押してあげた。	
観察記録 13	4 年生 ↓ 2 年生	入れる？	入れ物のない下級生のために、ペットボトルを分かち合う。	
観察記録 36	6 年生 ↓ 1 年生	いろいろ助けてくれた。	上級生が下級生を助けたという話。	
観察記録 40	5 年生 ↓ 5 年生	L ちゃん、これあげるから、捕まって。	魚を捕まえない仲間のために、自分の魚をあげた。	
観察記録 55	1 年生 ↓ 1 年生	なし	仲間のために、はちまきを付けてあげた。	

以上のように他人のために、助けてあげるという助ける行動は、ほぼ上級生が下級生のためにしているのであるが、下級生も上級生を助けることが観察できた。下級生は、上級生が自分を助けてくれた時、感じた温かい気持ちで、自分も他人を助けてあげたいという思いが生じたと推測できる。

次は、「心遣いをする行動」について、以下のようなものが挙げられる。

〈エピソード3〉　ラベル：心遣いをする行動

状況：なかよし遠足の顔合わせ会で、自己紹介した後、観察の対象である子供たちが「だるまさんがころんだ」を遊んでいるところである。4年生のＦくんは、不機嫌な2年生Ｇくんのために、自ら「鬼」になった。（2016/04/25）

ジャンケンで負けたＧくんは鬼になった（不機嫌そうにゲームをしている）。・・・中略・・・リーダーとしてのＦくんはゲームを盛り上げようと、大きな声で笑い、笑わせるような動きをした。・・・中略・・・Ｇくんはやはり笑わなかった。（一回目のゲームが終わって、2回目のジャンケンで負けたＧくんはまた鬼になった。）・・・中略・・・Ｇくんは「なんや？！また、僕か！」と怒った。・・・中略・・・Ｆくんは「じゃ、今回、僕がやりましょう」言った（Ｇくんのところに行く）。・・・中略・・・やっと、Ｇくんの笑い声が聞こえた。

注：（　）内には、状況説明である。

エピソード3において、Ｇくんははじめから鬼になったのは嫌だったことが分かる。そこで、Ｇくんの不機嫌に気付いたＦくんは、Ｇくんとみんなが楽しくゲームをやっていけるために、わざと滑稽な顔をしたり、笑わせるような行動を取ったりしたと考えられる。

ところが、Ｇくんはやはり盛り上がらなかった。そして、ゲームに負けて再び鬼になったことに苛立って、今まで溜まってきた不機嫌を「なんや？！また、僕か！」と、一気に口に出してしまったのだ。Ｇくんの怒りに対して、Ｆくんは「じゃ、今回、僕がやりましょう」を言い出したのは、リーダーだから、年上の先輩だから、上級生として、下級生が楽しくゲームに参加できるように、Ｇくんのことに気を配ってやったからと推測できる。

このように、仲間のことを思って、気を配ったり、心遣いをしたりして、相手が喜ぶような行動を取る行動を「心遣いをする行動」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：心遣いをする行動				
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録1	4年生 ↓ 2年生	痛い？	上級生が鉢巻きを付けるとき、下級生に痛まないように確認をする。	仲間のことを思って、気を配ったり、心遣いをしたりして、相手が喜ぶような行動を取る。
観察記録5	4年生 ↓ 2年生	どうしたの。	上級生が話さなくなった下級生に心配をする。	
観察記録6	4年生 ↓ 2年生	じゃ、今回、僕がやりましょう。	上級生がゲーム中、不機嫌な下級生のために、配慮しながら行動する。	

観察記録 9	4 年生 ↓ 2 年生	①ペアだから、同じものをつけてほしいと思った。 ②どうせ、あげるなら、先生にもあげようと思ったから。	上級生が自分のペアのことや先生のことを思って、腕輪を作るとき、ペアにも、先生にもあげた。	
観察記録 11	2 年生 ↓ 先生	先生、先生は疲れてないの？	下級生は自分のことを助けてくれた外国人の先生に心配をする。	
観察記録 12	4 年生 ↓ 先生	先生、お菓子食べる？	上級生がお菓子の持っていない外国人の先生にお菓子をあげる。	
観察記録 16	4 年生 ↓ 4・2 年生	①捕まえるものがあるから、僕は立つよ。 ②僕は最後でいい。	疲れた仲間のために、上級生が座席を譲る。	
観察記録 44	5 年生 ↓ 先生	なし	5 年生は外国人の先生から、全部の水は受け取らないが、半分の水だけを受けとるという配慮。	

以上のように、仲間のことを思って、気を配ったり、心遣いをしたりして、相手が喜ぶような行動を取ることは、人間関係の構築に役立てると考える。現代社会において、自己中心的な考えで振る舞う子供が減少することも考えられる。そして、ほぼ上級生が下級生のためにしていることであるが、子供がサポートする先生に対する思いやりも観察されたから、そんなに親しくない相手のためにも思いやりをすることは、筆者として、やはりお互いの距離が縮まったような感じがした。

次は、子供たちの「応援する行動」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード 4〉　ラベル：応援する行動

状況：5 年生向けの業前ランニングで、走り疲れた男の子 G くんは、ペースが落ちて、隊列から離れたときのこと。

私の前に走っている男の子 G くんは疲れて、もとの行列から離れて、一番後ろに走っていた。・・・中略・・・学校の教室から「頑張れ」「頑張って」と、ほかの学年からの応援が聞こえてきた。声の出るところを見ると、教室の窓から、何人かが手を振りながら、大声で応援していた。

エピソード 4 において、頑張っている 5 年生を見て、ほか学年の子供たちが応援してあげる行動を「応援する行動」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：応援する行動				
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録 27	他の学年 ↓ 5 年生	①頑張れ。 ②頑張って。	ランニングの隊列から離れた5年生を見て、他の学年の子供が応援をする。	頑張っている仲間のために、応援してあげる。
観察記録 46	5 年生 ↓ 5 年生	①1－2，1－2。 ②ファイト。	疲れた仲間のために、かけ声をして、応援してあげる。	
観察記録 51	1 年生 ↓ 仲間	頑張って、頑張って。	下級生が試合に出る仲間のために応援をする。	

以上のように頑張っている仲間のために、応援してあげる行為は、チームの一員としての実感や集団意識、仲間意識なども高まるし、応援させた仲間も自分の存在を感じて、自分のためにも、チームのためにも、いろいろと頑張れると考える。

それから、「指示を出す行動」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード 5〉　ラベル：指示を出す行動

状況：なかよし遠足がそろそろ終わって、子供たちはバスに乗ろうとしているところである。4 年生の P くんはバスの入り口の付近に立って、他の子供に指示を出している。（2016/05/13）

P くん：さきに入って、さっさと座り。

P くんは、他の子が順調に乗車できるように、後ろからの子供に向かって、どう行動すべきかを指示している。このように、仲間にどう行動すべきかを指示する行動を「指示を出す行動」とラベル付けした。

ラベル：指示を出す行動				
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録 8	4 年生 ↓ 4 年生	4 年生は 2 年生と位置を交換しましょう。	上級生が下級生の安全を守るため、仲間に指示を出す。	仲間にどう行動すべきかを指示する。
観察記録 16	4 年生 ↓ 4・2 年生	さきに入って、さっさと座り。	順調に乗車できるように、ほかの子供に指示を出す。	

観察記録 17	5 年生 ↓ 2 年生	早く立って自己紹介しな。	上級生が下級生に自己紹介すると指示を出す。	
観察記録 21	6 年生 ↓ 1 年生	みんな立って、前に行って。	上級生が下級生に感想を言わせるため、指示する。	
観察記録 24	5・6 年生 ↓ 仲間	①始まったら、すぐ走って。 ②あそこを回って、円になって。 ③しっかりかごを見て。	5、6 年生が活動に出る仲間に指示を出す。	
観察記録 50	5 年生 ↓ 3 年生	ちゃんと並んどいて。	上級生が隊列を守るため、下級生に指示を出す。	
観察記録 53	2 年生 ↓ 2 年生	①並んで、並んで。 ②こっちは 16 班、こっちは 13 班、そっちは 18 班。	2 年生たちが仲間に並び方を教える。	

以上のように、仲間にどう行動すべきかを指示する行動は、ほぼ上級生が下級生に対して指示を出していることが分かった。同じ学年の子供たちも、お互いに指示を出したりすることも観察できた。次は、「協力する行動」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード 6〉ラベル：協力する行動

状況:旗づくりの活動で、A くんと B さんは切り紙をどこに貼るかについて話し合っている。(2016/05/27)

A くんのいる班では、龍の切り紙のある旗を作っている。そして、その龍をどのように旗に張るか、みんな迷っていた。A くんは切り紙を持って、円の形をした紙の上に載せて、「やっぱ入れる？いれへん？」と他の子供たちに聞いた。他の子供たち（低学年）は、ハサミでかみを切ったり、のりで雲の形をしている切り紙を旗に貼ったりしている。A くんの話を聞いたら、頭を振っていた。すると、5 年生の B さんは、旗を見て「入れた方がいいね」と手で頭を支えて、眉を顰めた。A くんは龍の切り紙を持って、円の形にした紙に乗せて「こう？」、そして、重なった二つのかみを横にするか、縦にするか、弄っている。「B ちゃん、B ちゃん、龍を見て、縦の方がいいね」と B さんに話したら、B さんは、「横の方がいいかも」と悩んでいるように見えた。「こうか？」と、A くんは龍の切り紙を横に置いた。「やっぱり、縦の方がいい」と、B さんは横になった切り紙を見て、考えを変えた。「でも、班旗は斜めだよ」と、A くんは、迷っているように、切り紙を少し斜めにした。B さんは、「そうだけど・・・でも、縦の方がいいと思う」と切り紙を持って、縦のようにして、A くんに縦の場合と斜めの場合を見せた。「じゃ、縦にしよう」と、A くんは納得したように頷きながら、龍を縦にした。「みんな、どうですか？」と、A くんは龍を旗において、他の子供たちに意見を聞いていた。他の子は頷きながら、のりを渡した。

以上のように、5年生のAくん（男）と5年生のBさん（女）は、旗を作るために、切り紙の置き所を話し合いながら、決めた。このように、課題を達成するために、仲間と一緒に考えて、話し合いたりする行動を「協力する行動」とラベル付けをする。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：協力する行動				
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録19	5年生 ↓↑ 5年生	①やっぱ入れる？いれへん？ ②入れた方がいいね。 ③・・・龍を見て、縦の方がいいね。 ④横の方がいいかも。 ⑤やっぱり、縦の方がいい。 ⑥でも、班旗は斜めだよ。 ⑦そうだけど・・・でも、縦の方がいいと思う。 ⑧じゃ、縦にしよう。	旗を作るために、仲間と話し合いながら、切り紙の置き所を決める。	課題を達成するために、仲間と一緒に考えて、話し合いたりする。

このように、課題を達成するために、仲間と一緒に考えて、話し合いたりする行動は、お互いの考えを理解しあうこともできるのである。意見を交換したり、受け入れたり、自分の意見を伝えたりすることは、子供の自己主張などにもかかわっていると考える。

それから、「励ます行動」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソード7〉　ラベル：励ます行動

状況：旗づくりの活動での振り返りのことだった。1年生たちが発表できないから、6年生が1年生のために励ましてあげた。（2016/05/25）

あと、1年生の感想を聞くだけだったが、1年生のみんなは、誰も立ち上がらなかった。そのとき、6年生の女の子Cさんは「みんな恥しいなら、一緒にしたらいいです。みんな立って、前に行って」と隣の1年生に優しく声をかけた。でも、やはり誰も動かなかった。「大丈夫、行ける」「できるから」と他の6年生も1年生のところへ来て励ましてやった。「誰も言わないと、あとは言えなくなる」と床に座っていたCさんは隣の1年生Eくんに話しかけている。「みんなと同じように、自分の感想を言ったらいい」ともう一人の6年生Dさんも1年生に声をかけた・・・

注：（　）には,行動を示す。

上級生が下級生に、「大丈夫、行ける」、「できるから」、「みんなと同じように、自分の感想を

言ったらいい」などの言葉で、活動への参加を促す行動を「励ます行動」とラベル付けした。観察記録から切り出した言葉は以下のとおりである。

ラベル：励ます行動				
観察記録番号	年齢指向	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録 21	6 年生 ↓ 1 年生	①みんな恥しいなら、一緒にしたらいいです。 ②大丈夫、行ける。 ③できるから。 ④みんなと同じように、自分の感想を言ったらいい。	上級生が下級生に感想を言わせるため、励ます。	活動への参加を促すため、言葉で励ます。

このように、活動への参加を促すため、言葉で励ます行動はほぼ上級生が下級生のためにしてあげる行為である。上級生にとって、自分も 1 年生から 6 年生まで成長してきたから、下級生の気持ちも理解できるし、相手のために励ましてあげたりするのも容易にできる。そして、下級生も上級生が助けてくれたから、その時感じた温かい気持ちはきっと心に残るのであろう。

そこで、以上のラベルをまとめて、以下のような行動カテゴリーができた。

表 3-1　子供の行動形態

行動形態カテゴリー	年齢指向（頻度）	行動形態の特徴	観察記録番号
注意する行動	4 年生→2 年生（1） 4 年生→先生（1） 5 年生→2 年生（1） 5 年生→5 年生（2） 5 年生→先生（1） 5 年生→3 年生（1）	悪いことが起こらないように仲間に気を付けさせる。	8、14、18、30、38、45、50
助ける行動	4 年生→2 年生（4） 2 年生→4 年生（1） 6 年生→1 年生（1） 5 年生→5 年生（1） 1 年生→1 年生（1）	他人のために、助けてあげる。	1、4、8、10、13、36、40、55
心遣いをする行動	4 年生→2 年生（4） 2 年生→先生（1） 4 年生→先生（1） 4 年生→4・2 年生（1） 5 年生→先生（1）	仲間のことを思って、気を配ったり、心遣いをしたりして、相手が喜ぶような行動を取る。	1、5、6、9、11、12、16、44

応援する行動	他の学年→5年生（1） 5年生→5年生（1） 1年生→仲間（1）	頑張っている仲間のために、応援してあげる。	27、46、51
指示を出す行動	4年生→4年生（1） 4年生→4・2年生（1） 5年生→2年生（1） 6年生→1年生（1） 5・6年生→仲間（1） 5年生→3年生（1） 2年生→2年生（1）	仲間にどう行動すべきかを指示する。	8、16、17、21、24、50、53
協力する行動	5年生⇔5年生（1）	課題を達成するために、仲間と一緒に考えて、話し合いたりする。	19
励ます行動	6年生→1年生（1）	活動への参加を促すため、言葉で励ます。	21

注：仲間とは試合に出る1年生から6年生までの子供のことを指す。先生とは筆者のことである。

小結：

以上のように、子供たちの行動（注意する行動、助ける行動、心遣いをする行動、応援する行動、指示を出す行動、協力する行動、励ます行動）の中に、上級生4，5，6年生が下級生のために行動を取ることが多かったが、2年生が4年生のために行動する事例も観察された。また、サポートする先生としての筆者にも思いやりしてくれたり、注意してくれたりする行動も見られた。つまり、親しくない人との間で、いろいろな行動をとることによって、仲間関係の構築が容易になると考察する。

第二節　子供の言動から見られる「身に付けたもの」

子供たちの行動形態カテゴリーをもとに、その行動形態からどんなものを身に着けているかを分析する。

「悪いことが起こらないように仲間に気を付けさせる」という注意する行動を取ったのは、自分がその場で行動しなければならないという責任感が働いているからと考えられる。そこで、身に付けたものを「責任感」とラベル付けする。

また、「他人のために、助けてあげる」助ける行動や、「仲間を応援してあげる」応援する行動は、何の利益も求めずに、相手のためになる行動をしてあげる援助行動であるため、「向社会的行動を取る傾向」として、ラベル付けした。

「仲間のことを思って、気を配ったり、心遣いをしたりして、相手が喜ぶような行動を取る」心遣いをする行動は、他人の身の上や心情に心を配る「思いやり」が働いている結果だと考えられる。そこで、「思いやりの態度」とラベル付けした。

そして、「仲間にどう行動すべきかを指示する」指示を出す行動や、「活動への参加を促すため、言葉で励ます」励ます行動は、ほぼ上級生が下級生にしていることであるため、上級生として、活動がうまくやっていけるように、自分に要求されている役割を果たしていると考えられる。そこで、「役割遂行能力」とラベル付けした。まとめてみると、表3−1のようになる。

表3−2　子どもが身に付けたもの

観察できるもの	行動形態カテゴリー	行動形態の特徴	観察記録番号
責任感（自分がその場で行動しなければならないという思い。）	注意する行動	悪いことが起こらないように仲間に気を付けさせる。	8、14、18、30、38、45、50
向社会的行動を取る傾向（何の利益も求めずに、相手のためになる行動をしてあげる。）	助ける行動	他人のために、助けてあげる。	1、4、8、10、13、36、40、55
	応援する行動	頑張っている仲間のために、応援してあげる。	27、46、51
思いやりの態度（他人の身の上や心情に心を配る。）	心遣いをする行動	仲間のことを思って、気を配ったり、心遣いをしたりして、相手が喜ぶような行動を取る。	1、5、6、9、11、12、16、44
役割遂行能力（活動がうまくやっていけるように、自分に要求されている役割を果たす。）	指示を出す行動	仲間にどう行動すべきかを指示する。	8、16、17、21、24、50、53
	協力する行動	課題を達成するために、仲間と一緒に考えて、話し合いたりする。	19
	励ます行動	活動への参加を促すため、言葉で励ます。	21

そのほか、以下のようなものも見られた。

〈エピソードA〉　ラベル：共感の発達

状況：ありがとううれしの班で、6年生に感想を言わせるとき、Cさんが泣き出した。（2016/02/23）

5年生の司会が出し物を渡すという話の後、1から5までの学年の子供たちは素早く列になって、順番に6年生に自分の作った小物を渡していた・・・活動は順序よく流れていたが、6年生の中の一人の女の子Cさんは、出し物を受けた後、泣きそうな顔をしていた。そしてほかの人の感想を聞いている途中、気持ちが抑えきれないように泣き出した。感想を言うときもずっと泣いていた。みんなと一緒に過ごした日々を忘れないとか、自分のためにいろいろしてくれた仲間たちのことを絶対に忘れないとか、話しながら泣いていた・・・彼女の話を聞いているほかの6年生も、何人か泣きそうな顔をしていた。

Cさんは昔、6年生を見送ることはあったはずだ。このような流れで、卒業していくことも分かっていた。だから、この日を迎えるために、心の準備はしていたと考えられる。最初は泣くつもりはなかっただろう。ちゃんとみんなと別れをしたかっただろう。だから、出し物を受けるとき、泣きそうな顔をしても、我慢して泣かなかった。でも、6年生が感想を言うとき、仲間たちの話を聞いたあと、彼女は泣き出した。彼女が泣き出したのは、自分の思い出が、自分がいままで抑えてきた気持ちが、仲間の話によって、引き出されたのだ。Cさんの話から、6年間、みんなと一緒に特別活動に参加して、戦ったり、協力し合ったりすることは、とても大切な思い出であることが理解できる。1年生から成長してきて、6年間という長い間で積み重ねた思い出は、Cさんの心に大きな影響を与えただろう。それこそ、Cさんが泣いた本当の原因だと思う。そして、彼女の話を聞いているほかの6年生も、何人か泣きそうな顔をしていたのは、Cさんと同じような気持ちが生じて、一緒に経験したことだから、理解ができて、泣きそうになったからと考えられる。

このように、他者の気持ちや感情などを受け止めて、理解し、他者と同じ感情をもつことを「共感の発達」とラベル付けをした。

ラベル：共感の発達			
観察記録番号	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録2	なし	仲間の感想を聞いて、泣きたくなる仲間を見て、自分も泣きたくなる。	他者の気持ちや感情などを受け止めて、理解し、他者と同じ感情をもつ。

以上のように、他者の気持ちや感情などを受け止めて、理解し、他者と同じ感情をもつことは、一緒に活動することで、体験することで容易にできる。

それから、「自己存在感の獲得」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソードB〉　ラベル：自己存在感の獲得

状況：乗車した後、私は5年生Jさんの隣に座って、彼女と話し合っているときのこと。（2016/06/26）

私：〈・・・お姉さんやお兄さんたちがいるほうがいいですね。たくさんの人と一緒に遊ぶほうがいいですね〉

J：「いや、人数が多いと、忘れちゃう」

私：〈だれのこと？自分のこと？〉

J：「うん。ペアがおるほうがいい」

私：〈ペアか？ずっと自分のことを見てくれるから？〉

Jさんはまた頷いた。

エピソードBにおいて、ペアがいるほうがいいとJさんが言ったのは、人数が多いから、無視されるのが嫌だからと考えられる。やはり、自分のことを見てくれる人がいて、自分もいろいろ頑張れるだろう。つまり、自己存在感を求めているのである。このように、異年齢交流活動の中、他者の存在を前提に自分の存在価値を感じることを「自己存在感の獲得」とラベル付けした。

ラベル：自己存在感の獲得			
観察記録番号	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録36	①いや、人数が多いと、忘れちゃう。 ②うん。ペアがおるほうがいい。	自分のことを見てくれるペアがいるほうがいいと話す。	他者の存在を前提に自分の存在価値を感じる。

このように、他者の存在を前提に自分の存在価値を感じることは、集団活動の中で、容易に獲得できるのである。

次は、「自己有用感の獲得」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソードC〉　ラベル：自己有用感の獲得

状況：頂上まであと1/3のところで、5年生のXくんは声掛けをしているときのこと。（2016/06/27）

頂上まであと1/3のところで、後ろの隊列から大きなかけ声が伝わってきた。すると、私の前に歩いているX君も大きな声を出して「1－2，1－2」と。また、私の隊列から、何人かがX君のかけ声に応じて「ファイト」と返事をした。それを聞いて、X君はもっと大きな声で「1－2，1－2」と声を出した・・・

エピソードCにおいて、最初Xくんが「1－2，1－2」と声を出したのは、後ろの隊列から大きな掛け声の影響を受けたからと考えられる。掛け声でテンション高くなって、頑張れるとか、自分も声掛をして、疲れている仲間のために応援してあげたいとかの考えで行動したと考えられる。

そして、X くんの掛け声に応じて、後ろの子供たちが少しずつ返事をするようになったから、X くんは自分の掛け声はちゃんとみんなに届いていると思ったに違いない。だから、もっと声をあげて、掛け声をしたと考える。言い換えれば、仲間からの返事を聞いて、X くんは自分の行動は遣り甲斐があって、仲間たちの役に立ったという感じが生じたから、もっと頑張るようになったのだ。このように、他人の役に立ったという成就感を「自己有用感の獲得」とラベル付けした。

ラベル：自己有用感の獲得			
観察記録番号	言葉の具体例	行動の説明	行動の特徴
観察記録 46	1－2，1－2	仲間の返事を聞いて、もっと大きな声でかけ声をする。	他人の役に立ったという成就感。

集団活動を通して、このような他人の役に立ったという成就感も容易にできるのである。それから、「関わる力の獲得」について、以下のような事例があげられる。

〈エピソード D〉　ラベル：関わる力の獲得

状況：なかよし遠足の顔合わせ会で、先生たちが自己紹介をする途中、子供たちに感想を聞くときのこと。（2016/04/25）

D さん：えっと、昔の遠足はなんか、安全にできて、すごく楽しかったし、隣にいる人としゃべれて、仲良くできた。

H さん：あのう、自己紹介をしたときに、去年はすごく緊張したけど、今年は 4 年生がやさしいっていうか、かかわりがあってすごく楽しかったし、なかよし遠足も楽しくやっていけると思います。

I くん：自己紹介をしたときドキドキしたけど、ちゃんとペアができて楽しかったです。

J くん：みんなと仲良くできて、楽しかったです。

D さん、H さん、I くんと J くんの話から、ほかの人と仲良くなったことや、他人とかかわりができたことを確認することができる。つまり、仲間関係の構築ができたことから、子供たちは関わる力を身に付けていることも考察できる。

そして、同じように、エピソード E からも関わる力が身に付けていることが確認できる。

〈エピソード E〉ラベル：関わる力の獲得

状況：4 年 3 組の教室で、旗を作る活動の後、子供たちが振り返りをしているときのこと。（2016/05/27）

C さん：前回はみんなと関わりなかったが、今回かかわりができて、よかったと思います。

D さん：1 年生のことを見てたんだけど、去年もちょこちょこ見ていましたけど、今年班旗を作ることができてよかったです。

このように、5年生のCさんと6年生のDさんの話から、上級生が下級生と関わりができて、仲間関係の構築もできていることが分かる。

また、エピソードFから、子供が「社会生活上のマナー」と「思いやり」が身に付けていることを確認することができる。具体的には、以下のとおりである。

〈エピソードF〉　ラベル：社会生活上のマナーと思いやりの獲得

状況：終業式で、子供が自分の感想文を読んでいるところである。（2016/07/20）

Eくん：・・・僕が学んだのは、下山の時のことです。〇〇が先頭で歩いていた時、僕が声をかけるとありがとうと〇〇が言いました。僕は人にお礼を言える気持ちや思いやりは大切だということを学びました・・・

以上のように、5年生のEくんの話から、林間学校を通して、思いやりや社会生活上のマナーを覚えたことが分かる。

そして、「集団意識の獲得」について、以下のようなものが挙げられる。

〈エピソードG〉　ラベル：集団意識の獲得

状況：業前ランニングが始まる前に、W先生が話をしている時のことだった。（2016/06/17）

W先生：・・・自分の役割を意識して、自分はなんでここにいるのかな、どういうことをすればいいのかな、それを意識しながら走りください。じゃ、こんなことをするのはなぜなのか、考えてみてください。一旦、隣の人と話し合いましょう。

すると、子供たちは話し合いを始めた。数分後、「みんなのペースに合わせるためです」「後ろの人が遅れないように掛け声をします」、とかの意見が聞こえた。

W先生：3人全部周りの人のことを考えましたね・・・

以上のように、声掛けについて、子供たちが「みんなのペースに合わせるためです」とか、「後ろの人が遅れないように掛け声をします」とかを発言したことから、子供たちはすでに仲間のこと、周りのことを考えるようになっている。つまり、集団意識が備えていると言えるのである。

それから、「規範意識の獲得」について、以下のような事例が挙げられる。

〈エピソードH〉　ラベル：規範意識の獲得

状況：なかよし遠足の班行動の時のことだった。ボトルの中に濁っている水を変えようとするとき、0さんは私のところに来て、私にザリガニを池に返してと言った。（2016/05/13）

0 さん：先生、ザリガニを池に返してやって。アメリカザリガニじゃないと、捕っちゃダメ・・・看板に
書いてある・・・日本のザリガニはいいザリガニから、捕っちゃダメ。

0さんが筆者に注意をしてくれたのは、筆者が外国人だから、日本のザリガニを捕まえてはいけないことを知らないかもしれないと思って、もしそのまま持って帰ったら大変だと注意をしてくれたと考えられる。また、「看板に書いてある」と、文字を私に見せたのも分かってもらうためだと推測できる。そして、彼女の話から、0さんはザリガニを掴むルールや規則をしっかりと守っていることが分かる。言い換えれば、規範意識を備えていると言える。

小結：

以上のように、子どもの行動から、子供たちが「責任感」、「役割遂行能力」、「思いやりの態度」、「社会生活上のマナー」、「関わる力の獲得」、「集団意識の獲得」、「向社会的行動を取る傾向」、「規範意識の獲得」、「共感の発達」、「自己存在感の獲得」と「自己有用感の獲得」を身に着けていることが分かった。

終章　結論と考察

表 4－1　教師の関わり方と育成したいもの

関わり方（記録番号）	年齢指向（頻度）	育成したいもの	行動形態の特徴
事前誘導（28、29、32） 事後反省 （23、31、33、60）	対 4 年生　(1) 対 5 年生（5） 対全員（1）	集団意識の育成	自分のことだけを考えるのではなく、自分勝手な行動をせずに、仲間のこと、集団のことを意識しながら、仲間と協力して行動すると教える。
事前誘導（3、29、32） 事後反省（25、31、60） 指摘教育（54）	対 4 年生（1） 対 5 年生（5） 対全員（1）	役割遂行能力の育成	子供に自分の役割を意識させて、役割を果たすと促す。
事前誘導（34、35） 指摘教育（39、49） 事後反省（56）	対 5 年生（4） 対全員（1）	思いやりの態度の育成	他人のことを思って、気を配ってあげたり、相手が喜ぶようなことをしてあげたりすると促す。
事前誘導（41） 指摘教育（42） 事後注意（15） 事後反省（41）	対 4・2 年生（2） 対 5 年生（2）	命の教育	他の生き物の命を大事にすると教えたり、自分の命も大切にすると教えたりする。
介入援助（4） 介入賞賛（10） 事後反省（23、58）	対 4 年生（1） 対 2 年生（1） 対 5 年生（1） 対全員（1）	自尊感情の育成	子供たちの努力やいいところを認めて褒める。
事前誘導（26、32、35） 事後反省（59）	対 5 年生（4）	自己管理能力の育成	自分の身体状態、心理状態を注意し、目的（目標）を意識しながら行動すると促す。
事後教育（17） 事前誘導（29、34） 事後反省（33）	対 5 年生（4）	責任感の育成	子どもに、自分の持っている責任を意識させる。
事後注意（15） 指摘教育（42、48）	対 4・2 年生（1） 対 5 年生（2）	規範意識の育成	社会生活上で守るべき規則やルールなどを教える。
指摘教育（11、47）	対 2 年生（1） 対 5 年生（1）	社会生活上のマナーの育成	社会生活上に必要な礼儀やマナーを教える。
事前誘導（3）	対 4 年生（1）	関わる力の育成	仲間関係の構築において、他人との関わりを促す。

表 4－2　子供の行動形態と身に付けたもの

身に付けたもの	行動形態カテゴリー	行動形態の特徴	年齢指向（頻度）	観察記録番号
責任感 （自分がその場で行動しなければならないという思い。）	注意する行動	悪いことが起こらないように仲間に気を付けさせる。	4 年生→2 年生（1） 4 年生→先生（1） 5 年生→2 年生（1） 5 年生→5 年生（2） 5 年生→先生（1） 5 年生→3 年生（1）	8、14、18、30、38、45、50
向社会的行動を取る傾向 （何の利益も求めずに、相手のためになる行動をしてあげる。）	助ける行動	他人のために、助けてあげる。	4 年生→2 年生（4） 2 年生→4 年生（1） 6 年生→1 年生（1） 5 年生→5 年生（1） 1 年生→1 年生（1）	1、4、8、10、13、36、40、55
	応援する行動	頑張っている仲間のために、応援してあげる。	他の学年→5 年生（1） 5 年生→5 年生（1） 1 年生→仲間（1）	27、46、51
思いやりの態度 （他人の身の上や心情に心を配る。）	心遣いをする行動	仲間のことを思って、気を配ったり、心遣いをしたりして、相手が喜ぶような行動を取る。	4 年生→2 年生（4） 2 年生→先生（1） 4 年生→先生（1） 4 年生→4・2 年生（1） 5 年生→先生（1）	1、5、6、9、11、12、16、44
役割遂行能力 （活動がうまくやっていけるように、自分に要求されている役割を果たす。）	指示を出す行動	仲間にどう行動すべきかを指示する。	4 年生→4 年生（1） 4 年生→4・2 年生（1） 5 年生→2 年生（1） 6 年生→1 年生（1） 5・6 年生→仲間（1） 5 年生→3 年生（1） 2 年生→2 年生（1）	8、16、17、21、24、50、53
	協力する行動	課題を達成するために、仲間と一緒に考えて、話し合いたりする。	5 年生⇔5 年生（1）	19
	励ます行動	活動への参加を促すため、言葉で励ます。	6 年生→1 年生（1）	21

そのほか：思いやり、社会生活上のマナー（観察記録 57）、関わる力の獲得（観察記録 4、20）を身に付けていることも確認できる。また、共感の発達（観察記録 2）自己存在感の獲得（観察記録 36）、自己有用感の獲得（観察記録 46）と規範意識の獲得（観察記録 14）も考察できた。

以上のように、第二章と第三章の分析を踏まえて、考察できたものを表 4－1 と表 4－2 が示しているようにまとめた。

さらに、表 4－1 から先生が「育成したいもの」と表 4－2 から子供が「身に付けたもの」を比べてみると、表 4－3 が示しているようになる。

表 4－3　比較表

Part1 教師が子供に身に付けさせたかどうか観察できたもの
○集団意識の育成 ○役割遂行能力の育成 ○思いやりの態度の育成 ○責任感の育成 ○規範意識の育成 ○社会生活上のマナーの育成 ○関わる力の育成
Part2 教師が子供に身に付けさせたかどうか観察できなかったもの
○命の教育 ○自尊感情の育成 ○自己管理能力の育成
Part3 教師が育成するのではなく、活動を通して、子ども自身が獲得したもの
○共感の発達 ○自己存在感の獲得 ○自己有用感の獲得 ○向社会的行動を取る傾向

本研究は、子どもの社会性を育成する際に有効的だと言われている異年齢交流活動に焦点を当て、①子どもの社会性を育成するために、教師はどのような関わり方をしているか、何を育成しているか、②実際の場面で、子どもたちの中にどのような社会性が育成されているのかという二つの問題を明らかにすることを目的とした。エスのグラフィーという研究手法を取り、兵庫教育大学の附属小学校の特別活動の観察を通して、特別活動に参加している先生たちと子供たちはどういう状況で、どんなやりとりをしているかを観察し、記録し、フィールドノーツにまとめることにした。さらに、フィールドノーツからエピソードを切り出して、分析の単位とした。まず、エピソードの中で書かれた行動にはどんな特徴があるかを分析し、ラベル付けを行った。その後、

同じような行動をまとめて、カテゴリー化した。

そこで、本研究において、観察された事例から、教師たちの言動の中で見られるかかわり方を「事前誘導、指摘教育、介入援助、事後教育、賞賛、参加支援、事後注意と事後反省」という8つに分類することができた。考察した後できたのが表2-1である。また、教師たちの行動は活動前、活動中、活動後という三つの時期に、意図的に子供に教えるべきものを教えてあげた。活動前は準備で、活動中は実践で、活動後は仕上げみたいな流れでかかわり方を活用していると考える。たとえば、仲良し遠足が始まる前に、顔合わせ会があって、いろいろな注意すべきことを教えているのである。高学年生は低学年生の面倒を見る役割があって、低学年生は高学年生のやり方を見習いながら、活動に参加する心構えが必要である。そして、本番の活動に参加したとき、先生が教えてくれたことをちゃんとすることは実践だと言える。理論と実践の統合であろう。いくら頭の中で、上級生が下級生のために、面倒を見てあげると考えても、実際の場面で、問題に出会ったとき、ちゃんとやれるかどうかは、自分で体験しない限りは分からないのである。最後は、振り返りで、自分の役割を果たしたか、自分の目標に達成したか、足りないところがあるかなどをみんなと一緒に反省しながら、先生は活動の締めくくりをつける。一言でいうと、「経験は技術になる」のである。子供に体験させることで、人間関係を営む技術を学ぶのであろう。

さらに、観察された教師たちの言葉から見られる育てたいものを、「関わる力の育成、命の教育、自尊感情の育成、社会生活上のマナーの育成、集団意識の育成、自己管理能力の育成、役割遂行能力の育成、責任感の育成、規範意識の育成、思いやりの態度の育成」という10種類に分類した。表2-2が示しているようである。表2-1と表2-2をまとめて、表4-1教師の関わり方と育成したいものが出た。

それから、子供たちのどんな行動から、どんなものが身に着けていることを分析してみると、子供たちは「注意する行動、助ける行動、心遣いをする行動、応援する行動、指示を出す行動、協力する行動、励ます行動」があることが分かった。表3-1子供の行動形態が示しているようである。これらの行動から、子供たちは「責任感、役割遂行能力、思いやりの態度、社会生活上のマナー、関わる力、集団意識、規範意識」という7つのものが身に付けていることも分かった。得られた結果は表3-2子どもが身に付けたものである。そのほか、共感の発達、向社会的行動を取る傾向、自己存在感の獲得と自己有用感の獲得も育成できることが分かった。そこで、表3-1と表3-2をまとめてみると、表4-2子供の行動形態と身に付けたものになる。

最終析出した結果は表4-3が示しているようである。表4-3は表4-1の教師の育成したいものと表4-2の子供が身に付けたものと比べた結果である。結果からみると、教師たちの育成したいもの「集団意識の育成、役割遂行能力の育成、思いやりの態度の育成、責任感の育成、規範意識の育成、社会生活上のマナーの育成、関わる力の育成」は子供が身に着けたもの「集団意識、役割遂行能力、思いやりの態度、責任感、規範意識、社会生活上のマナー、関わる力」と対応しているから、表4-3が示しているPart1教師が子供に身に付けさせたかどうか観察できたものという結果が得られた。そして、Part2 教師が子供に身に付けさせたかどうか観察できなかったものというのは、ここでは「命の教育、自尊感情の育成、自己管理能力の育成」のことで、活動の

中で観察できた教師が子供たちに身に着けさせたいものであるが、実際の場面で、子供たちの行動を観察した後、子供が身に着けているとは言えない状況である。また、Part3 教師が育成するのではなく、活動を通して、子ども自身が獲得したものとは、教師の行動では教えられないもの、ここでは「共感の発達、自己存在感の獲得、自己有用感の獲得、向社会的行動を取る傾向」のことで、子供たちが活動を参加することで得られたものである。たとえば、共感は同じような体験のある人たちだけが感じられる、理解できるものである。自己存在感と自己有用感は、活動の中にペアや仲間がいることで、自分のことを見てくれたり、頼ってくれたり、感謝されたりする中で得られる。もちろん、教師の褒め言葉も子供の自己存在感と自己有用感を引き出すことができるが、活動の中で、一番効果的である。なぜならば、活動中教師の見えないところでは、いろいろな助け合うことが起きているから、先生は一一ほめることはできないからである。仲間がいて、仲間からの感謝や信頼を得た子供たちはたくさんの自己有用感と自己存在感が得られるのだ。

また、本研究は、社会性を「様々な対人関係の中で、よりよい人間関係を構築し、維持するためのあらゆる力のこと」ととらえている。一言で言えば、「仲間関係を営む力」である。そこで、先生たちの育成したいものから、子供の社会性を育成する際に、なぜ前述したものを身に付けせたいのかというと、以下のような理由が考えられる。

まず、関わり力の育成は、人間関係の構築に必要とする力であることが明らかである。他人にかかわろうとしないと、人間関係の構築もできない。そして、命の教育は、現代社会において、子供たちが命に対する漠然とする態度を防ぐことができると考える。自尊感情の育成は、自分の存在価値を認め、自信とかの素質を身に付けることもできる。自信を持つことで、他人とのやりとりもうまく行ける。また、社会生活上のマナーの育成と規範意識の育成は、集団生活を維持するときに通用するものであるから、無視してはいけないことである。例えば、他人に対する礼儀正しい挨拶をすることは、お互いがよい印象を持つことができるし、人間関係の構築も容易にできる。また、社会規範を守る人と守らない人に対して、普通は社会規範を守る人に好意を抱く傾向がある。そもそも、社会規範はみんなが集団生活を円滑に送るための存在であって、長い年月をかけて残した必要なものである。自己管理能力の育成は、自分の心身の状態をコントロールし、自己制御などにかかわって、人間関係において、問題が起きたとき、怒りで他人を傷つけたり、殺したりするような行動を防ぐことができる。役割遂行能力の育成と責任感の育成は、社会が自分に求めている役割を責任もって、きちんと果たす力を育てることができる。例えば、教師は教師としての役割を果たし、看護師は看護師としての役割を果たし、このように、それぞれの役割を果たすことで、社会も順調に進めことができるし、よりよい社会生活を送ることもできる。思いやりの態度の育成は、他人のことを考えて、自己中心的な考えで行動することを防ぐことができると考える。

以上のように、それらすべて、人間関係の構築に必要とするものであると考える。

さらに、教師たちが言葉や行動で与えられない共感の発達、向社会的行動を取る傾向、自己存在感と自己有用感は、子供たちが一緒に活動することで獲得することができる。

共感の発達は思いやりなどに関わっている。向社会的行動を取る傾向は、利益を求めずに、他

人を助けたりする援助行動であるから、集団生活を送るとき、もし誰でも向社会的行動を取ることになると、自分が他人のために、他人も自分のためにという理想的なよい社会になりうると考える。そして、異学年交流活動を通して、年上の子供たちは、年下の子供たちの「モデル」になって、憧れの人として、年上の子供たちの「自己存在感」と「自己有用感」が強く育まれることも考察できた。「自己存在感」と「自己有用感」もまた、人間関係の構築に欠かせないものである。他人に無視されたり、自分の存在価値が否定されたりすると、他人との関わりを嫌がることになってしまう。そして、低学年の子供たちも、高学年生の姿を見て、見習いながら成長していくのである。例えば、本研究において、上級生が下級生のためにいろいろしてあげたりする行動はたくさん見られたが、下級生も上級生のために助けてあげたりする行動が見られた。つまり、活動を通して、お互いの姿で影響しあう中で、子供たちは徐々に社会性を身に付けるのである。

そのほか、異学年交流活動は児童生徒の自己認識を高めることもできるし、子供たちの思考力、判断力、個性や独立性を高めるのに有効であるといえる。子供の人格の形成や個人素質の育成などにも役立つのである。

最後、杉田洋（2009）によると、「学習＋学校生活」を重視する日本の学校では、児童会や生徒会活動や運動会などの学校生活の充実のための活動を正規の時間割（教育課程）に位置付けていることは、ほかの国と比べて日本の学校教育の特徴があると述べている。そこで、異年齢交流活動を特別活動に加えることも、社会性育成に役立つと考えられる。中国の「子供たちの社会性育成が不十分」という教育問題を解決するために、参考になることが確認できた。もちろん、このような社会性の育成は、学校のみで行うことでは不十分で、時間もかかる。そして、中国の現状から考えると、実施することも難しい。しかし、これから、先行研究で述べたような事件が起こらないようにするための取組は必要である。集団生活である学校が努力しないと、子供たちの問題行動がますます手に負えなくなる。そこで、異年齢交流活動みたいな取り組みを重視しなければならないと考える。

今後の課題

本研究は兵庫教育大学附属小学校１校だけを観察したため、ここでの社会性の育成が、この学校特有のものであるかもしれないから、他の多くの公立校であてはまることができるかどうかについては明確でない。そこで、今後、他の学校においてのフィールドワークが必要になると考える。また、本研究の取組みの多くは総合的な学習の時間や特別活動の時間において実施されたがゆえに、これから、なるべく全面的な視点で活動を把握し、また道徳の時間も含めた幅広い教育活動において観察することで、子どもの社会性の育成を研究することが課題としてある。できれば、本研究で明らかとなったことを基に、多くの小・中・高等学校において多様な交流体験活動を観察し、子供たちの社会性育成についての研究を進めていきたいと考える。

謝辞

本論文作成に当たり、指導教員須田康之先生から、テーマの決定、研究の考え方、研究方法、まとめ方など全てにおいて、長期にわたってご指導をいただきました。本当に心から感謝しております。

はじめて、大学院生として、兵庫教育大学に入学したとき、はっきりとした研究目的を持っているわけではなかったです。ひたすら、中国の教育現状を変えようと、教育に関する研究をしたかったが、須田先生のご指導をいただいて、研究したい課題がやっと明瞭になりました。そして、本研究に当たって、本を紹介してくださったり、研究に役立書物を買って、貸してくださったり、附属小学校の特別活動の観察の許可をいただくよう、私と共に附属小学校にご挨拶をしに伺ったりして、本当にありがとうございました。長い間、大変お世話になりました。

また、私の論文を指導してくださった中間玲子先生に感謝いたします。貴重なご意見をたくさんいただきました。特に分析において、論文の書き方や分析方法などを教えてくださったり、本を紹介してくださったり、資料をくださったりして、何とお礼を申し上げればよいでしょう。すごく勉強になりました。ありがとうございます。

そして、私の研究に協力してくださった附属小学校の校長先生、副校長先生、いつも親切に接してくださった藤原典英先生、熱心に特別活動のことを教えてくださった森清成先生、及びインタビューに協力してくださった先生方、多大なご協力に心から深く御礼申し上げます。ここで、附属小学校教員全体に御礼を申し上げます。長い間、ありがとうございました。留学生として、いろいろな日本の小学校の教育活動を観察することができて、体験することができて、とてもうれしいです。とても有意義な時間を過ごしたと思っております。

最後になりますが、最後まで一緒に頑張ってきた研究室の同期の皆様、私の研究にご意見をくださったことに感謝しております。ありがとうございました。みんなに出会えて、良かったと思います。この思い出は一生忘れないです。

平成 28 年 12 月 20 日

施　姍

参考文献

○江城佐和子（2013）「集団生活を営む力を育む異年齢交流活動の在り方：気付きを行動化につなげる話合い活動の工夫」249 集,pp.1−12。

○福新智幸『知的障害のある児童の良好な人間関係を築くための支援に関する研究：社会性の育成に視点を当てた「個別の指導計画」の作成と活用を通して』〈http://www.ysn21.jp/tyousa/tyoukikensyu/houkoku/houkoku22/hou_fuku.pdf〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。

○平木典子（1993）『アサーション・トレーニング：さわやかな自己表現のために』日本・精神技術研究所。

○広瀬紀一「子どもたちの豊かな仲間意識を育むために：異学年集団での活動を生かして」〈http://www.kochinet.ed.jp/center/research_paper/h17_center_students/hirose.pdf〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。

○北村文夫編著（2011）『指導法特別活動』（教科指導法シリーズ）玉川大学出版部。

○國分康孝監修・小林正幸・相川充編著（1999）『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる小学校』図書文化。

○國分康孝編著（2000）『続構成的グループ・エンカウンター』誠信書房。

○国立教育政策研究所（2004）『「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」：「人とかかわる喜び」をもつ児童生徒に』〈https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/syakaisei.pdf〉, 2016 年 12 月 19 日アクセス。

○鯨岡峻（2005）『エピソード記述入門：実践と質的研究のために』東京大学出版会。

○松崎宏行・中村邦彦・秋本和子・新山英樹「社会性を育む学級活動の在り方：授業のグループワーク化を通して」〈http://www.keins.city.kawasaki.jp/kiyou/kiyou16/16-133-148.pdf〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。

○箕浦康子（1999）『フィールドワークの技法と実際：マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房。

○毛利猛編（2007）『小学校における「縦割り班」活動』株式会社ナカニシヤ。

○中村健（2008）「いじめ予防に関する研究：ストレスマネジメントを活用した自己コントロール能力の育成を通して」〈http://www.edu-c.pref.aomori.jp/kenkyu/2007/reports_data/d_ky17.pdf〉, 2016 年 12 月 19 日アクセス。

○中村尚司・広岡博之（2000）『フィールドワークの新技法』日本評論社。

○日本特別活動学会監修（2010）『キーワードーで拓く：新しい特別活動』東洋館出版社。

○岡田圭代・古橋啓介（2009）「小学生の対人交渉方略に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果」『福岡県立大学人間社会学部紀要』 第 17 巻, 第 2 号,pp.33－46。

○小田博志（2010）『エスノグラフィー入門：〈現場〉を質的研究する』春秋社。
○大竹晋吾・八尋哉・岩下明子・今村理恵（2009）「社会性を身に付けた児童を育てる特別活動の指導の在り方：集団の一員としての自覚をもち，生活の向上のためのルールづくりを行うモデル授業の開発」『福岡市教育センター特別活動研究室研究紀要』第 828 号, pp.1-20。
○佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク：書を持って街へ出よう』東京新曜社。
○柴山真琴（2006）『子どもエスノグラフィー入門：技法の基礎から活用まで』新曜社。
○志水宏吉（1998）『教育のエスノグラフィー：学校現場のいま』嵯峨野書院。
○塩見邦雄編著（2000）『社会性の心理学』株式会社ナカニシヤ。
○少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議（2001）『心と行動のネットワーク：心のサインを見逃すな、「情報連携」から「行動連携」へ』文部科学省。
○Spradley, J. P., 1980, Participant Observation. Orlando: Harcourt Brace Jovanovich College Publishers.
○杉田洋（2009）『よりよい人間関係を築く特別活動』図書文化社。
○田辺聖子「他と協力して生活しようとする態度を育てる異年齢集団活動の研究：縦割り班活動を基軸として」〈http://www.saga-ed.jp/chouken/choukikenshuu_jigyou/chouken_report/h14/pdf/15tanabe.pdf〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。
○田中智志(2009)『社会性概念の構築：アメリカ進歩主義教育の概念史』東信堂。
○谷本早知子「異年齢集団活動を工夫して小学校中学年児童の自己有用感を高める取り組み」〈http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chouki/study/h21/tanimoto.pdf〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。
○藤雪麗・福田隆眞（2010）「小学校における中国の課程標準と日本の学習指導要領の比較研究：中国義務教育改革目標の６項目を中心に」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第 30 号,pp.57-65。
○山口満編著（2001）『特別活動と人間形成』学文社。
○山本登志哉（1995）　生涯発達のための観察法　無藤隆・やまだようこ編『講座生涯発達心理学 1 生涯発達心理学とは何か：理論と方法』金子書房, pp.204-214。
○石原利樹・本田千惠・利田亨次・戸野香・林田正彦「社会性の育成を目指した生徒指導の在り方に関する研究Ⅱ：規範意識をはぐくむ異学年交流の活動を通して」〈http://www.hiroshima-c.ed.jp/web/publish/ki/pdf1/kk31/4.pdf〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。
○岩手県立総合教育センター教育研究（1999）「児童生徒の社会性をはぐくむ生徒指導の在り方に関する研究第 1 報」〈http://www1.iwate-ed.jp/db/db1/ken_data/center/h11_ken/11_05/11_05.html#11_05_e〉,2016 年 12 月 19 日アクセス。
○全国特別教育活動研究会編（1968）『人間形成と特別活動：児童活動・生徒活動の教育機能とその指導』東洋館出版社。

資料

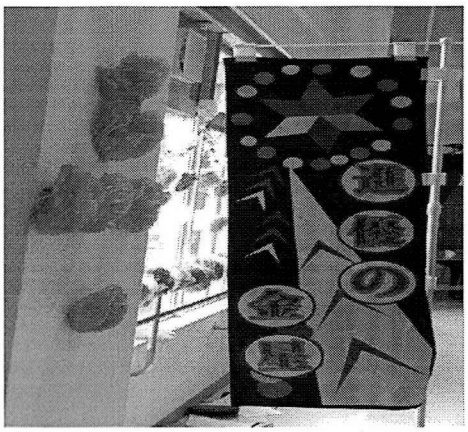
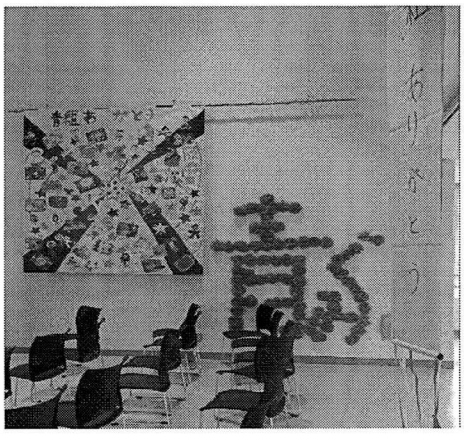
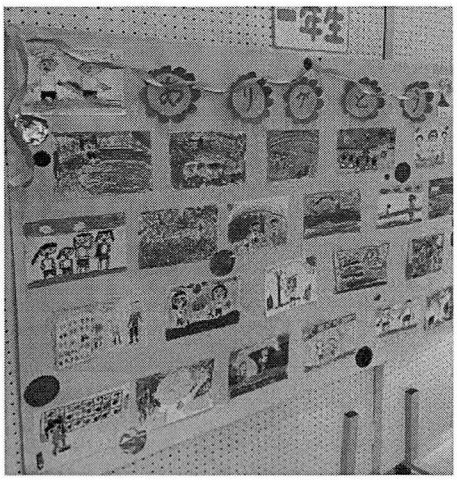
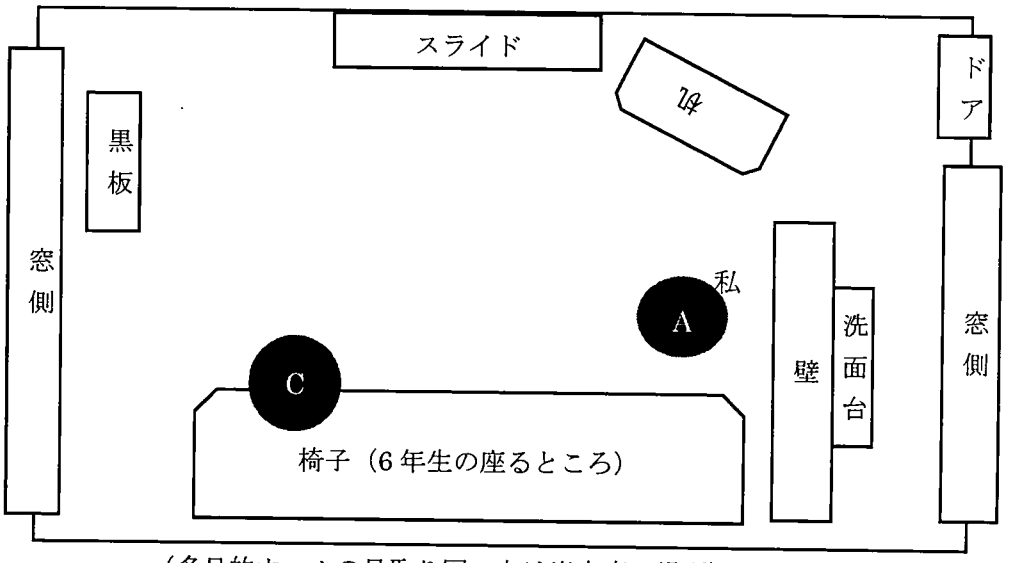
活動名称	ありがとううれしの班	
活動時間	2016/02/23~2016/02/24　(8:45~9:45)	
活動場所	多目的ホール	
観察対象	23 日は青組で、24 日は紅組だった（25 日は黄組の活動だったが、6 年生はインフルエンザで休校になった）。	
活動過程	青組	紅組
	1. 入場 2. 初めの言葉 3. マスゲーム 4. 今年の青組みでのふり返り （スライドショー、班でのふり返り） 5. 各学年の出し物 6. 6 年生から 7. 他のリーダー長から 8. 先生たちから 9. 終りの言葉（コールを含め） 10. 退場	1. 6 年生入場 2. 初めの言葉 3. マスゲーム 4. スライドショー 5. 班活動 6. 各学年からの出し物 7. 先生方から 8. 6 年生から 9. コール 10. 終りの言葉 11. 6 年生退場
活動写真	  	

表 1　活動説明



（多目的ホールの見取り図、丸は出来事の場所）

時間：2016/02/23
場所：多目的ホール
内容：班活動
人物：A（小4・女）、B（小2・女）
状況：スライドショーの後、青組の子供たちはそれぞれのグループに戻って、これから何をしようと話し合っている時のこと。

観察記録1「鉢巻きを結びつけるAさん」

二人の女の子A（上級生）とB（下級生）のやりとりが私の注意を引いた。ほかの人と違って、Aさんはずっと Bさんの手を軽く掴んで、他の人の話を聞きながら、よく振り返って Bさんの様子を見る。そして、時々、頭を下げて、Bさんの耳に近付いて、何かを話していた。その時、Bさんの頭につけていた青いはちまきは緩んで落ちた。すると、AさんはBさんを抱っこして、自分の前に座らせた。両手をBさんの両肩において、「お姉さんがつけてあげる」と優しく話した。Bさんは頭を軽くうなずいて、大人しく座っていた。Aさんは、はちまきを拾って、痛まないようにBさんの髪をまとめた。「痛い？」とBさんに聞く。Bさんは「痛くない」と、頭を振っていた。髪がまとめた後、Aさんはちゃんとはちまきを Bさんの頭につけた。

考察：

Aさんはずっと Bさんのことを心 掛けているのは明らかである。手をずっとつかんでいるとか、よく振り返って Bさんのことを見るとか、Bさんに話をかけているとか、また、「痛い？」と Bさんに聞くことも、これらすべて、Aさんが Bさんのことを思っている表現である。このような行動を取ったのは Bさんが後輩だから、先輩である自分は後輩の面倒を見てやるべきだという責任感が働いていると考えられる。また、縦割り班活動の中で、高学年生として、自分の役割を果たしていることも考えられる。

時間：2016/02/23
場所：多目的ホール
内容：6年生からの言葉
人物：C（小6・女）
状況：ほかの学年からの出し物を受けた後、6年生に感想を言わせるときのこと。

観察記録2「泣き出したCさん」

5年生の司会が出し物を渡すという話の後、1から5までの学年の子供たちは素早く列になって、順番に6年生に自分の作った小物を渡していた。その手作り出しものには、絵とか名前とかメッセージなどが書いているから、どれも可愛くて、心を込めているのは見ればわかることである。活動は順序よく流れていたが、6年生の中の一人の女の子Cさんは、出し物を受けた後、泣きそうな顔をしていた。そしてほかの人の感想を聞いている途中、気持ちが抑えきれないように泣き出した。感想を言うときも、ずっと泣いていた。みんなと一緒に過ごした日々を忘れないとか、自分のためにいろいろしてくれた仲間たちのことを絶対に忘れないとか、話しながら泣いていた。その顔は涙でくしゃくしゃ、話す途中、声にならないこともあった。そのときは、少し気持ちを整理してからまた話をつづけた。しかし、話すと、また、自分の気持ちが抑えきれないようで、泣き始める。そのような繰り返しだった。そして、彼女の話を聞いているほかの6年生も、何人か泣きそうな顔をしていた。

考察：

Cさんは昔、6年生を見送ることはあったはずだ。このような流れで、卒業していくことも分かっていた。だから、この日を迎えるために、心の準備はしていたと考えられる。最初は泣くつもりはなかっただろう。ちゃんとみんなと別れをしたかっただろう。だから、出し物を受けるとき、泣きそうな顔をしても、我慢して泣かなかった。でも、6年生が感想を言うとき、仲間たちの話を聞いたあと、彼女は泣き出した。彼女が泣き出したのは、自分の思い出が、自分がいままで抑えてきた気持ちが、仲間の話によって、引き出されたのだ。そして、ほかの学年からの出し物を受けて、みんなの心込めた手作り小物を見て、自分はこれから卒業して、みんなと会えなくなると実感したのではないか。また、マイクロホンを持って、感想を言うとき、こころの底から溢れてきた感動やら悲しいやら寂しいやら、そういうまとまらない気持ちで、感情が激しくなって、それを抑えようとしたが、抑えきれなくて、声にならなかったと考えられる。諦めずに言い続けたのは声がならなくても、頑張って、自分の言いたいことをちゃんとみんなに伝えたかったと強く感じられた。そして、Cさんの話から、6年間、みんなと一緒に特別活動に参加して、戦ったり、協力し合ったりすることは、とても大切な思い出だった。笑って、遊んで、ほかの組と戦って、勝っても、負けても、みんなと一緒だから、そのような深い絆ができた。1年生から成長してきて、6年間という長い間で積み重ねた思い出は、Cさんの心に大きな影響を与えただろう。それこそ、Cさんが泣いた本当の原因だと思う。もちろん音楽もCさんを泣かせる原因になるだろうが、いい思い出がなければ、いままでみんなとの絆ができていなければ、泣くわけがない。そして、彼女の話を聞いているほかの6年生も、何人か泣きそうな顔をしていたのは、Cさんと同じような気持ちが生じて、一緒に経験したことだから、理解ができて、泣きそうになったからと考えられる。このような、他者の感情を理解し、他者と同じ感情をもつことは「共感の発達」にかかわっていると考えられる。

ありがとううれしの班についてのインタビュー（Q:筆者　Y：青組の先生・男）

Q：この前、うれしの班という活動がありましたよね。それは何のために行いましたか？

Y：えっと、5月に「はじめましてうれしの班」っていうのがあって、今は1年生と6年生が紹介しあっているだけど、縦割り班で2，3，4，5年生がまだかかわりがないですよね。だから、その縦割りの、1から6年生までが一緒に集まって、これからうれしの班で頑張っていこうっていう会が「はじめましてうれしの班」って5月にあるんですよ。で、それの、そこからうれしの班の班活動っていうのがいろいろあって、その締め括りとして、「ありがとううれしの班」、お互いの学年、仲間、「ありがとう」という気持ちで、「ありがとううれしの班」があるんです。

Q：「ありがとううれしの班」っていうのは6年生を送るのがメインですか？

Y：6年生を送るっていうのも、含めているだけど、それだけじゃなくて、ほかの学年とも、一年間過ごしてきたから、その、ほかの学年にも「ありがとう」という気持ちを込めているんです。

Q：この前5年生が司会をやっていましたね。出し物とかも5年生ですか？

Y：えっと、出し物・・・5年生が中心になって、「ありがとう」をしていましたよね。
で、5年生が「ありがとう」を企画するときに、えっと、各学年にお願いをしに行くんですよ。「出し物をしてくれませんか」って。で、ほかの学年は、出し物を頑張る。飾りつけとかも5年生が全部やっています。

Q：片づけも5年生ですか？

Y：5 年生。それから、今のこの子たちが、6 年生になった時に、その、学校全体をまとめていくっていう役割を見習っていくので、その、全段階として、5年生が最後に「ありがとう」を過ぎるっていうことを、経験をしたうえで、6 年生に上がってるんです。 っていうのが、計画的にやっています。

Q：なるほど、ありがとうございました。

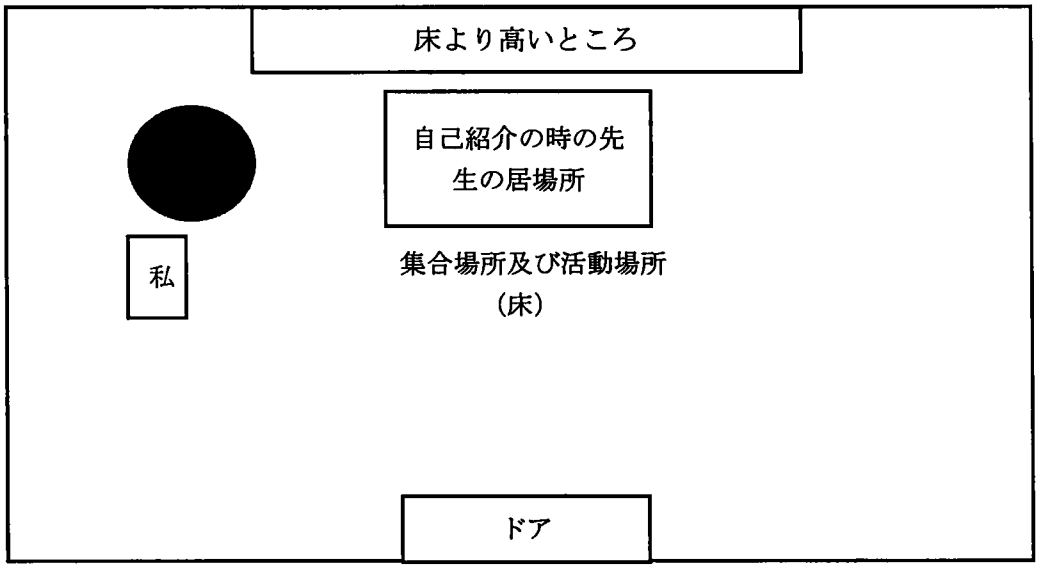
考察：

Y先生の話から、今回の「ありがとううれしの班」という活動は、子供たちにお互いに「ありがとう」を伝えるための活動であることが分かる。そして、今回の活動は、役割分担という方法で行われた。つまり、役割分担を通して、協力し合いながらやっていくこの活動は、子供たちの役割取得能力を育っていると考えられる。

また、この活動は子供たちに、お互いの感謝の気持ちを伝えることで、お互いの仲間関係をより深くなっていくことが目標の一つだと感じられる。いろいろ協力して、一緒に頑張って、仲間関係の構築も容易にできると考える。5年生が主力としてやっていくのは、6年生になるための、高学年生に上がるための試練、あるいは、活動を計画する能力や組織する能力など、人とのやり取りが円滑に進めるような能力を鍛えているとも言える。このように、「はじめましてうれしの班」から「ありがとううれしの班」まで、1先生から6年生まで、長時間の縦割り班活動の中で、役割分担をすることで、子供たちの関わる力や、役割取得能力が育てられていると実感する。

活動名称	なかよし遠足の顔合わせ会
活動時間	2016/04/25　(9:40~11:30)
活動場所	体育館
観察対象	2年生と4年生と先生たち
活動過程	1.体育館に集合 2.なかよし遠足に随行する先生の紹介 3.班での自己紹介（約20分間、なかよし遠足についての詳しいお話や遊びなどの相談も含めている） 4.各班の班活動

表2　活動説明



（体育館の見取り図、丸は出来事の場所）

時間：2016/04/25
場所：体育館
内容：随行する先生の紹介
人物：X（男の先生）
状況：子供たちが体育館に集合した後、随行の先生たちが自己紹介をする時のこと。

観察記録3「X先生の話」

X先生：おはようございます。（子供たち：おはようございます）

X先生：・・・4年生のみなさんとはあまり関わりがなかったので、はじめてでどうなるのかなって楽しみにしています。で、2年生のみなさんとは1年生の時によく会いましたよね。（子供たち：はい）

X先生：えっと、今年も4年生のみなさんと、一緒に、2年生の人とどういう関わりができるのかな、そして、遠足場所もちょっと今年変わっていますので、4年生がどんなリードしてくれるかな、楽しみにしておりますので、みなさん、一緒に楽しみにしましょう。（子供たち小さい声で：はい）

考察：

X先生の話から、関わりという言葉は2回出てきた。話の中で、2年生と4年生、また、先生たちと子供たちとどのような関わりができるのか、という二つの期待が読み取れる。つまり、今回の遠足は単なる遊びではない。もちろん、楽しむことも含めているが、そのほかに仲間や先生との関わりがもっと重要だというメッセージを子供たちに伝えたかったに違いない。「関わり」という言葉を強調することで、子供たちに遠足に行くとき、関わりということに意識させていると考えられる。

また、4年生のリードを期待していると話したのは、リードする立場にある4年生は、関わりの少ない2年生に対して、面倒を見てあげたり、お互いの関わりを深めたりするという役目があって、それを果たしてほしいと伝えたいに間違いない。

このように、意識させることを通して、子供たちの関わる力と役割取得能力を育成したいと感じられる。

時間：2016/04/25
場所：体育館
内容：随行する先生の紹介
人物：D（小4・女）、E（小2・男）、F（小4・男）、G（小2・男）、H（小2・女）、I（小2・男）、J（小2・男）、K（男の先生）
状況：先生たちが自己紹介をする途中、子供たちに感想を聞くときのこと。

観察記録4「子供たちの言葉」

Dさん：えっと、昔の遠足はなんか、安全にできて、すごく楽しかったし、隣にいる人としゃべれて、仲良くできた。
Eくん：遊んでいるときでも、4年生がいろいろ考えてくれて、助けてくれて、すごいなって思いました。
Fくん：僕は、僕のペアがはしゃぎ回るので今回はちょっとしんどいかなと思いました。
Gくん：ごめんなさい。
K先生：そうですか？ペア（Gくんに向かって）は楽しかったですか？
Gくん：楽しかったです。
K先生：よかった。楽しかったって言いましたよ。（Fくんは納得したように頷いた。）
Hさん：あのう、自己紹介をしたときに、去年はすごく緊張したけど、今年は4年生がやさしいっていうか、かかわりがあって、すごく楽しかったし、なかよし遠足も楽しくやっていけると思います。
Iくん：自己紹介をしたときドキドキしたけど、ちゃんとペアができて楽しかったです。
Jくん：みんなと仲良くできて、楽しかったです。

考察：

Dさんの話から、去年の遠足を通して、ほかの人と仲良くなれたことや、他人とかかわりができたことを確認することができる。

Eくんの話から、4年生は先輩として、2年生に気を使ってあげたり、助けてあげたりする行動は、高学年として、自分の役割を果たしたことが分かる。

そして、2年生のHさんは、自己紹介について、4年生の先輩が優しいから、去年より緊張しなかったことで、4年生は2年生に対して、確かにいろいろ気を使ってやったことが感じられる。また、4年生とかかわりができて、いろいろ助けてくれるという信頼が形成した

から、「なかよし遠足も楽しくやっていける」と言い出したと考える。Ｉくんと Ｊくんの話からも、仲間関係の構築が確認できる。

それから、FくんとGくんの対話から、関係の構築はいつもうまくいっているわけではないことが分かる。4年生は、2年生の面倒を見てあげたり、助けてあげたりすることが、しんどいとか、面倒くさいとかの考えがあるのも当然のことである。だから、FくんはGくんとのやり取りの中で、しんどいと感じて、それを正直に言った。Gくんは、自分の行動が先輩に迷惑をかけたことに気付き、「ごめんなさい」と謝った。このような葛藤に対して、K先生は、先輩に迷惑をかけたGくんを責めるのではなく、Gくんの気持ちを考えてから、Gくんがはしゃぎ回る原因を考えてから、楽しかったかと質問した。Gくんに自分の気持ちを言わせることで、FくんにGくんは楽しいからはしゃいだと理解させているのだ。「よかった。楽しかったって言いましたよ」といったのも、しんどいけど、Fくんの努力には価値があるとFくんのことを認めている。そうすることで、Fくんも改めてGくんの気持ちを考えて、理解することができたと考える。だから、最後は納得したように頷いたではないか。ここで、K先生の行動はお互いが理解しあう架け橋になったと考察できる。

時間：2016/04/25
場所：体育館
内容：班での自己紹介
人物：Ｄ（小２・男）、Ｅ（小４・女）
状況：子供たちがグループで話し合っている。周りからの笑い声で、観察したいグループの話がよく聞き取れないため、もっと近づこうとしていた時の出来事だった。

観察記録５「背中をたたくＥ子」

私の接近につれて、Ｄくんは話さなくなった。そして、俯いて自分の手元にあるしおりをあっけないように触っていた。時々私の方をちらっと見て、私が彼のことを見ていると気づいたら、すぐ頭を下げて、自分のしおりを遊んでいるように見せかけた。みんなの会話に混ざるような動きもなかった。そのとき、Ｄくんの隣にいる女の子Ｅさんは、Ｄくんの異常に気付き、心配そうにＤくんを見ていた。そして、彼女はＤくんの背中をやさしく、軽く叩いた。すると、Ｄくんは頭をあげて、Ｅさんのところに顔を向けた。Ｅさんは、「どうしたの」とＤくんに聞いた。しかし、Ｄくんは頭を振りながら、何も言わなかった。Ｅさんも何も言わないまま、手をＤくんの背中において、ただＤくんを見て優しく叩いた。しばらくすると、Ｄくんはまた話せるようになった。

考察：

Ｄくんは見知らぬ人（筆者）の接近につれて、緊張して話さなくなったと感じられる。そして、Ｅさんは話をしていたＤくんが急に話さなくなって、それに気づいて、何があったの？どうしたらいいか？とかの考えで、Ｄくんの背中を軽く叩く行動を取ったに違いない。自分が先輩だから、同じグループの仲間だから、心配しないわけがない。何があったのは知らないが、「大丈夫、ここにいる」と、言葉ではなく、行動を通して伝えた。だから、Ｄくんが緊張を解いて、また話せるようになったと推測できる。そして、Ｅさんがなにも話さないのも、Ｄくんの気持ちを考えたからと思う。ひたすら、理由を問うではなく、自分なりの気遣いで、そばにいるというメッセージを行動で伝えた。

時間：2016/04/25
場所：体育館
内容：班活動「だるまさんがころんだ」
人物：F（小４・男）、G（小２・男）
状況：自己紹介の後、みんなが「だるまさんがころんだ」を遊ぶときのこと。

観察記録６「鬼になったＦ子」

ジャンケンで負けたＧくんは鬼になった。Ｇくんは嬉しくないように壁に向かって、いやいやながら始まりの声を上げた。そして、Ｇくんの顔は憂鬱で、声も小さくて、元気がなかった。適当に掛け声を唄え、不機嫌のように後ろを見渡していた。いくらほかの子供が楽しんでゲームを進んでいても、Ｇくんは笑顔すら見せなかった。そこで、リーダーとしてのＦくんはゲームを盛り上げようと、大きな声で笑い、笑わせるような動きをした。跳ねるときはわざと転んだりした。そして、時々「しまった！」とか、「やばい！」とか、大きな声を出しながら、滑稽な顔をしていた。ほかの子はＦくんを見て、ゲラゲラと笑っていたが、Ｇくんはやはり笑わなかった。そして、一回目のゲームが終わって、２回目のジャンケンで負けたＧくんはまた鬼になった。「なんや？！」とＧくんは大声を出して、「また、僕か！」と怒っているように見えた。他の子はどうしたらいいかわからないような顔をして、隣の人と話し合っていた。すると、ＦくんはＧくんのところに行って、「じゃ、今回、僕がやりましょう」と言い出した。Ｇくんはすぐ、飛び出して、楽しそうに仲間の中に入れた。みんなも、ほっとした顔をして、Ｇくんと一緒にゲームを続けていた。Ｆくんは何もなかったように、相変わらず、ふざけながら、みんなとゲームをした。やっと、Ｇくんの笑い声が聞こえた。

考察：

Ｇくんははじめから鬼になったのは嫌だった。だから、それをみんなに伝えるため、わざと憂鬱な表情をしたり、声を小さくしたりしたと推測できる。そして、Ｇくんの不機嫌に気付いたＦくんは、Ｇくんを楽しませるため、わざと滑稽な顔をしたり、笑わせるような行動を取ったりしたと考えられる。

ところで、Ｇくんがあまりにもやる気がないため、ゲームに負けて再び鬼になった。そして、また鬼になってしまったことに苛立って、今まで溜まってきた不機嫌を「なんや？！また、僕か！」と、一気に口に出してしまったのだ。Ｇくんの怒りに対して、Ｆくんは「じゃ、今回、僕がやりましょう」を言い出した。リーダーだから、年上の先輩だから、Ｇくんもみんなも楽しくゲームをやっていけると、そこには、Ｆくんの心遣いや配慮とリーダーとしての責任感が働いていると感じられる。

活動名称	なかよし遠足
活動時間	2016/05/13 (8:40~15:00)
行き先	やしろの森公園
観察対象	2年生、4年生と先生たち
活動過程	8:45 運動場の鉄棒前で集合 8:50 徒歩で学校から出発 10:50 やしろの森公園に到着→みのりの広場で集合→お昼ごはん（班やグループで食べる）→班行動（うれしの班で遊ぶ） 13:20 みのりの広場で集合・ゴミひろい 13:30 みのりの広場から出発 13:40 なんでも広場で帰りのバスごとに集合 14:00 バス乗車（順番がある）→学校へ（15：00到着予定）

表3 活動説明

時間：2016/05/13
場所：やしろの森公園に行く途中
内容：遠足
人物：Mz（青組の先生・男）
状況：なかよし遠足の途中、子供たちは道端で毛虫を発見した時のこと。

観察記録7「Mz先生の話」

4年生と2年生は運動場の鉄棒の前に座り、先生の注意事項を聞いていた。そろそろ出発の時間になって、担当教員の許可をもらってから、私は列の一番後ろについていた。そして、歩いている途中、「毛虫だ！毛虫だ！」と前の子供たちが騒いていた。「大きい！」「気持ち悪い！」と、子どもたちは毛虫を囲んで、面白そうに見ていた。行列が乱された。すると、私の隣にいたMz先生は、素早く前に行って、「ダメ、ダメ、踏みつぶさない、命あるもの」と子供たちを毛虫から離されて、行列を正した。子供たちは、返事しながら、毛虫から去って行った。

考察：

なぜ、Mz先生は毛虫という目立たない虫に対して、子供たちに「ダメ、ダメ、踏みつぶさない、命あるもの」と言っただろう。毛虫は日常生活の中で、よく見かける虫である。不注意で、踏みつぶしてしまうこともよくあるし、子供たちが気持ち悪いと思って、踏んでしまうこともよくあるだろうが、小さいから、踏んでも、それが命という実感はない。もし子供たちが毛虫を囲んで踏んだとしたら、Mz先生が阻止しなければ、これから、「踏んでも大丈夫」「虫ぐらいどうでもいい」とかの考えが生じて、ほかの命に対する思いやりに欠如するかもしれない。小さくても、それは命、命あるものを大事にする。そして、言葉の裏に隠れていたのは、自分も命の一つであれ、この世にたった一つだけの命だから、大事にすべきだと、それを伝えたかったではないと感じられる。

時間：2016/05/13
場所：やしろの森公園に行く途中
内容：遠足
人物：H（小４・女）
状況：遠足の途中、私の前に歩いているＨさんはペアのためにいろいろ助けてやった。

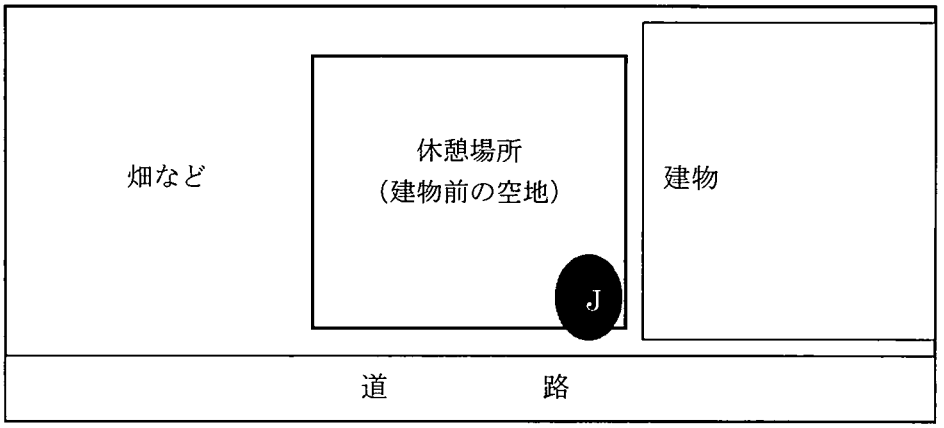
観察記録８「他人を助けたり、注意したりするＨ子」

行列はゆっくりと進んでいる。急に、前の方が「ウァー」と大きな声が聞こえた。行列はまた乱された。どうやら、前方に歩いていた２年生の男の子が道端にある溝に落ちたみたい。すると、私のすぐ前に歩いている４年生のＨさんは、大きな声で「4年生は２年生と位置を交換しましょう」と言って、自分のペアの内側に歩くことにした。蛇を見かけて、子どもたちが田端に立って、蛇を見ようとする時も、Ｈさんは他の子供が田端から落ちないように、両手を伸ばして、周りの子どもを守ってやった。また、自分のペアが疲れて、歩けなくなったときは、ペアの重たい水筒を持ってあげた。後ろから車が来る時は、ペアの外側に歩いて、ペアに気を配ってやった。目的地に到着する前、ずっとペアの手を繋いで、話をしながら一緒に歩いていた。「よそ見しないでね」とか、「危ないから、走らない」とか、他の２年生のことをずっと留意していた。そして、このような行動は他の４年生からも見えた。

考察：

４年生のＨさんが遠足に参加するのはこれで４回目だと考える。附属小学校の縦割り班活動の手配に従えば、１年生の時は６年生と、２年生の時は４年生と、そして３年生の時は５年生と遠足に行ったはず。そして、今回は自分が４年生になって、はじめて下級生と遠足に行っている。Ｈさんが自分のペアを助けてやったり、ほかの子のことに気を配ってやったりしたのは、これまでほかの先輩と一緒に遠足に行くとき、先輩たちが自分のことをいろいろ考えてくれて、助けてくれたから、そのとき感じた温かい気持ちで、いまのような行動を取ったからと考えられる。３回の遠足を経験したことで、先輩たちはどうやって自分たちの面倒を見てくれたり、助けてくれたりすることは覚えているはず。だから、先輩たちの姿を見て、先輩たちからの影響を受けて、経験したことを、学んだことを今回のなかよし遠足の中で生かすことができたと推測できる。

また、Ｈさんも本当は疲れているのに（大人の私も少し疲れたと感じたから、４年生のＨさんが疲れていないわけがない）、歩き疲れたペアの水筒を持ってあげたり、笑って話をかけたりしたのは、自分のペアに、先輩としてのいいところを見せてやりたいと思われる。自分は先輩だから、ペアの面倒を見てあげるのは自分の責任で、自分の役目を果たすべきとか、自分が疲れたと言い出すと、あるいは、自分が疲れた顔をすると、ペアに心配をかけてしまうから、頑張らなきゃとかの考えはきっと心の底にある。だから、疲れたとか一言も言わなかったと考えられる。そして、Ｈさんは自分のペアだけを注意しているのではなく、ほかの２年生のことも心掛けていた。だから、「よそ見しないでね」とか、「危ないから、走らない」と言い出した。そして、ほかの４年生からも、途中で２年生に注意をしたり、２年生に助けてやったりする行動が見られたから、Ｈさんは自分も頑張らないと思っただろう。このように、お互いの姿で影響しあっているに違いない。



（活動場所の見取り図、丸は出来事の場所）

時間：2016/05/13
場所：休憩場所
内容：休憩
人物：I（小４・男）
状況：休憩に入るときの出来事だった。４年生のＩくんは、私に腕輪を見せてくれた。

観察記録９「腕輪を見せてくれたＩ子」〈　〉筆者の言葉，「　」Ｉくんの言葉

一時間ぐらい歩いたから、みんなすでに疲れていた。やっと休憩のところに入って、子供たちは先生の指示を聞いて、休憩したり、遊んだりしていた。私も鞄から水を取って、飲もうとした。その時、「先生、これをつけてみて」と、後ろから声が聞こえた。振り返ってみると、一人の男の子は手を高く挙げて、私に自分の腕輪を見せた。目の前にあるのはいろんな色が混ざっている奇麗なゴム腕輪だった。〈奇麗な腕輪ですね〉と私は微笑みながら、返事をした。すると、Ｉくんは「これは、僕の自慢作です。昨日作りました」と頭をあげて、満足したように笑っていた。〈そうですか？〉私はその腕輪をずっと見ていた。私が腕輪に興味を持っているようで、「先生、つけてみて」、とＩくんは喜びにあふれて、またそう言い出した。「きっと、先生にも似合うんだ」と言いながら、腕輪をはずして、私の手につけようとした。〈いいですか？〉Ｉくんが付けやすいように、私は手をＩくんの前に伸ばした。「うん」、Ｉくんは腕輪を私の手首につけた。「奇麗でしょう」と私の手首につけている腕輪を見て、Ｉくんは自慢そうに私を見ていた。〈そうですね、すごく奇麗です〉と私は頷いた。「実は、これは２年生にもあげました」〈２年生は全員持っているの？〉と私は不思議に思って、そう聞いた。Ｉくんは頭を振りながら「私のペア」。〈なるほど、自分で作って、ペアにあげたの？〉と私は慎重に腕輪をはずして、腕輪をＩくんに返した。「うん。ペアだから、同じものをつけてほしいと思った。でも、僕は違う色で作ったから、どっちを彼にあげたらいいか、少し迷った」とＩくんは腕輪を受け取って、自分の手首につけた。私は微笑んで〈最後はどうなったの？〉とＩくんに聞いた。「友達に聞いたら、三色が揃っている方がペアに似合うんだって、それをあげた」と、Ｉくんはペアのところに行って、ペアを私の前につれてきて、ペアの腕輪を見せてくれた。〈これもきれいですね。すごいです。こんなのが作れるのは〉。そして、Ｉくんは「先生にもあげた」と。〈どうしてですか？〉。「どうせ、あげるなら、先生にもあげようと思ったから」。〈先生のことも考えていて、すごいですね〉私は微笑みながら、Ｉくんを褒めた。「先生の腕輪は今朝頑張って作った。まだ時間があるから」Ｉくんは私の言葉を聞いて、すごく嬉しそうに私を見ていた。

考察：

Ｉくんは「先生、これをつけてみて」と私に話をかけてくれたのは、綺麗に作られたから、その外国人の先生にも見せたい、ほかの人に自分の喜びを分かち合いたいという期待の気持ちで言い出したと考えられる。だから、私が〈奇麗な腕輪ですね〉と言った後、自分のやりがいがあったと感じて、満足したような顔をしたと考える。このような誰でも話しできる状況の下に、子供たちは容易に他人と会話できる。会話することで、お互いの関係も深くなると感じられる。

また、「実は、これは２年生にもあげました」とか、「先生にもあげた」とかの話から、Ｉくんは仲間のこと、先生のことを思っていることが分かる。ペアに作ってあげたのは、お互いの関係を強調するための行動として見られる。自分のペアに、「私たちはペアだ、仲間だ」というメッセージを伝えているに違いない。そして、先生にあげたのも、先生に対する好意や思いを伝えたかったと考えられる。

時間：2016/05/13
場所：やしろの森公園に行く途中
内容：遠足
人物：Ｊ（小２・男）、Ｋ（小４・男）、Mz（男の先生）
状況：遠足中、Ｊくんとやりとりをするときのこと。

観察記録 10「4 年生の背中を押してあげたＪ子」

子どもたちは、行列のままで、やしろの森公園に向かって歩いている。そして、私と一緒に列の最後に歩いていたのは Mz 先生と２年生のＪくんと４年生のＫくんだった。Ｊくんは Ｋくんと話しながら、好奇心で時々私の方に視線を向けてくる。そして、Ｊくんは何度もＫくんに「隣の人は誰？外国人？」と質問をしたが、Ｋくんはどう答えたらいいか分らないようで、頭を振っていた。そこで、私は自らＪくんの質問に対して「外国人ですよ」「一緒に遊びに行く人ですよ」と返事をした。しかし、Ｊくんは私の話に対して、直接に返事をしてくれなかった。「なるほど、外国人か」、「遊びに行くだって」と、Ｋくんと話をしているようなふりをして、返事をしてくれた。

そして、時間の流れで、Ｊくんは疲れて、動きも小さくなってきた。坂を登るとき、Ｊくんは背をかがめ、両手はかばんのベルトを握りしめ、歩けなくなった。汗をかいた顔を見て、私は彼の鞄を持ち上げて、「これで楽になるでしょう」と、彼に話をかけた。すると、Ｊくんは前を見て、「今、残りのパワーは 80%になった」と言って、元気を出して、また歩き始めた。そうやって、Ｊくんが歩けなくなったとき、私は何回もＪくんの鞄を持って、彼を助けてやった。隣に歩いていた４年生Ｋくんも時々Ｊくんの背中を押しながら、彼を助けた。また坂道だ。Ｊくんの疲れた顔を見て、彼の鞄を持ち上げようとするとき、なんと、Ｊくんは止まっていた４年生のＫくんの背中を押しながら、坂を上っていた。今まで、助けてもらった４年生や私に「ありがとう」とか一言も言わなかったＪくんが、４年生のために背中を押していくとは思わなかった。Mz 先生はそれを見て「お、すごいな、４年生を助けるなんて」とＪくんを褒めてやった。すると、Ｊ君はもっと力を入れて、４年生と一緒に前に進んでいった。

考察：

「Ｊくんはなぜ４年生の背中を押してあげたのか？」というのが今回の大きな問いである。

Jくんが素直ではないのはJくんの行動と言語から分かる。「隣の人は誰？外国人？」という質問を何度もするのは、私のことが気になるから。しかし、私の答えに対して、「なるほど、外国人か」、「遊びに行くだって」と、私にではなく、Kくんに向かって話をしていた。もし、Jくんはただ私が誰かを知りたいなら、答えを得た時、わざわざ私の聞こえる声で言わなくてもいい。そして、私に興味のないKくんに言っても話は盛り上がらない。でも、外国人である私が自ら彼の質問に答えたから、Jくんは無視することができなかった。Kくんと話をしているようなふりをして、私の答えに返事をしてくれたと考えられる。そして、私がJくんの鞄を持ち上げた時、「今、残りのパワーは80%になった」と言い出したのも、「ありがとう」という言葉は、素直ではないJくんにとって言い難い話だったから。普通に考えれば、他人に助けてもらった時、「ありがとう」を言うだけで簡単に感謝の気持ちを伝える。しかし、Jくんは「ありがとう」ではなく、「今、残りのパワーは80%になった」という体力の回復状況を言い出した。それは、「楽になった」という感謝の気持ちを伝えたかったに間違いない。無視ではなく、自分のやり方でちゃんとお礼を言った。この場面から、Jくんは他人が自分のためにしてくれたことを心がけていると考えられる。だから、助けてもらった4年生が歩けなくなった時、4年生を押し上げるという行動を取った。今まで、助けてもらった分、心の中で生まれた「感謝したい」「恩返ししたい」という気持ちが、行動となって表れた。そして、Mz先生の褒め言葉を聞いて、一層頑張るように力を入れたのだ。4年生との遠足の中で、周りの人が自分のためにいろいろしてくれたから、Jくんは自分も「他人のために助けてやりたい」という考えが生まれたと考察できる。

観察記録11「Mz先生の言葉」

私に好奇心を抱いているJくんはずっと私のことを気になっていた。隣のKくんに、「隣の人は誰？」とか、「なんか、声がおかしいね。外国人か？」とか、「その外国人はどうして僕らと一緒に歩いているの？」とか、「その外国人は疲れてないの？」とか、いろいろ質問をした。よほど私に興味を持っているようで、「外国人」という言葉が何回も出てきた。

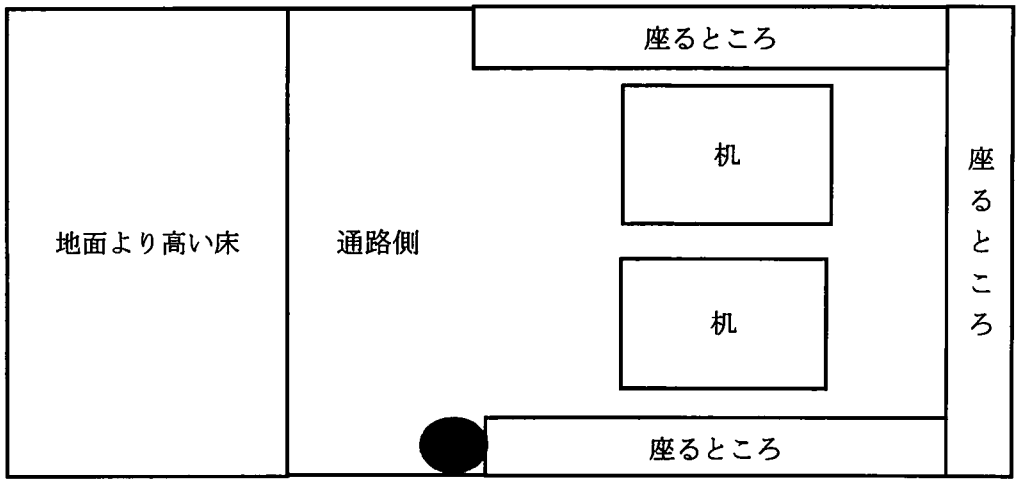
そして、遠足中、疲れて、歩けなくなったJくんのかばんを持ち上げて、彼が歩きやすいように何回も助けてやった。そうすることで、Jくんは少しずつ私と話すようになった。「下り道で走らないでね」と彼に話をかけるときは、「こんくらいの斜度は大丈夫」と簡単な返事をしてくれた。でも、Kくんと話をするとき、「その外国人疲れているか、疲れていないか、分らないよ」とか、何回も言い出した。しばらく歩き続けると、Mz先生は前の方から後ろへ戻ってきた。Jくんはまた、「その外国人疲れているか、疲れていないか、分らないよ」とMz先生に話をかけた。すると、Mz先生は「その外国人って言い方、失礼でしょう。先生と呼んで・・・」と少し膝を曲げて、Jくんを見て真剣に話をした。Jくんの顔はMz先生の体に遮断され、その時の彼の表情は見えなかった。

行列は前に進んでいる。私は相変わらず、JくんとKくんのそばに歩いていた。Jくんが疲れて、また歩けなくなったときは、Jくんをたすけてやった。そして、もう一回、上り坂を登るとき、彼は疲れて、列についてこなかった。私は彼のところに戻って、「頑張って」と言いながら、Jくんの背中を押し歩いた。すると、「先生、先生は疲れてないの？」と、なんと、今回は私に声をかけて、「先生」と呼んでくれた。

考察：

Jくんが、「その外国人疲れているか、疲れていないか」を聞くのは、自分は疲れていたが、その外国人はあまり汗もかいていなかったし、息も荒っていなかった。自分のことも助けてくれるし、本当に大丈夫かと心配してくれたと感じられる。そして、Jくんが「先生は

疲れてないの」と自ら私に質問をしたのは、Mz 先生が J くんに教えたことが J くんに影響を与えったに違いない。この場面で、Mz 先生の役割が大きかった。子供たちに礼儀やマナーに注意させていることが分かる。



（活動場所の見取り図、丸は出来事の場所）

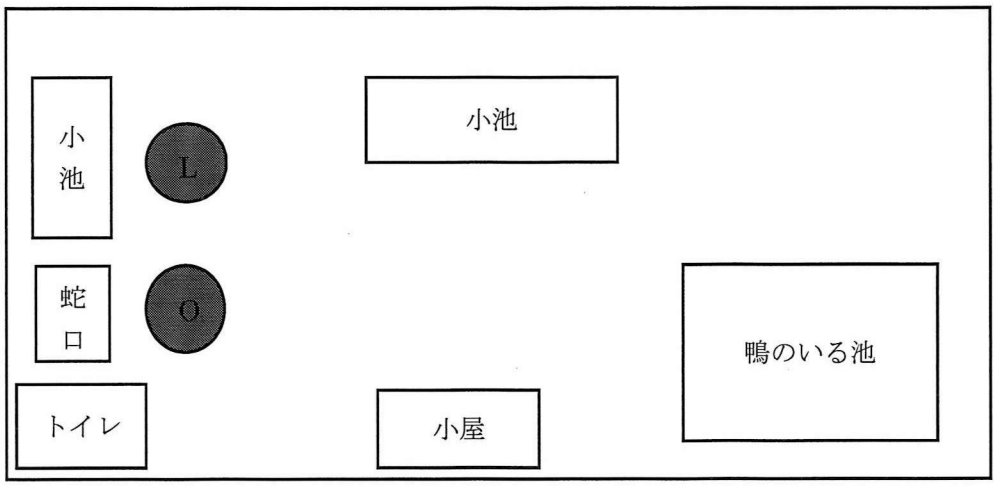
時間：2016/05/13
場所：やしろの森公園の中
内容：お昼ごはん（班やグループで食べる）
人物：L（小 4・女）
状況：昼食の時の出来事だった。L さんは私にお菓子をくれた。

観察記録 12「お菓子をくれる L 子」

昼食の時間になった。子供たちは班ごとで、敷物を地面や小屋の床に覆って、昼ご飯を食べるためにいろいろな準備をしていた。私も自分の弁当を開けて、椅子にすわり、食べ始めた。周りの子供たちは楽しそうに、話し合ったり、弁当のおかずを交換したりしていた。そして、食べ終わった後、何人か、先生にお菓子をあげた。一人の女の子 L さんは私の所へ来て、私を見ながら、お菓子を私の前に出して、「先生、お菓子食べる？」と言い出した。

考察：

L さんが、私にお菓子を分けてくれるのは、私のことを思っていたからではないか。私はお菓子とか持って行かなかったから、お弁当を食べ終わった後、みんながおかずやお菓子を交換することをずっと見ていた。ほかの子供が私にお菓子をくれたりしなかったから、L さんはそんな寂しそうに見える外国人に気を配ってくれたと考えられる。



（活動場所の見取り図、丸は出来事の場所）

時間：2016/05/13
場所：やしろの森公園
内容：班行動（うれしの班で遊ぶ）
人物：M（小４・男）、N（小２・男）
状況：子供たちがザリガニを捕まっているときの出来事だった。ザリガニを捕まえたＭくんに入れ物としてペットボトルをあげた。Ｎくんも入れ物がないから、私に尋ねてきたときのこと。

観察記録 13「ペットボトルを共有するＭ子」〈　〉筆者の言葉,「　」Ｍくんの言葉

昼ごはんが食べ終わってから、みんな班活動で、網を持ってザリガニを捕まったり、近くの池にいる鴨を見たり、周りで遊んだりしていた。私も、ザリガニを捕まっている子供たちと一緒に、小池を見ながら、ザリガニを探していた。でも、たくさんの子供が網を使って、池のあっちこっちでザリガニを掬っているから、水が濁って、よく見えない。それなのに、子供たちは真剣に、目を大きくして、水の底をずっと見て、掬い続けた。やっと、何人かの子供がザリガニを捕まえた。すると、彼らは「先生、先生、見て、これ」、「私も、捕まった」とキラキラした目で私を見つめ、網の中に、泥まみれのぴちぴちしたザリガニを手で掴んで、私に見せてくれた。私も自分が捕まったような気分で、笑って〈大きいですね。よかった〉と返事をすると、彼らも楽しく笑っていた。彼らはザリガニをビニール袋の中に入れたり、持参の籠に入れたりした。でも、入れ物を持っていない子も何人かいた。そのとき、Ｍくんは「先生、袋ありますか」と私に尋ねてきた。私も持っていないから、どうしたらいいか迷っているとき、カバンの中にあるペットボトルが使えるとふいに思い出して、〈待ってね〉と私はそれを出して、Ｍくんに渡した。〈水を入れたら、使える〉。「ありがとう」とＭくんはボトルを受け取って、近くの池の水を中に入れた。そして、ザリガニを入れようとしたとき、ザリガニのハサミや足がボトルの口を掴んで、なかなか入れられない。それを見て、私はしゃがんで、ボトルを持って、〈頭の方を縦にして入れましょう〉とＭくんに言ったら、今回やっとザリガニを入れた。すると、Ｍくんはボトルを高く持って、底に動いているザリガニを見ていた。そのとき、もう一人の男の子Ｎくんが来て、私に「ビニール袋はありますか」と尋ねてきた。でも、私はもう何も持っていない。〈ごめんね〉と答えたら、隣のＭくんは、ボトルをもって、Ｎくんに「入れる？」と聞いた。すると、Ｎくんも、遠慮なく、

ボトルに自分のザリガニを入れた。そして、二人は、「ハサミは赤いね」とか「アメリカザリガニだ」とかいろいろ話し合いながら、ボトルをずっと見ていた。その後、ボトルを私に預けて、一緒にザリガニを掴んだりして、捕まえたザリガニはボトルに入れた。

考察：

Ｍくんと Ｎくんは友達ではないと最初から感じていた。もし二人が友達だったら、Ｎくんは私の隣にいる Ｍ くんのところに行って、「私もザリガニ捕まえた」とか、「ボトルを見せて」とか、少しは話をするだろう。しかし、Ｎくんは Ｍくんに話をかけなかった。そして、私に「ビニール袋はありますか」と聞いた後も、ただ私を見ていた。そして、Ｍくんも、Ｎくんがこちらに来るのを見たはず。でも、Ｎくんと同じように、話をかけなかった。そこで、二人は友達ではないと判断した。せめて、そんなに親しくない関係だと思う。それなのに、Ｍくんは Ｎくんに「入れる？」と聞いたのは、困っている Ｎくんを見って、彼を助けたいという思いが生じたに違いない。このペットボトルはもともと自分のものではない。入れ物がないとき困っている気持ちが、同じ入れ物のない Ｎ くんを見て、相手の気持ちを理解することができたと考えられる。また、先生から、ペットボトルをもらって、温かい気持ちになったから、Ｎくんを見て、そのような体験で、Ｎくんも助けてやりたいという思いが生じたと解釈できる。だから言葉で「入れる」と Ｎくんに聞いた。

この場面で、Ｎくんに話をかけることで、助ける行動を取ることで、二人がお互いに話し合うことができた。「ハサミは赤いね」とか「アメリカザリガニだ」とか、ボトルを私に預けて、一緒にザリガニを掴んだりするとか、一瞬で距離を縮めたような感じだった。つまり、他人から助けてもらったり、助けてあげたりすることで、お互いの関係がよくなることが考察できる。

時間：2016/05/13
場所：やしろの森公園の中
内容：班行動（うれしの班で遊ぶ）
人物：O（小４・女）
状況：ボトルの中に濁っている水を変えようとするときの出来事だった。O さんは私のところに来て、私にザリガニを池に返してと言った。

観察記録 14「注意してくれた O 子」

ペットボトルの中にたくさんのザリガニが入っているから、池で掬った水はすでに清らかではない。そこで、私はＭくんやＮくんに、水を変えると言ったあと、蛇口のあるところに行って、水を変えた。そして、ボトルを持って、中のザリガニの様子を観察しているとき、一人の女の子、O さんは「先生、ザリガニを池に返してやって。アメリカザリガニじゃないと、捕まっちゃダメ」と私の持っているボトルを見て言い出した。確かに、ボトルの中には日本のザリガニがたくさんいるみたいで、〈私のものではないから、みんなが捕まったザリガニで、みんなに言ってから、決めましょう〉と私は O さんに言った。O さんは頷きながら、「看板に書いてある。」と手で、看板のところを見せてくれた。続けて「日本のザリガニはいいザリガニから、捕まっちゃダメ」とはっきり言った。〈そうですね。みんなと話し合いましょう〉と私はボトルを持って、みんなのところに行った。そして、O さんも私の後について、ザリガニを捕まっている男子たちに話を話した。すると、男子たちは、ちゃんとザリガニを池に返してやった。

考察：

なぜ、O さんは私に注意してくれたのか。私が外国人だから、日本のザリガニを捕まえてはいけないことを知らないかもしれないと思って、もしそのまま持って帰ったら大変だと注意をしてくれたと考えられる。また、「看板に書いてある」と、文字を私に見せたのも私に分かってもらうためだと感じられる。また、むりやりに私にザリガニを池に返させるのではなく、私の意見を聞き、男の子たちに話をした。男子たちも、ちゃんと O さんの話に従い、ザリガニを逃した。ここから、子供たちは、相手の意見を受け入れ、相手の意思を尊重する行動が見えた。

時間：2016/05/13
場所：やしろの森公園
内容：みのりの広場で集合・ゴミひろい
人物：Mo（紅組の先生・男）
状況：班活動の後、みんな集合して、Mo 先生の話を聞いている。

観察記録 15「Mo 先生の話」

Mo 先生：生き物を持っている人は、アメリカザリガニなら、事務所の人に報告をすれば、持って帰ることができます。でも、もって帰ったら、必ず、最後まで大切に育てて、死ぬところを見て、土に返してあげてください。それが約束だそうです。で、それ以外の植物や生き物は、置いて、持って帰らないでください。池で捕まった生き物は、池に返してあげてください。いいですか？

考察：

Mo 先生はアメリカザリガニに対して、子供に大切に育つとか、死ぬところを見てやるとかを話したのは、やはり命を大事にすると子供たちに教えたいと考える。また、持って帰る前には事務所の人に報告した後とか、アメリカザリガニ（持って帰ることができる）以外の生き物は持って帰らないとかを言ったのは、子供に規則を守って行動するという規範意識を教えていると考察できる。

時間：2016/05/13
場所：やしろの森公園
内容：バス乗車
人物：P（小 4・男）
状況：遠足がそろそろ終わって、みんなバスに乗ろうとしているところである。

観察記録 16「車に乗らない P 子」

最後の一班はバスに向かって、進んでいる。すでに疲れていたのに、子供たちはまだ元気で、楽しく笑っていた。バスに近づいて、子供たちがバスの中に入っているとき、一人の男の子 P くんは、後ろから飛び出して、バスの入り口の付近に立っていた。汗のかいた顔だが、とても元気に見えた。ほかの子供はすでにバスに乗っているが、P くんはなかなか乗らない。そして、P くんは後ろからバスに乗るために来ている子供たちに向かって、「さきに入って、さっさと座り」「捕まえるものがあるから、僕は立つよ」とか、「僕は最後でいい」とか、ほかの子供の面倒を見ながら言い出した。

考察：

4年生のPくんが車に乗らないのは、後ろから来ている子供たちが順調にバスに乗るために、行列を正しているから。だから、「さきに入って、さっさと座り」と言い出した。高学年生としての役割を果たしている。また、「捕まえるものがあるから、僕は立つよ」とか、「僕は最後でいい」といったのは、疲れているほかの子供たちに気を配っていると感じられる。

なかよし遠足についてのインタビュー（Q：筆者　Mo：紅組の先生・男）

Q：今回、なかよし遠足の目当ては何ですか？

Mo：なかよし遠足の目当ては、三つあります。えっと、一つは、自分が、たとえば、2年生のために、何か楽しませることを、考えると。何か2年生のためにできることはないかと考えること。それが、自立。自分で考えて、自分でやってみる。で、二つ目が、考えたことを、実際にやってみて、2年生と関わって、で、協力して、楽しむ。三つ目が、そこから、あまり、仲良くなかった人とか、あまり知らなかったこととの関係を作っていくと。新しい関係を作っていくっていうことです。で、視点としては、今回は、自然がいっぱいあるところで、自然を使って、遊ぶ。触れ合うとか、というところも一つの視点で、と思っています。いつもだったら、用意されている、遊具を使って、たとえば、運動場にある大きな滑り台とか、今回はそんなのがないから、自分たちがなんか楽しいことを作り出さないというところが、でてくると。

Q：つまり、活動を通して、みんなが、実際にその場にいて、どうやって他人とかかわりながら、生きていくのが大事だということですね。

Mo：そうです。今日でも、最初は、2年生とか、もういやだ、帰りたいと言って、でも、帰るときには、そんなこと一人も、楽しくなかったとか、もう帰れるとかっていう言葉は言ってなかったんですよ。ということは、その、最初の印象から、2時間過ごしてみて、あ、楽しかったなっていう思いがあったっていうことだと思う。たとえば、その楽しさの中には、自然とかかわって、ザリガニいっぱいとれて、楽しかったっていう楽しさもあれば、お兄ちゃん、お姉ちゃんと、2年生と、遊べて楽しかったとか、なんか思っていたよりも、楽しかったっていうことが、終わった時に振り返ると、出てきたりとか、そういうところが、今回行ってよかったんじゃないかなと思ったでしょう。

Q：そうですね。そういえば、今回のなかよし遠足は三つに分けて、違う場所に行きましたね。どうして、1年生と6年生、2年生と4年生、3年生と5年生、このように分けたでしょうか？

Mo：1年生と6年生は、一番強いつながりになるんですけど。なんでかというと、1年生は、まったくこの学校のことを知らない、で、真白な状態で、来ると。で、1年生は、附属小学校のことを、ほとんど知らない、6年生は、附属小学校のことを、一番良く知っている、一番よく知っている附属小学校の6年生が一番知らない1年生のことを教えてあげると。ここは分かる。で、そのあと、なぜ、2−4、3−5なのかっていうと、えっと、まあ、2年生は1年生から、ある程度わかって、2年生。で、次、4年生は、半分から、下は低学年、半分から、上は高学年。4年生は、高学年に、仲間入りしたばっかりで、えっと、これから、6年生のように1年生を、全面的に世話をしてあげたいとか、今までしたことを教えてあげる立場になると、そこから、高学年に一歩入り込んだわけですね。なので、大体1年生で分かった。2年生に教えてあげたいとか、一緒にかかわることで、4年生として、教えていく。で、次、3年生と5年生、これも、まあ、大体一緒です。

Q：では、毎年、子どもたちは知らない人とかかわっていくのですね。
Mo：そう、そうです。基本的に。
Q：なるほど、そうやって、子どもたちの人間関係を構築していくのですね。
Mo：そうです。たとえば、今回のなかよし遠足、えっと、歩いて遠くまで行くということ、やっぱり、しんどいですよね。なんか、辛い。で、しんどい時に、なんか4年生が、もっと頑張れよという声をかけてあげたりするとか、そういう、こう、2年生にとっては、すごくハードルの高いものなんだけど、4年生がいることによって、そこ、きゅっと引っ張ってあげられるような、関係作りができるように、場を設定するということがすごく大事で、それがね、簡単すぎると、4年生も、2年生も、なんのハードルもなく、歩いて行って楽しかったって終わるんですけど、ちょっとだけ、こうハードルの高いものを設定すると、よく頑張ったねっていう言葉が生まれてくるとか、自然に、4年生らしい、こう、高学年としての言葉が出てくると。そして、人間関係っていうのは、やはり心なんですよね。人と人の心なので、見えないんですよ、結局は。だから、その見えないものを、教師が、どう見ていくか、構築する場を作って、今回の場合で言ったら、えっと、やしろの森公園に行くっていう場、の設定、ここに行くまでの道程の中で、そういう関係が生まれてくるわけですよね。なので、そういう場を作って、しっかりそれを見て、それで、すごいねって、さすが4年生だねっていう、でも、2年生もいいことがあったんだよっていうふうに、価値づけていくことによって、よりよい人間関係が築かれていくんじゃないかと思っています。

考察：

今回のインタビューから、自然という場所の中で、一緒遊ぶことを通して、いろいろな人と関わることを経験させて、子供たちに人間関係の構築、あるいは他人に関わる力を身に付けさせていることが分かった。そして、自然とのかかわりは現代社会の子供たちが自然体験不足の問題を解決した。また、集団活動はそれぞれの目当てや目標があることも分かった。例えば、今回の仲良し遠足は、「自立、協力、仲間関係づくり」といった目的が含まれている。子供たちに体験させることで、それを身に付けさせていることが考えられる。学校側は、いろいろな集団活動を計画して、人間関係を構築する場所を意図的に作っていることも明瞭である。そして、1－6、2－4、3－5のような縦割り班活動を通して、同級生と同級生の間の横のつながりだけではなく、上級生と下級生の間の縦のつながりも重視していることも分かった。高学年生は、低学年生の面倒を見ることを通して、誰かのために（ここではペアや仲間のことを指す）助けてやったり、行動したりすることで、自分の役割を果たし、高学年生としての責任感や、自己存在感や自己有用感が湧いてくると考えられる。また、低学年生は高学年生の姿を見て、高学年生のやっていることを日々見ることで、他人が自分のためにいろいろしてくれるとき感じたことは、きっとその心に影響を与えている。活動の中で高学年生に対する憧れは、その動きややり方を模倣するきっかけにもなる。簡単に言えば、模倣することを通して、人間関係の中で生じる様々な問題の解決方法を身に付けることができる。そして、集団の中で、たくさんの人と関わることで、子供たちは人間関係を構築し、円滑に維持するといった社会性にかかわる力を身に付けていることは確実である。

<table>
<tr><td>活動名称</td><td colspan="3">はじめてうれしの班</td></tr>
<tr><td>活動時間</td><td colspan="3">2016/05/17~2016/05/19　(8:40~10:00)</td></tr>
<tr><td>活動場所</td><td colspan="3">多目的ホール</td></tr>
<tr><td>観察対象</td><td colspan="3">紅組、黄組、青組</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動過程</td><td>紅組</td><td>黄組</td><td>青組</td></tr>
<tr><td>1. 初めの言葉
2. シンボル紹介（リーダー長の紹介を含め）
3. コール紹介
4. 班別活動
5. マスゲーム（鬼ごっこ）
6. 教員紹介
7. 終りの言葉</td><td>1. 入場
2. 初めの言葉
3. 一年生紹介
4. 行事紹介
5. リーダー長紹介
6. シンボル紹介
7. 班テーマ紹介
8. マスゲーム（踊る）
9. 班活動
10. 先生紹介
11. コール紹介
12. 終わりの言葉
13. 退場</td><td>1. 1年生入場
2. 初めの言葉
3. リーダー長紹介
4. シンボル紹介
5. コール紹介
6. 班長、副班長紹介、班テーマ紹介
7. 先生紹介
8. 班活動
9. マスゲーム、コール
10. 終わりの言葉</td></tr>
<tr><td>活動場所
（参照）</td><td colspan="3">
</td></tr>
</table>

表 4　活動説明

時間：2016/05/18
場所：多目的ホール
内容：マスゲームと班行動
人物：R（小5・男）、T（小2・男）、S（黄組の先生・男）
状況：私に一番近いグループで、Tくんは指示に従わず、自己紹介しなかったし、踊らなかったから、Tくんのことが気になっていた。リーダーとしてのRくんはTくんの行動を見て、いろいろ頑張ったが、S先生に呼び出された。

観察記録17「呼び出されたRくん」

Tくんは自己紹介をしたくないように、ただ笑っていた。ほかの子は、Tくんの発言を待っていたが、Tくんはなかなか自己紹介をしない。すると、5年生のリーダーRくんはTくんに近づき、「早く立って自己紹介しな」と、両手を伸ばし、Tくんの両脇に挟み、Tくんを立てらせようとした。しかし、Tくんは動かないまま。ほかの子供も勧めに来て、Tくんに話をかけたりした。みんなTくんを抱きながら、立てらせようとしたが、今度、Tくんは床に横になった。みんなの行動を見て楽しんでいるように見えた。Rくんは「みんなが待っているよ」と言ったが、Tくんは聞かないままだった。私の隣にいるS先生もそれを見ていたが、何の行動も取らなかった。

しかし、自分の言うことを聞かないTくんに対して、Rくんは怒ったりしなかった。みんなの努力の下で、Tくんはやっと自分の名前と誕生日を言い出した。でも、声は小さかった。その後、ほかの子の膝に頭を置いて、床に横になっていた。Rくんは、Tくんの名前や誕生日をみんなの前で言って、何とかTくんの自己紹介を終えた。

ところが、マスゲームが始まった後、みんな楽しく踊っているとき、Tくんはまた指示に従わず、踊らなかった。頭からはちまきを外し、それをほかの子に向かって面白そうに振っていた。その後、Rくんの顔面に向かってはちまきを振っていた。Rくんはやはり怒らなかった。ただ、Tくんと何かを話していた。それから、Tくんがまわりを走り回っていた。Rくんは他の子にT君と一緒に遊ぶように指示を出した。最後まで、Tくんは踊らなかった。そして、班行動が終わった後、TくんとRくんのやりとりを見ていたS先生はRくんを呼び出した。

活動後のインタビュー　(Q:筆者　S：黄組の先生)

Q：さき、赤い服を着ている男の子に何を教えたのですか？
S：あの子は高学年なんで、5年生なんで、5年生の人と、意識は全然違って、ほかの学年と、同じような意識でやってたから、あなたやってることは1年生、2年生、3年生、4年生と一緒だよ、5年生として、何できるのと話ししたんです。
Q：一緒ではだめですか？
S：だめなんです。高学年なら、止まってる1年生とか、2年生がいたら、今分かってるとか、見えてるとか、そうやって、6年生だけじゃなくて、5年生もこの会を作っていく位置にならなければだめです。
Q：責任感とかを育てるんですか？
S：そうです。そして、次に、5年生の子は、またこういう行事をするんです。今度は5年生が司会するんです。次ある時に、何の見通しても持てないと意味がないです。
Q：なるほど、わかりました。ありがとうございます。

考察：

ここで、なぜ、S先生はRくんを呼び出したのかが問題だった。私から見ると、Rくんは何も悪くなかった。指示に従わないT君に対して、怒ったりもしなかった。Tくんに自己紹介させるため、努力した優しい男の子だと思う。

しかし、S先生の話から見ると、Rくんは5年生としての役割を果たしていないから、呼び出された。確かに、T君が自己紹介をしない時、Rくんはほかの学年の子供たちと一緒に、Tくんを励ましてあげたりした。そして、結果からみると、Tくんにきちんとした自己紹介をさせなかった。また、踊りが始まって、Tくんはいたずらしながら踊らなかったことに対して、RくんはTくんを踊らせることもできなかった。だから、S先生は、「あなたやってることは1年生、2年生、3年生、4年生と一緒だよ、5年生として、何できるの」とRくんに話して、Rくんに高学年生として、5年生であることを自覚し、責任をもって、役割を果たすべきだと改めて意識させていると考える。

そして、S先生はRくんとTくんの間で起こっていることを見て、何の行動も取らなかったのは、Rくんに自分がこういう場面に陥ったとき、どうしたらいいか、自分で考えて、自分で解決してほしいという考えが読み取れる。また、そのような状況の下に、Tくんみたいな指示に従わない子に対して、5年生として、どんな行動を取ったらいいか、Rくんに体験させながら、Rくんの思考力、行動力、判断力を試していると考えられる。そうやって、活動の中で、いろいろな状況に出会ったとき、どのように行動するか、たくさんの経験を積み重ねることで、子供たちは、自分の行動を振り返りながら、できるように成長していくと考える。

はじめましてうれしの班についてのインタビュー（Q：筆者　Mo：紅組の先生・男）

Q：はじめてうれしの班という活動は何のために行われたのでしょうか？

Mo：新しい年になって、クラスが変わって、新しいメンバーになっていく。で、クラスも変わってるし、赤組っていうメンバーも、全然違うメンバーだから、その中で、新しい人間関係を作っていくための一つの行事です。で、ここの学校は、縦割り班っていって、1年生から6年生、六つの班に分けるんですよ。1年生が何人か、2年生が何人か、3、4、5、6年生何人ずつかで、何班っていうのを作って、一つのクラス、1年生から6年生までを含めるクラス。だから、小さい子もいれば、高学年の子もいる。で、その中で、6年生は1年生のことを教える。まあ、高学年としての責任感、1年生をしっかり見ないといけないというような責任感を育てる。昔だったら、たとえば、家の周りに、小さい男の子がいたりして、地域の中で、その、人間関係が作られてきていたんですが、最近は、やっぱり、安全面とか、いろんな事件もあるんで、地域でのつながりはすごく弱くなっている。だから、その人間関係のつながりを保護するためには、やっぱり学校を一つの人間関係の場として作っていかなければならない。だから、ただ、その、一つの学年だけ、6年生は6年生だけとか、5年生は5年生だけとかっていう学年じゃなくて、1年生から6年生まで、いろんな学年が混ざって、交流することで、1年生も6年生になりたいとか、6年生は、面倒を見てあげなければいけないというような感覚、気持ちを育っていく。

考察：

Mo先生の話から、縦割り班活動を通して、毎年子供たちは違うメンバーと関わり合い、新しい人間関係を作っていくことが分かる。そして、高学年生は低学年生の面倒を見ることで、低学年生にいろいろなことを教えることで、自分の責任感や自己有用感（低学年生に必要とされる）と自己存在感（ペアがいるから、自分のことを見てくれる）が得られる。

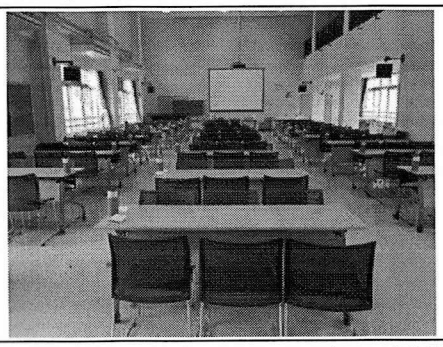
活動名称	わくわく給食
活動時間	2016/05/24~2016/05/26 （12:20~13:00）
活動場所	多目的ホール
観察対象	赤組、黄組、青組
活動過程	子どもたちが入場してくる。役割分担で、6年生が配膳する（給食を入れる）。そして、4、5年生が給食をテーブルに運んだり、1、2、3年生をテーブルまで案内したりする。配膳が終わったら、子どもたちはそれぞれのテーブルに座り、手を合わせて「いただきます」と合掌した後、食べ始める。先生も、子どもたちと一緒に座って食べる。食べ終わる頃には食べ物に関するクイズを出す（色別で、赤組は赤色の食べ物に関するクイズを出す；黄組は黄色の食べ物に関するクイズを出す；青組は青色の食べ物に関するクイズを出す）。クイズの後、それぞれの食べ物の良さを紹介する。ごちそうさまをした後、片付けが始まる。役割分担で、3、4年生がテーブルを拭いたり、1、2年生を教室まで送ったりする；5、6年生は食器を片づけたり、テーブルや椅子を運んだり、掃除したりする。先生たちはサポートする役割である。三日間のわくわく給食は大体以上のような流れで行われた。
写真など	

表5　活動説明

時間：2016/05/25
場所：多目的ホール
内容：昼食
人物：U（小5・男）、V（小2・男）
状況：子供たちが楽しく話しながら、食べている時、一人の男の子Vくんが椅子から降りて、テーブルの下に入り込んでいた。

観察記録18「面倒を見るUくん」

いただきますと言ったあと、子どもたちは楽しくはなしながら、昼ごはんを食べている。私に遠くないテーブルで、2年生のVくんは椅子の上でじっとしていられなくて、ちゃんとご飯を食べていない。そして、箸を放して、椅子から降りてきた。また、地面に跪き、体を地面に伏し、テーブルの下に潜り込もうとしていた。すると、Vくんの向こうに座っていた5年生Uくんは、食べ物を置いて、すぐ椅子から降りて、Vくんの腰を捕まえて、テーブルの下に潜り込もうとするVくんを引っ張り出した。Vくんは笑いながら楽しそうに手足を振っている。UくんはVくんを抱っこして、元の椅子に座らせて、自分の席に戻って、「Vくん、食べるときは食べる」と真剣な顔で言い出した。

考察：

Ｕくんはもう5年生で、低学年のＶ君に対して、「食べるときは食べる」といったのは、ちゃんと責任をもって、高学年生としての役割を果たしていると感じられる。また、Ｕくんの言葉から彼はいい生活習慣を身に付けていると分かる。

ワクワク給食についてのインタビュー（Q：筆者　Z：担当する先生・女）

Q：先生たちは子供たちと一緒に座って食べているのは、先生と子供の関係をなかよくするためですか？

Z：先生も子供たちと一緒に食べるとき、とても、こう、いろんなお話もできるし、みんなも楽しい気分でいられるから、先生も子供たちのところへ一緒に入って、関係を良くするとか、あのう、授業中とかでは、聞けないような子供のお話とか、表情を見たりするとか。それに、また、ちょっと心配な子には一緒に座って、声を掛けたりするとか、頑張って食べようねとか。

Q：なるほど、席はどうやって分けるのですか？

Z：うれしの班っていうのがあって、その、色も分かれているでしょう。赤、黄、青で、今日は3組み3場かの青で、その中に、さらに、6つの班に分かれているんです。縦割りで、だから、今日は13班から18班までだったんだけど、席も、一つのテーブルに、いろんな学年が一緒に食べられるように、6年生ばかり固まるんではなくて、1年生から、6年生までが一つのテーブル。6人掛け、6人座っていたと思うけど。

Q：わくわく給食は何のために行われたのですか？

Z：縦割りで、1年生から6年生までがみんな楽しく一緒に食べられるように、で、6年生は1年生とか、低学年のお世話、頑張って食べようねってお世話してあげたり、1年生も6年生たちと普段と違うメンバーで、その、頑張って、一緒に食べたり、お姉ちゃんやお兄ちゃんはこんなことをやっているだって、見て、食べられるように、っていう意味で。

Q：役割分担もしていますよね。たとえば、6年生は配膳をするとか。

Z：そう、運んだり、テーブル拭いたりとか、6年生が入れた給食を、これを持って、4、5年生が、1年生から3年生座っているところに「どうぞ」と持っていくように。

Q：分りました。ありがとうございます。

考察：

Z先生の話から、ワクワク給食というのも、役割分担という形を通して、子供たちの役割取得能力を育っていると分かる。また、高学年生が低学年生の面倒を見ることで、他人とのかかわり方や人間関係の中でのいろいろな問題を解決することができるようになると推測できる。また、低学年生は高学年生のやり方を見て、見習いながら成長していくことも分かる。そうやって、違うメンバーと一緒に活動することで、人間関係を構築しているのである。

活動名称	旗を作る活動
活動時間	2016/05/27　(10:45~12:20)
活動場所	附属小学校の教室
観察対象	4年3組の子供たち
活動過程	1. 班ごとで班旗を作る 2. 班旗の意味を説明する 3. 振り返り

表6　活動説明

時間：2016/05/27
場所：4年3組の教室
内容：旗を作る
人物：A（小5・男）、B（小5・女）
状況：AくんとBさんは切り紙をどこに貼るかについて話し合っているときのこと。

観察記録19「話し合うA子とB子」

Aくんのいる班では、龍の切り紙のある旗を作っている。そして、その龍をどのように旗に張るか、みんな迷っていた。Aくんは切り紙を持って、円の形をした紙の上に載せて、「やっぱ入れる？いれへん？」と他の子供たちに聞いた。他の子供たち（低学年）は、ハサミでかみを切ったり、のりで雲の形をしている切り紙を旗に貼ったりしている。Aくんの話を聞いたら、頭を振っていた。すると、5年生のBさんは、旗を見て「入れた方がいいね」と手で頭を支えて、眉を顰めた。A くんは龍の切り紙を持って、円の形にした紙に乗せて「こう？」、そして、重なった二つのかみを横にするか、縦にするか、弄っている。「Bちゃん、Bちゃん、龍を見て、縦の方がいいね」とBさんに話したら、Bさんは、「横の方がいいかも」と悩んでいるように見えた。「こうか？」と、Aくんは龍の切り紙を横に置いた。「やっぱり、縦の方がいい」と、B さんは横になった切り紙を見て、考えを変えた。「でも、班旗は斜めだよ」と、A くんは、迷っているように、切り紙を少し斜めにした。B さんは、「そうだけど……でも、縦の方がいいと思う」と切り紙を持って、縦のようにして、Aくんに縦の場合と斜めの場合を見せた。「じゃ、縦にしよう」と、A くんは納得したように頷きながら、龍を縦にした。「みんな、どうですか？」と、A くんは龍を旗において、他の子供たちに意見を聞いていた。他の子は頷きながら、のりを渡した。

考察：

AくんとBさんのやり取りの中で、二人はお互いの考えを考慮して、交換して、受け入れながら、龍の置き場を決めた。そして、Aくんがほかの子に「やっぱ入れる？いれへん？」と聞いたのは、ほかの子の考えや意見を尊重していると考えられる。Bさんと話し合って、龍を縦にすると決めたとき、Aくんはそのまま直接に貼るのではなく、ほかの子供に意見を聞いてから実行したことからも、Bくんは他人の意見や気持ちを尊重していると感じられる。そして、Bさんとの話の中で、Bさんの意見を聞きながら、Bさんのしたいように、龍の置き所を変えたりしたのも、Bさんの意見を尊重したから。そして、Bさんは、最初はAくんの意見に反対したように、自分の考えをAくんに告げた。自分の考えを思うままにやり抜くではなく、龍の置き所が縦の方がいいと気づいたとき、自分の考えを変えた。つまり、Bさんは自分の意見や他人の意見に疑問をもって、行動を取っていると解釈できる。他人とのやり取りの中で、自分の考えも修正していく。間違ったら、相手の意見に従うが、相手の考えがよくないと思うときは、自分の考えを教える。Aくんは斜めに置いたほうがいいのではないかとBさんに言うとき、Bさんは縦のほうがいいと言ったのも、Bさんは、お互いの考えを整理して、修正していると考える。このように、AくんはBさんと一緒に、龍の置き場を決めることで、お互い話し合うことで、意見を交換したり、受容したり、共同作業をしていくことが考察できる。

時間：2016/05/27
場所：4年3組の教室
内容：班での振り返り
人物：C（小5・女）、D（小6・女）
状況：班旗の説明をした後、子供たちは振り返りをしている。

観察記録20「C子とD子の言葉」
Cさん：前回はみんなと関わりなかったが、今回かかわりができて、よかったと思います。
Dさん：1年生のことを見てたんだけど、去年もちょこちょこ見ていましたけど、今年班旗を作ることができてよかったです。

考察：
CさんとDさんの話から、下級生と関わりができて、仲間関係の構築もできていることが感じられる。

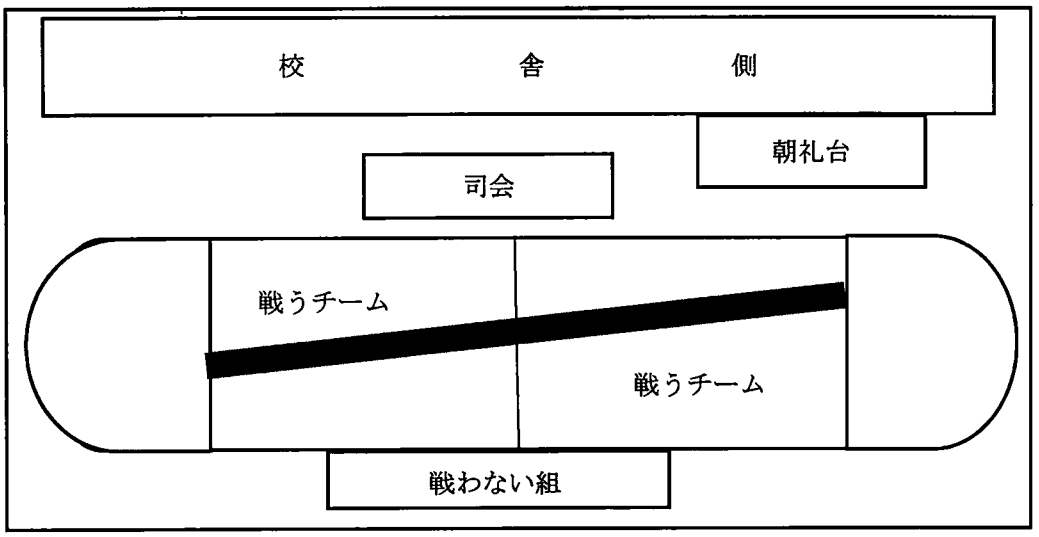
時間：2016/05/25
場所：4年3組の教室
内容：班での振り返り
人物：C（小6・女）、D（小6・女）、E（小1・男）、F（小1・女）
状況：1年生たちが発表できないから、6年生が1年生のために励ましてあげた。

観察記録21「1年生を助ける6年生」
あと、1年生の感想を聞くだけだったが、1年生のみんなは、誰も立ち上がらなかった。そのとき、6年生の女の子Cさんは「みんな恥しいなら、一緒にしたらいいです。みんな立って、前に行って」と隣の1年生に優しく声をかけた。でも、やはり誰も動かなかった。「大丈夫、行ける」「できるから」と他の6年生も1年生のところへ来て励ましてやった。「誰も言わないと、あとは言えなくなる」と床に座っていたCさんは隣の1年生Eくんに話しかけている。「みんなと同じように、自分の感想を言ったらいい」ともう一人の6年生Dさんも1年生に声をかけた。Eくんは周りを見てとうとう立ち上がった。もう一人の1年生の女の子Fさんも立ち上がって、みんなの前に行った。「みんなと楽しく出来て、嬉しかったです」とFさんは小さい声でやっと自分の感想を言い出した。すると、床に座っていたみんなもFさんの勇気をほめるように、全員拍手をした。Eくんも「班旗ができてよかったです」と少し緊張しているように言い出した。するとみんなまた拍手した。

考察：
6年生は高学年で、自分たちは先輩だから、まだ入学して何か月の1年生に対して、面倒を見てあげたり、励ましてあげたりするのは、1年生から6年生まで成長してきて、自分の責任や役割という意識が頭の中に備えていると考えられる。だから、先生の指示なしに、自発的に行動を取った。
そして、1年生ははじめてこのような活動に参加したから、どう言えばいいか分らないと考えられる。そして、恥ずかしいやら緊張やらの気分もあるだろうが、そういう場面に慣れていないことは理解できる。だから、6年生は、自分が1年生のとき経験したことで、1年生たちの気持ちを理解したうえで、「みんな恥しいなら、一緒にしたらいいです」とか言い出したと解釈できる。

活動名称	うれしのスポーツ　綱引き
活動時間	2016/06/02　(9:40~10:25)
活動場所	附属小学校の運動場
観察対象	青組の子供たちと先生たち
活動過程	1. 色別ミーティング 2. 開会式（校長先生と各リーダー長からの言葉） 3. ルール説明 ・各組を A,B 班に分けて,それぞれが他の色と対戦する。 ・旗振りは各色の教員 3 人までとする。 ・競技時間は各 2 分とする。決着がつかない場合は引き分けとする。 ・得点は勝ち 4 点,引き分け 2 点,負け 1 点とする。 ・綱の中央にある旗が倒れた時点で勝敗を決める。 倒れなければ引き分けとなる。 4. 競技 ①1 回戦　赤 B（4，5，6 班）　VS 青 B（16，17，18 班） ②2 回戦　青 A（13，14，15 班）VS　黄 A（7，8，9 班） ③3 回戦　黄 B（10，11，12 班）VS　赤 A（1，2，3 班） 5. ふり返り

表 7　活動説明



時間：2016/06/02
場所：運動場
内容：競技
人物：Y（青組の先生・男）
状況：綱引き大会が始まった。各組の先生たちは子供のために応援するときのこと。

観察記録 22「旗振りの Y 先生」

もうすぐ、青組と赤組の戦いが始まる。試合はまだ始まっていないのに、周りから、も

のすごい緊張感が迫ってくる。そして、始まる合図の後一瞬、息ができないほど、静かな時があった。「バー」と、銃声の後、両方のチームは綱をしっかり握りしめ、歯を食いしばって、精一杯力を出して、中央にある旗を自分の方に傾くように綱を引いた。それと同時に、周りの子供たちは声を揃って、「青組——O！S！」「青組——O！S！」という応援の声が聞こえた。まるで、声の波に呑まされたようだった。思わず、私も大きな声を出して、みんなのリズムに合わせて、応援を頑張っていた。その時、３人の青組の先生は青い旗を持って、子どもたちが引っ張っていく方向に旗を強く振っていた。声を嗄らして応援しながら、両手で旗を強く握りしめ、風音の聞こえる力で、旗を振っていた。私に一番近い Y 先生は、顔が真っ赤になって、目を大きくして、まるで自分が綱を引いているように息が荒っている。戦いは激しかった。青組の子供たちは必死に頑張っても、赤組に引っ張られてしまう。地面に、たくさんの足跡ができた。いくら目を閉じて、顔がくしゃくしゃになっても、引っ張られることは止められなかった。これに気づいた Y 先生は後ろに行って、旗を振りながら、子どもたちを見て、大きな声を出して、応援してあげた。気持ちが抑えられないように、地面に跪き、声を嗄らしても、子どもに何かを話している。そして、Y 先生だけではなく、他の先生たちも同じ、紅組の先生たちも、一所懸命に旗を振っていた。

考察：

Y 先生たちが子供たちのために一所懸命応援していることから、先生たちは今回の戦いをどれほど重視しているかとよく感じられる。ただの遊びではないことも伝わってくれた。活動中、子供たちはお互いの姿で、影響を与えたり、受けたりする。もちろん、先生たちの姿も同じような効果がある。だから、先生は先生の役割をちゃんと果たして、真剣に活動に取り組むことで、子供たちに、まじめに頑張ってくださいとか、力を出してみんなと一緒に勝利のために頑張ろうとか、あなたたちだけが頑張っているのではなく、先生たちも頑張っているからとか、子供たちに、行動を見せることで、伝わっている。頑張っている先生の姿を見て、傍観者である私すら熱くなってしまって、チームのために何かやりたいとかの気持ちが生じたから、戦っている子供たちがそれを感じないわけがない。

時間：2016/06/02
場所：運動場
内容：振り返り
人物：V（青組の先生・男）
状況：試合が終了し、各班の先生が振り返りをするときのこと。

観察記録 23「V 先生の話」

班でのふり返りだった。私は一番近い班に行って、先生の言葉を聞いていた。子供たちはしゃがんで、あまり嬉しくなかった。負けたから。先生は真剣な顔をして、同じ様にしゃがんで、「今はどんな気分ですか？」と子供たちに聞いた。「悔しい」とある二三人の子供が小さい声で答えた。「悔しいですか？じゃ、今日、何で負けたと思います？」、先生は問い続ける。みんなそわそわして、小さい声で話している。「全力を出しましたか？」先生は子供たちを見渡し、「全力を出したと思う人、手をあげて」と聞いた。すると、何人か手をあげた。また、何人か手を挙げて、少しずつ手を挙げる人数が増えて、最後、ほぼ全員手を挙げた。「全力を出したなら、それでいいです。先生は、みんなが頑張ったから、嬉しいです」と V 先生は子供たちを見て、「次回、また頑張ればいいです。でも、今回が負けた理由を考えてほしい」と。すると、一人の男の子は「もうちょっと頑張れば」と小さな声で言った。「も

うちょっとですか？そのもうちょっとは何かを考えてほしい。次につながるんです。みんな力を出す時、周りの人を見ていましたか？周りの人と力を合せましたか？」と V 先生は聞いた。子供たちの中に、何人か頭を振っていた。「一人の力では何もならない。自分のことばかり考えてはだめです。周りの人のことも考えて、合わせる気持ちを大切にするのが大事です。」と V 先生はみんなの顔を見て、真剣に言い出した。

考察：

振り返りするのは、V 先生の言ったように次の戦いにつながるから。失敗したことから、何かを学んでいたはず。そして、V 先生は負けた理由を子供たちに考えさせることで、子供たちに自分の行為や足りないところを反省させていることが分かる。そして、「みんな力を出す時、周りの人を見ていましたか？周りの人と力を合せましたか」と「一人の力では何もならない。自分のことばかり考えてはだめです。周りの人のことも考えて、合わせる気持ちを大切にするのが大事です。」を言ったのは、子供たちに、周りの人、仲間のことを考えて、みんなと力を合わせて、一人一人の役割を果たして頑張ることを伝えていると感じられる。

活動名称	うれしのスポーツ　玉入れ
活動時間	2016/06/23 （13:30~14:20）
活動場所	附属小学校の運動場
観察対象	青組の子供たちと先生たち
活動過程	1. 色別ミーティング・コール 2. ルール説明 ・ゴールかごは,各色 2 脚(低ゴール穴 6,高ゴール穴 9) ・低ゴールかごは 2 個で 1 点,高ゴールかごは 1 個で 1 点とする。 ・低ゴールかごは 1～3 年,高ゴールかごは 4～6 年が入れる。 ・全部で 3 回戦,前・後半戦でゲームを行う。 ・ゲーム時間は 40 秒とする。 ・得点は 1 位…3 点,2 位…2 点,3 位…1 点とする。 ・同率順位の場合,得点は以下の通りとする。 1) 同率 1 位:1 位の 2 組に 3 点ずつ,3 位に 1 点 2) 同率 2 位:1 位に 3 点,2 位の 2 組に 2 点ずつ 3) 3 組とも 1 位:全ての組が 3 点 ・各組とも低ゴール,高ゴールそれぞれ子ども 5 名以内で玉拾いを置く。 ・玉は各色 300 個ずつ使用する。低ゴールかご,高ゴールかごへの配分は各色に任せる。 3. 競技 ①1 回戦　前半　2 班　VS　8 班　VS　14 班 後半　1 班　VS　7 班　VS　13 班 ②2 回戦　前半　4 班　VS　10 班　VS　16 班 後半　3 班　VS　9 班　VS　15 班 ③3 回戦　前半　6 班　VS　12 班　VS　18 班 後半　5 班　VS　11 班　VS　17 班 4. ふり返り

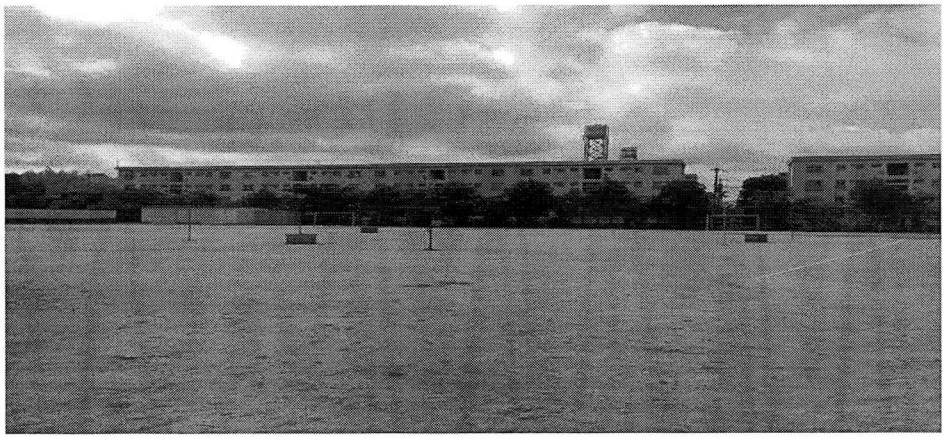
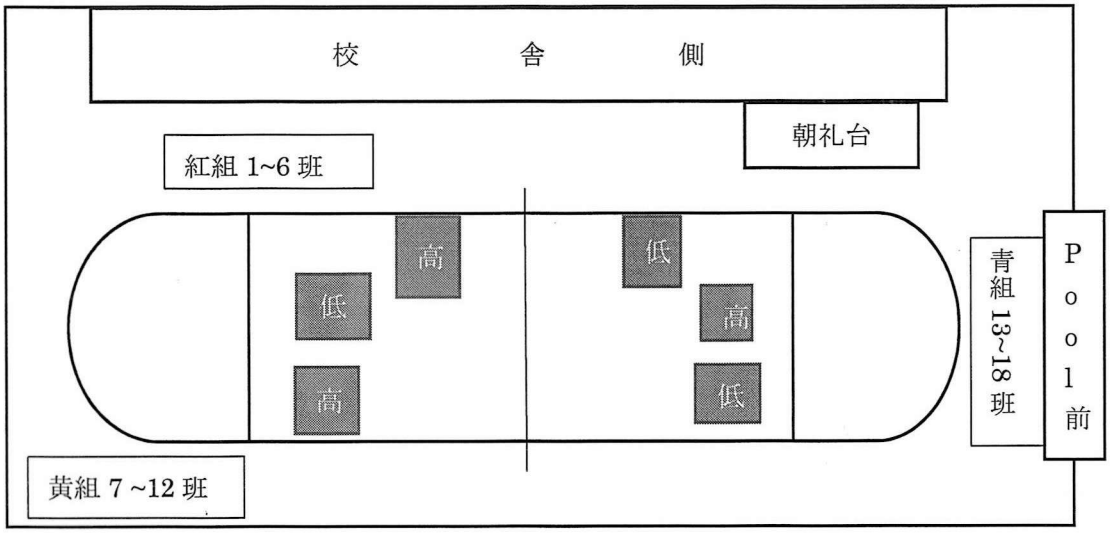
活動写真	

表 8　活動説明



時間：2016/06/23
場所：運動場
内容：試合
人物：青組の 5・6 年生の子供たち
状況：2 回目の試合が始まる前の出来事だった。

観察記録 24「指示を出す子供たち」

もうすぐ試合が始まる。応援する青組の子供たちは集合した場所に座って、前に一列で並んでいる、これから試合に参加する子供たちのために、揃えた大きな声で応援をしている。試合に出る子供たちは、姿勢を整えて、全員目標（地面に並んでいる玉）を見つめている。「パッ」と大きな銃声のあと、子供たちは「ウァー」と一斉に飛び出して、円の形でゴールかごを囲んで、素早く地面にある玉をとって、かごに投げ込み続けた。応援する子供たちは、精一杯で応援して、先生たちは試合に参加している子供たちの近くで、子供たちに指示したり、飛び出した玉を子供たちの手の届くところに集めたりしていた。40 秒の時間だったが、子供たちが頑張っている姿を見ると、時間が長くなったような気がした。試合が終了した後、青組は 1 位になった。みんなとても楽しそうにはしゃいだ。2回目が始まる前に、何人かの子供は、これから試合に出る子に「始まったら、すぐ走って」「あそこを回って、円になって」「しっかりかごを見て」「頑張って」とかの話が聞こえてきた。

考察：

今回の活動の中で、子供たちが勝利のために、試合に参加している子供だけではなく、応援する子供たちもチームの一員として精一杯頑張っている。そして、2回目の試合が始まる直前に、高学年生たちは、「始まったら、すぐ走って」、「あそこを回って、円になって」、「しっかりかごを見て」、「頑張って」とか、大声で言い出したのは、やはり、集団の一員として、青組の一員として、仲間がうまくできるように指示し、勝利のために、仲間と共に頑張りたいという仲間意識が高まる結果だと感じる。

時間：2016/06/23
場所：運動場
内容：振り返り
人物： Y（青組の先生・男）
状況：試合が終了し、青組が負けた。各班は自分のところへ戻って、振り返りをする。

観察記録25「Y先生の話」

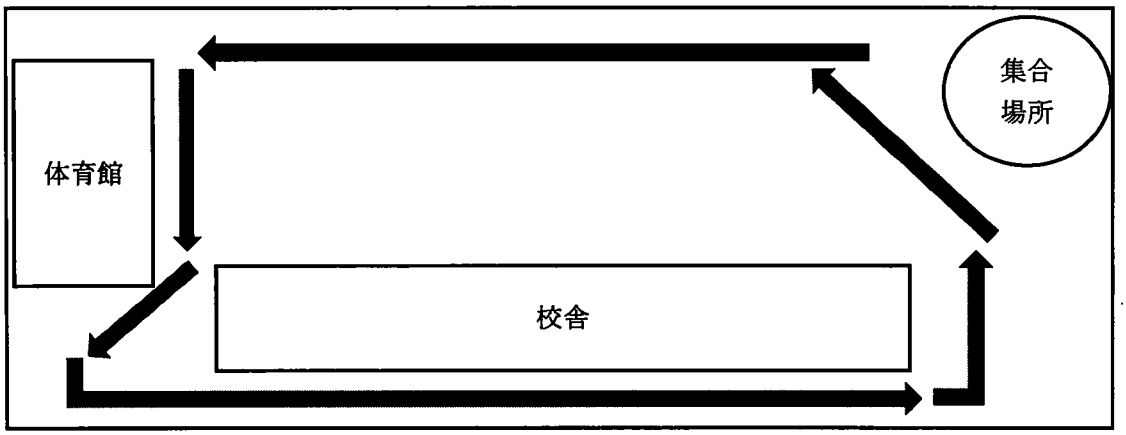
Y先生：・・・やっぱりその役割っていうのは、大事です。だけど、今までは、それをあなたたちはしていなかった。・・・やはり一つは、あなたたちはいま林間に向いて、意識していることがあるでしょう。林間学校で、学校の生活をつなげていくよって、それだけじゃなくて、学校の生活の中でも、5年生が意識してやっていることが、この色別の活動の中に、繋がっていく。そういうこと。一つしっかり頑張れば、他の活動にもしっかりし、いい影響を与える。そういうことね。

考察：

Y先生の話から、子供たちがそれぞれの役割を覚えて、そして果たすことが大事だとよくわかる。何をしても、ちゃんと自分の役割を意識して、行動を取ることが、これからの生活や活動の中にいい影響を残す。つまり、自分の役割を意識して行動することを習慣として身に着けることが大事と考察できる。

活動名称	5年生の林間学校に向けた「業前ランニング」
活動時間	2016/06/08～2016/06/24 （8:35~9:10）
活動場所	附属小学校の運動所とその付近
活動説明	体力づくりや仲間同士の声掛けによる集団づくりなどを目指している活動である。晴れの日は、運動場でランニングをする。雨の日は、校内の階段や廊下を使って、普通に歩いたり、狭い登山道に対応できるように横向きに歩いたりする登山訓練を行う。子どもたちはその場（山）にいるときのことを想像しながら、呼びかけをし、仲間とお互い助け合うように努力する。
補足	参与観察者としての筆者は10日から24日（土、日曜日を除く）まで、できるだけランニングに参加していた。6月9日の朝、5年生の林間学校に向けた「業前ランニング」が行っているというメールが届いたので、筆者は10日から、正式に「業前ランニング」に参加した。6月13日は集会だったから、業前ランニングには行わなかった。6月15日、6月16日は用事で行かなかった。6月22はなし。

表9　活動説明



（運動場の見取り図、矢印は走るルートである）

時間：2016/06/10
場所：運動場
内容：業前ランニング
人物： W（男の先生）
状況：業前ランニングが始まる前に、W 先生が話をしている。

観察記録 26「業前ランニング」

全員が集合した後、担当の W 先生は、「はい、今から、自分の脈を測ってみて」と話し出しながら、時計を見ていた。すると、先まで隣の人と話し合ったり、走りまわしたりする子供たちは、落ち着いて、右手で左手の脈を測り始めた。1 分後、「どうですか？」と、W 先生はまた話し始めた。子供たちから「80」「78」「90」とか、いろいろな数字が聞こえた。「体調はいいですか？いいと思う人、手を挙げて」、何人か手を挙げた。「体調がよくないと思う人」、また、何人か手を挙げた。確認した後、W 先生は「そうですか。じゃあ、ランニングを始める前に、考えてほしいことがあります。ランニングをするとき、何が大事なのか、考えてみて」と地面に座っている子供たちに聞いた。すると、子供たちは隣の人と話し合ったり、自分で考えたりし始めた。数分後、「はい、そこまで。何か気付いたことあります？」と W 先生は聞いた。「はい、僕は、自分の呼吸を控えることが大事だと思います」とか「はい、僕は、正しい姿勢を保つことが大事だと思います。」とか、走ることに関する注意すべきことがいくつか、子供たちから聞いた。みんなの話を聞いてから、W 先生は「そうですね。ランニングをするのは、自分の体のことを考えながら、動いていくことです。自分の心と体をどのように転換するか、どのように扱うのが大事です。走る前に、自分の体調をよく考えて、どこまで走れるかを考えておく必要もあります。では、今回の業前ランニングで、何を目標とするか、目当てを立ててみてください」。W 先生の話を聞いて、子供たちは、また話し合ったりし始めた。「はい、目当てを立てた人は立ちましょう。まだっていう人はまた考えて」という声の中で、数多くの子供たちが立った。「じゃ、何を考えたかみんなに教えて」と W 先生は何人かの子供を指名して、子供に自分の目当てを紹介しようと言い出した。「僕は、先週より、もっと走れるようになりたいと思います」「はい、私はみんなのペースに合わせて、落ちないようにしたいです」とかの話があった。確認した後、W 先生は「自分のその目当てを考えながら、走りましょう。ウォーミングアップしましょう。」という話のあと、子供たちは、足首を回したり、膝を伸ばしたりして、ゆっくりと走り始めた。

考察：

この場面で、W 先生は、子供たちに大事なことを考えさせたり、目当てを立てさせたりすることを通して、子供たちが自分の心や体のことをもっと心がけるようにすると考えられる。また、目当てを立てることで、子供たちに自分の目標に向かって頑張ってくださいという意味が読み取れる。

時間：2016/06/10
場所：運動場
内容：業前ランニング
人物： G（小 5・男）、F（実習の先生・男）
状況：走っているとき、一人の少し太っている男の子 G くんが疲れて、走れなくなった。すると、実習の先生 F さんがずっと G くんについて、G くんを励ましてやった。また、ほかの学年の子供も、G くんのために励ましてやった。

観察記録 27「頑張れ」

グランドをまわして 2 回目の時の出来事だった。私の前に走っている男の子 G くんは疲れて、もとの行列から離れて、一番後ろに走っていた。すると、私の隣に走っている F さんは、スピードを緩めて、G くんのペースに合わせながら、「頑張れ、頑張れ」と G くんに声をかけた。そして、手を伸ばして、G くんの背中を押してやった。一歩を出すことも難しそうな G くんは、F さんの助けで、走り続けた。そのとき、学校の教室から「頑張れ」「頑張って」と、ほかの学年からの応援が聞こえてきた。声の出るところを見ると、教室の窓から、何人かが手を振りながら、大声で応援していた。「ほら、みんなも応援しているよ、頑張れ、頑張れ」と F さんは G くんの背中を軽くたたいた。すると、G くんは、前に向かって頑張ってペースを上げた。そして、途中で、G くんは何回も止まりそうになったが、F さんがずっと G くんのそばにいて、G くんが止まりそうになったとき、G くんの背中を少し押しながら、「頑張れ」と言い続けることで、へとへとになっても、G くんは諦めずに最後まで走り抜けた。

考察：

疲れている G くんは、F さんや教室からの応援で、元気を出して、最後まで走り抜けたと考えられる。F さんは G くんのことを考えて、実習の先生として、責任をもって自分の役割を果たしていたと考えられる。また、業前ランニングに参加していないほかの学年の子供たちが、頑張っている子供のために応援してあげたのは、頑張っている子を見て、そのとき生じる応援してあげたい気持ちがわいてきたことが考えられる。最初は何人しか応援しなかったが、声も揃わなかった。徐々に応援する声が増えてきて、揃えた。そこから、ほかの子供が、応援する子供の姿を見て、それを模倣して、声を出したことも考えられる。

時間：2016/06/14
場所：運動場
内容：業前ランニング
人物： S（男の先生）
状況：業前ランニングが始まる前に、S 先生が話している。

観察記録 28「S 先生の話」

S 先生：今日、何かをするというと、一体感、リズムを覚えることです。みんなと一緒に走るとき、隣の人のことを考えるのが重要です。じゃ、どうしたら、リズムを保つことができると思いますか？・・・声をかけることで、お互いの状況を把握することができます。今日は、1－2、1、2、ファイトというふうに声掛けをしますね。

考察：

S 先生の話において、隣の人のことを考えることが重要だとか、一体感を言い出したのも、子供たちの仲間意識を高めたいと感じられる。

時間：2016/06/17
場所：運動場
内容：業前ランニング
人物： W（男の先生）
状況：業前ランニングが始まる前に、W 先生が話している。

観察記録 29「W 先生の話」

W 先生：この前は声を出して、走ったね。今回は掛け声をなしにする。声掛けは、必要な時と必要ではないときがあります。今日は、はじめて本番の登山の隊列で走る。みんなはそれぞれの役割がある。自分の役割を意識して、自分はなんでここにいるのかな、どういうことをすればいいのかな、それを意識しながら走りください。じゃ、こんなことをするのはなぜなのか、考えてみてください。一旦、隣の人と話し合いましょう。

すると、子供たちは話し合いを始めた。数分後、「みんなのペースに合わせるためです」「後ろの人が遅れないように掛け声をします」、とかの意見が聞こえた。

W 先生：3 人全部周りの人のことを考えましたね。だから、周りの人と一緒に、前後左右、どのように走っているかを見ていく。自分が声をかけないといけないと思うとき、声を出す。今日は、それをしながら、音楽を出して走る。

考察：

W 先生の話から、声掛けをするのは、周りの仲間のためだと分かる。「周りの人と一緒に、前後左右、どのように走っているかを見ていく」と言ったのも、自分のことばかりを考えるのではなく、隊列を保つために、仲間が隊列から離れて、遅れることのないように、仲間のことを心掛けながら声掛けをする。つまり、仲間のための声掛けをすべきだと教えている。また、「自分が声をかけないといけないと思うとき、声を出す」という言葉から、自分が必要だと判断し、自分が声掛けをすべきだと思ったとき行動するという子供の責任感を育成していると感じる。

そして、子供に自分の役割を意識し、必要な時、仲間に声掛けをしながら走ると教えるのは、子供の役割取得能力を高めたいと感じられる。そして、「みんなのペースに合わせるためです」とか「後ろの人が遅れないように掛け声をします」とかの発話から見ると、子供たちはすでに仲間、周りの子のことを考えるようになっている。つまり、仲間意識が備えていると言える。

時間：2016/06/17
場所：運動場
内容：業前ランニング
人物： F（小5・女）、I（小5・男）
状況：子供たちがランニングしているときのこと。

観察記録30「お互いに掛け声をした子供たち」

私はいつも最後の行列と一緒に走っている。今日も同じだった。先生の話を聞いた私の周りに走っている子供たちは、「OOちゃん、少し左に走って」、「XXちゃん、少し距離が空いているよ、もっと走って」とかの声がよく聞こえた。そして、私の後ろについている女の子Fさんは前の男の子Iくんを見て「Iちゃん、左すぎ」と言って、すると、Iくんは少し右に偏って、「こうですか」と言いながら、自分の体を調整した。「もうちょっと」、「もうちょっと？」、このようにお互い話し合うことで、隊列を保って、最後まで走った。

考察：

今回、子供たちは前回と違って、ちゃんと先生の話を聞いて、自分が必要と思っているときに、仲間に声をかけた。そうすることで、隊列が保つことができて、一体感も感じられた。こうやって、訓練を続けることで、子供たちは周りのこと、仲間のこと、集団のことを考えるようになると感じられる。

時間：2016/06/17
場所：運動場
内容：業前ランニング
人物： W（男の先生）
状況：ランニングが終わった後の振り返りのこと。

観察記録31「W先生の話」

W先生：どうですか？
（「楽になった」、「楽に走ることができた」といくつかの声が聞こえた。）
W先生：楽になったか。じゃ、どうして楽になったと思う？
（「みんなと声掛けをしたから、楽になった」、「前の人がペースを作ってくれたから」「前に走っている人の姿を見て、テンションが高くなって、楽に走ることができた」とかの感想が出てきた。）
W 先生：隊列は意味がある。声をかけたり、ペースを合わせたりすることです。林間学校に当たっては、それぞれの良さ、それぞれの役割があって、みんなで一貫になって、登っていく。

考察：

子供たちの話から、声掛けの効果を感じていた。そして、W先生の「隊列は意味がある。声をかけたり、ペースを合わせたりすることです。」から、仲間のことを意識しながら、声掛けをするとか、仲間のペースに合わせるとか、つまり、隊列を保つには常に仲間のことを考える必要があるという仲間意識が不可欠であると読み取れる。子供たちに自分の役割を覚え、周りの人と協力して、登山という目標に向かって、頑張るということを伝えている。

時間：2016/06/20
場所：運動場
内容：業前ランニング
人物： W（男の先生）
状況：グランドにある道具を使い、山登りの演習として、声掛けを訓練するときのこと。

観察記録 32「W 先生の話」

W 先生：体を整えることは大事だけど、心構えをするところを整えることも大事です。登山するときは、今の知っている道ではないから、危険な道はいっぱいあります。そして全部はじめての道です。中途半端な気持ちではいけない。トラブルに巻き込まれないように、チーム、集団の力としての自分の力、班の力、みんなと協力して、しっかり頑張っていきましょう。

考察：

「体を整えることは大事だけど、心構えをするところを整えることも大事です」という言葉から、登山するためには、自分の体や心を調整し、コントロールするという自己管理が重要だと子供に教えていると感じられる。また、「チーム、集団の力としての自分の力、班の力、みんなと協力して、しっかり頑張っていきましょう」という言葉から、チームの一員として、自分の役割を果たし、みんなと協力して登山するということを教えていると分かる。

時間：2016/06/20
場所：運動場
内容：業前ランニング
人物： Mu（青組の先生・男）
状況：ランニングが終わった後、Mu 先生が子供たちに向かって、話をしている。

観察記録 33「Mu 先生の話」

Mu 先生：一列になって走るときに、横に人はいないだよね・・・団結力を深めする。そういうところが大事で、前後の声掛けが大事・・・後ろの人がまねしているから、登るとき、前に何があったら、危ない・・・縦の意識の声掛け、自分がその場所で OK ではない。後ろの人が安全に通れることが大事・・・意味も分からずに、ただ、声を出すのではなく、仲間意識を高まる声掛けを意識してください・・・自分のためではないです。後ろの人のためです。もしできなかったら、その責任は、前の人にある。あなたたち、後ろの人に対する責任を果たしてください。自分のためにできることではなくて、ほかの人のためです。

考察：

Mu 先生の話から、声掛けは仲間意識を高まる行為であると分かる。また、自分のことではなく、仲間、周りの人のことを見て、一人一人が責任をもって、自分の役割を果たすとみんなに伝えているに違いない。

時間：2016/06/21
場所：校舎内
内容：階段上り
人物： S（男の先生）
状況：雨のせいで、今日はランニングではなく、階段上りになった。始まる前に S 先生が話している。

観察記録 34「S 先生の話」

S 先生：安全に登るため、どのような登り方をするか・・・前の人がどんなところに足をついているか。どんな歩き方をしているのか。手はどこに掴まっているのか。安全なのか。自分の歩き方は、後ろの人に伝わっていくから・・・そういう安全面の目を使って、後ろの人の体調、元気かな、気を付けることが大事。業前ランニングの時、隣の人、前の人、後ろの人、体の心配をしてあげる。今はどうですかって。

考察：

S 先生は、「自分の歩き方は、後ろの人に伝わっていくから・・・そういう安全面の目を使って、後ろの人の体調、元気かな、気を付けることが大事・・・」と言ったのは、自分がふざけて登ると、後ろの人を危険にさらすかもしれないから、後ろの仲間の安全を責任もって確保し、仲間のことを心掛けながら登っていくことが大事であると伝えている。また「業前ランニングの時、隣の人、前の人、後ろの人、体の心配をしてあげる。今はどうですかって。」と話したのは、子供に思いやりの態度を育成していると感じられる。

時間：2016/06/23
場所：運動場
内容：階段上り
人物： S（黄組の先生・男）
状況：階段上りが始まる前、S 先生の話。

観察記録 35「S 先生の話」

S 先生：登り方の技術、まずは、自分はどのぐらいの体力があるか。自分、今はどんな調子なのか。そして、後ろの人はどうなのか。顔色とか、汗の量とか、そういうところをちゃんと見なさい。

考察：

以上の話から、業前ランニングをするときは、体の変化を注意し、自分の気持ちを切り替えることが大事だと子供に教えている。また、自分のことだけではなく、仲間のことに気を配ってやることも大事だと伝えている。

業前ランニングについてのインタビュー（Q：筆者　Mu：青組の先生・男）

Q：今回の業前ランニングは段階によって、計画されていたのですか？

Mu：意図はあります。2週間から、2週間ちょっとくらいの間で、少しずつ目的を変えながら。まず、最初は、子供たちの体力にかなりのばらつきがあるので、体力のある子にとっては、必要でない部分であっても、全員で登り切ることを考えたときに、やっぱり体力のない子の体力をつけることがまず最優先、というところから、スタートしています。体力だけじゃなくて、実際に山を登るとなると、その、体力のしんどさだけじゃなくて、難しさ、こういうものがあるので、その難しさというのを、考えたときに、足の動かし方とか、体の使い方とか、手を使わないといけない場所があるよとか、危険な場所って、どうやって進んでいたらいいかなとか、そういった技術的なことも、あの、最後の一週間ぐらいはしっかりと研ぎながら。

Q:そういうことを通して、子供たちの心を育っていくのですか？

Mu：そっちももちろんあります。なので、声掛けっていうところなんかは、技術的なことというよりは、体力のある子と体力のない子が一緒に進んでいく中で、体力のある子が、体力のない子にどんなかかわりが浮きるのかな、どんな声掛けをしてあげると頑張れるかな、そういった意識ももちろん含まれています。この登山に関しては、楽しさというものはあまり重視していないです。やはり真剣に自然と向き合うということを考えたときに、気持ちを緩めるっていうことが、どれだけ危険なことなのか。っていうところをしっかり意識させる。そういった、あのう、面のほうが高いですね。

Q：つまり、子供たちの責任感を育てるということですか。

Mu：そうですね、昨日もちょっと子供たちに話していただけど、前に歩いている子は自分の後ろに歩いている子に対して責任があるよっていうところです。勝手なことをしたら、後ろの人たちがそれをまねするかもしれない、そういった無責任な行動は命の危険にかかわってくるよねと昨日話しています。

考察：

Mu先生の話から、今回の業前ランニングは計画的に子供たちの体力をつけながら、仲間意識と責任感を育っていると感じられる。また、声掛けを通して、子供たちに一体感、集団意識を覚えさせているのだ。

活動名称	林間学校
活動時間	2016/06/26~2016/06/28
行き先	兵庫県養父市関宮町奈良尾 氷ノ山
活動目標	ねらい：子どもと教師が一体となって氷ノ山登山に挑戦し,林間学校をやりとげた感動を味わう。 ①自然の中で生活したり登山をしたりすることの意味を見つけ,進んで自然に立ち向かい,頑張り抜く強い体と心を身につける。 ②仲間と登山や宿泊をともにする中で,お互いを理解し合うとともに,集団生活のルールとマナーを、体験を通して学ぶ。 ③登山に立ち向かったり山で自然にふれて生活したりして生まれた思いを表現し,学習や日常生活に関連づける。 めあて： ①登山や自然の中での生活を通して,がんばりぬく強い体と心を育てる。

	②集団生活の中で,仲間と協力し,ルールとマナーを身につける。 ③仲間・民宿の人たちや先生たちとしっかり語り合い,絆を深める。 ④氷ノ山の自然を,自分の目で確かめ,自然に対する理解を深める。
活動過程（具体的な時間は精確ではない。その日の状況によって違う）	06 月 26 日 8：30 学校集合→8：40 出発式→8：50 バス乗車→9：00 学校出発→11：00 民宿着（開校式、部屋割り、避難経路の確認）→12：00 昼食→13：00 自然散策（川の上流の様子を観察、山の自然）→14：00 魚つかみ（アマゴを手でつかむ、塩焼きにして食べる）→スタンツの練習、自由時間→17：00 夕食→19：00 マウンテンファイアー（レクリエーション、登山への決意）→20：00 入浴および登山用具の確認→学級ミーティング（民宿の方の話、諸注意、登山用具の確認、しおりの記入）→22：00 就寝 06 月 27 日 6：00 起床→6：30 朝食→7：40 広場集合→7：45 朝の集い→8：00 出発→8：30 登山開始→11：30 山頂→12：15 下山開始→16：30 民宿着→17：00 入浴および休養→18：00 夕食→19：00 学級タイム（お互いの頑張りを認め合う、登山での学びの交流、レクリエーション）→21：00 しおりの記入→22：00 就寝 06 月 28 日 6：00 起床→6：30 朝の集い→7：00 朝食（荷物管理、片付け・清掃）→8：45 閉校式→9：00 民宿の方へあいさつ（民宿出発）→10：00 植村直己冒険館見学（展示物の見学、ビデオ上映）→11：30 昼食→12：30 植村直己記念館出発→14：30 学校着→14：35 到着式

表 10　活動説明

時間：2016/06/26
場所：バス
内容：出発
人物：J（小 5・女）
状況：乗車した後、私は J さんの隣に座っていた。彼女と話し合っているときのこと。

観察記録 36「学校が好き」　〈　〉筆者の言葉,「　」J さんの言葉
私：〈家におるほうが好きですか？〉と聞いたら、J さんは頭を振った。
私：〈学校のほうが好き？〉
J：「うん、遊ぶところが多いし、友達もいっぱいおる」
私：〈みんな仲良くですか？〉
J：「うん」
私：〈じゃ、1 年生の時、はじめて 6 年生に出会ったよね。そのとき緊張しなかったか？〉
J：「全然」頭を振りながら。
私：〈やはり、お姉さんやお兄さんたちが優しいから？〉
J さんは頷きながら「いろいろ助けてくれた」と答えた。
私：〈そうですか。お姉さんやお兄さんたちがいるほうがいいですね。たくさんの人と一緒に遊ぶほうがいいですね〉
J：「いや、人数が多いと、忘れちゃう」

私：〈だれのこと？自分のこと？〉
J：「うん。ペアがおるほうがいい」
私：〈ペアか？ずっと自分のことを見てくれるから？〉Jさんはまた頷いた。

考察：
Jさんの言葉から、学校生活はすごくいい雰囲気で、子供たちが学校に行きたいと思うのも当然である。そして、みんなと仲良く助け合い、遊びあい、学びあいことで、子供たちの対人間関係が円滑に進んでいると感じられる。また、ペアがいるほうがいいとJさんが言ったのは、人数が多いから、無視されるのが嫌だからと考えられる。やはり、自分のことを見てくれる人がいて、自分もいろいろ頑張れるだろう。また、ペアがいることで、いろいろしてあげたりすることもできる。つまり、自己存在感や自己有用感を求めているのである。

観察記録37「声掛けが好き」
私：〈そういえば、林間学校の前に、業前ランニングがあったよね。参加していた？〉J：「参加した。全部階段上りに変えたらいい」
私：〈どうして？ランニングは嫌い？〉
J：「うん。でも、声掛けは結構好き。みんなとかかわりができるし、聞いて、元気が出る。頑張りたいと思う」

考察：
Jさんとの話から、声掛けの効果が見られた。確かに声掛けすることで、前後左右、周りの人とかかわって、一体感を味わうことができるし、元気も出せる。

時間：2016/06/26
場所：スキー場
内容：自然散策
人物：E、F、G（小5・女）
状況：昼ご飯を食べてから、子供たちは近くのスキー場に行って、大自然を観察しているときのこと。

観察記録38「蝶々を追いかける子供たち」
子供たちと一緒に近くの山に行った。その山はもともとスキー場で、とても広いところだった。目的地に着いた後、子供たちは先生の言葉を聞いて、自由にあっちこっち遊びに行った。少し、元の場所に離れていたところで、3人の女の子が笑いながら胡蝶を追いかけていた。胡蝶を掴めようとしていたが、なかなか捕まえない。私は思わず〈帽子で被ったら〉と言い出した。すると、Eさんは、すぐ、頭から帽子を取って、それを使って、白い胡蝶を追いかけた。まもなく、胡蝶が帽子の下に被られた。三人は、しゃがんで、帽子を囲んで、少しずつ、慎重に帽子をあげて、やっと、一匹を捕まえた。「やった」と笑いながら、三人が私のところに、胡蝶を持って、「先生、見て、見て」と楽しく胡蝶を私に見せた。〈よかったですね〉と私が返事すると、3人は嬉しそうに笑っていた。「もう少し、黄色のも捕まえたのに」とFさんが言いながら、また帽子を持って、通り過ぎた黄色の胡蝶を追い始める。しかし、その胡蝶は遠い草むらの中に飛んでいた。Fさんは止まる様子がなかった。すると、Gさんは、「Fちゃん、それ以上行くとあかんで」とFさんに声をかけた。Fさんはそれを聞いて、前に進まなかった。

考察：

Gさんが Fさんに「Fちゃん、それ以上行くとあかんで」と言ったのは、Fさんのことを思って、心配しているからだ。そして、Fさんもちゃんと仲間の声を聴いて、戻ってくることで、自分のことを思っている仲間の好意を理解していると考えられる。こうやって、3人はお互いと協力し合って、お互いの安全を心掛けすることで、より深いかかわりにつなげていくと感じられる。

時間：2016/06/26
場所：スキー場
内容：自然散策
人物：Mu（青組の先生・男）、K（小5・男）
状況：Kくんが滑って、ケガしたときのこと。

観察記録39「Mu先生の話」

K君を見たとき、彼はすでにけがをした。膝に赤い血がついていた。〈どうしたの？転んだ？〉と聞いてみると、「ちょっと、滑った」と返事をしてくれた。ひどいけがだった。体操服もだいぶ汚れていて、膝に血まみれで、すごく目立つから、すぐ、K君の周りから、たくさんの子供が集まて「大丈夫？」とか、「水で洗って」とか、Kくんを心配していた。まもなく、Mu先生が来て、K君をきれいな水のある所に連れて、K君のけがした膝を、水で洗った。それから、絆創膏を使ってケガしたところに貼った。ほかの子供たちは「痛そう」とか「痛くない？」とか、Kくんに聞くと、Kくんは「全然いたくない。」と何気なく答えた。それから、Mu先生は「どうしてケガしたか、考えてください、みんなが心配するだろう」と言った。「滑ったから」とKくんは返事をした。「違うだろう。不注意だから滑っただろう。」とMu先生は指摘した。

考察：

Kくんが「滑った」と答えたときは、ケガしたことが周りの人に心配させてしまうことを気にしていないような感じだった。そして、Mu先生はそのことに気付いて、周りの人のことを考えていないKくんに自分の過ちを認識させるため、少し厳しく話したと感じられる。そして、Kくんも自分がみんなに心配をかけたことに意識して、振り返りをするとき、自分が不注意で滑ったことをみんなの前に話した。

時間：2016/06/26
場所：スキー場
内容：魚つかみ
人物：L（小5・女）、M（小5・女）
状況：子供たちはアマゴを手でつかんでいるときのこと。

観察記録40「魚をあげるLさん」

子供たちは小池の中で、水の中にある魚を探している。魚を見つけたとき、しゃがんで、手で捕まったり、魚を池の隅っこに追い詰めたりしていた。人数が多いため、水の中で歩くたび、砂で水は濁る。魚が捕まった人もいれば、捕まっていない人もいる。混乱している場面の中で、Lさんはなかなかつかめない。それを見ていたMさんは、Lさんに「Lちゃん、

これあげるから、捕まって」と自分の魚を渡した。そして、Lさんは少し魚を怖がっているように見えたが、やはり自分の手で魚を受け取った。

考察：

子供たちは、自分の力で魚を捕まえなければならない。しかし、Mさんは魚を捕まることが苦手なLさんを見て、自分の魚をあげたのは、やはり助けてやりたい気持ちが生じたからと考える。困っている仲間を見て無視することはできなかったのだ。このように相手のために助けてあげたいという気持ちが行動と結びつけたのだ。

時間：2016/06/26
場所：スキー場
内容：魚つかみ
人物：Mu（青組の先生・男）
状況：魚を捕まって、焼いた後、Mu先生が話をしている。

観察記録41「Mu先生の話」

食べる前。

Mu先生：・・・命をいただくときに、自分も命であることを考えておく。魚も命です。生きている状態の魚をくしで刺さるところを見てください。嫌な人もいるかもしれないけれど、それを体験してください。

食べた後。

Mu先生：こうやって、命をいただくことで、みんなの命が生かされていく。だから、自然、命を、もっと考えてほしいです・・・・これから、明日も、いろいろな命と出会えるとき、自然や命とどう向き合うか、どう使うか、しっかりと考えてほしい・・・

考察：

ここでMu先生の話から、子供たちに自分の命を大切にすることを伝えていると感じられる。そして、自分たちは他の命をいただきながら生きていくから、ほかの生き物の命に対しても、大切にすること伝えている。

時間：2016/06/27
場所：氷ノ山
内容：登山と下山
人物：G（小5・女）
状況：私は6班の先頭になって、子供たちと一緒に登山する。私の後ろについているのはGさんだった。彼女は林間学校に行く前、すでに風を引いたそうで、体調は良くない。彼女のことを留意しながら登山や下山していくときのこと。

観察記録43「仲良くなれた」

登山が始まった。途中で、風邪をひいたGさんのことが気になって、歩きにくいときは〈ここ危ないから、気を付けて〉と彼女を注意してあげたり、彼女が石や木の枝に躓いて、倒れそうになるときは、手を伸ばして、彼女の手を掴んで、手伝ってあげたりした。そうすることで、木の形がおかしいとか、襟が汗でびしょ濡れだとか、登山前より私と話せるよう

になった。そして、水のある渡りにくいところで、彼女に手を伸ばすと、彼女はすぐ私の手をつかんで「ありがとう」と言ってくれた。

考察：

私は登山する前に、G さんと話したことはない。G さんも、最初、私とあまり話せなかった。そして、私から話をかけると、G さんも少しずつ私と話すようになった。私が彼女を助けることで、彼女は私ことを信じるようになって、だから手を伸ばすと、彼女はすぐ私の手をつかんで「ありがとう」と言ってくれたと考えられる。このように、同じ活動に参加して、やり取りすることで、仲間関係ができたと感じられる。

観察記録 44「半分の水」

頂上で、みんなと一緒に昼ご飯を食べてから、私は 6 班の子供たちを連れて、山を下りていく。下山するときは、登るときと違って、滑りやすいところはいっぱいある。私は、躓かないように、G さんのことをずっと心掛けていた。G さんは、私の後ろについて、降りることだけに専念していた。途中で、降りにくいところがあったら、私は彼女を手伝ってやった。そして、私の行為に対して、G さんはいつも「ありがとう」をいう。

降りる途中、彼女は「のどが渇いた、水が飲みたい」と小さな声で言った。そのときはちょうど前が渋滞しているから、私は、彼女がカバンの横にあるミネラルウォーターが自分の手で取れないと思って、ペットボトルを出してあげた。しかし、中には水がなかった。そこで、私は自分のミネラルウォーターをあげた。でも、G さんは、頭を振って、受け取ってくれなかった。〈じゃ、半分にしようか〉と、私は、自分の水を半分、G さんのペットボルトに入れた。それを渡すと、今度は受け取って、私に「ありがとうございます」と言ってくれた。また、歩き始めた。〈次の休憩の場所についたら、飲もうか？〉と G さんに言うと、G さんは頷いて、ボルトをカバンに入れた。

考察：

私が自分の水を全部 G さんにあげたとき、G さんは受け取らなかった。それは、私のことを思ってくれたからと考える。もし、もらったら、水が飲めない人は先生になってしまうという考えで、受け取らないことにしたと感じられる。私もそれに気づき、水を半分にしてあげたら、今度はちゃんと受け取ってくれた。このように、やり取りの中で、相手の気持ちを理解しあうことができるし、他人のためにいろいろ考えてあげたりすることができる。

観察記録 45「注意してくれた G さん」

下山中、降りるだけで精一杯の G さんは、自分の行動に専念していた。しかし、そんな G さんは、小石で危うく滑ることになる私に、普通より早いスピードで「足、足」と注意してくれた。

考察：

登山途中、G さんは風邪で、体調はほかの人より優れていないから、登山することで精一杯だった。だから、声掛けをすることも少なかった。でも、下山で精一杯の彼女は、私のことを思ってくれた。心配してくれた。だから、普通より早いスピードで「足、足」と注意してくれたと考える。

時間：2016/06/27
場所：氷ノ山
内容：登山
人物：X（小5・男）
状況：頂上まであと1/3のところで、Xくんは声掛けをしているときのこと。

観察記録46「声をかけるXくん」

頂上まであと1/3のところで、後ろの隊列から大きなかけ声が伝わってきた。すると、私の前に歩いているX君も大きな声を出して「1－2，1－2」と。また、私の隊列から、何人かがX君のかけ声に応じて「ファイト」と返事をした。それを聞いて、X君はもっと大きな声で「1－2，1－2」と声を出した。今回は一番後ろについている子どもたちが声をそろえて、「1－2，1－2」と叫んだ。それを見て、私もほかの子供たちと一緒に大声で「ファイト」と返事をした。隊列の中で、少しずつ、掛け声が聞こえるようになった。しかし、長くは続かなかった。しばらくすると、子供たちは疲れて、また声掛けをしなくなった。X君が大声を出しても、返事する子はわずかで、声も小さかった。「どうしよう」とX君は隣の女の子に声をかけて、二人で何かを話していた。

しばらくすると、X君はまた大声で「1－2，1－2」と声をあげた。私もX君のあとについて大声で「ファイト」と後ろに向かって声を上げた。そして、一番後ろの子供たちは、再び声をそろえて、X君と一緒にかけ声をした。前の隊列と後ろの隊列の中にも、何人かが、小さな声で「ファイト」と返事をした。時間の流れにつれて、疲れた子供たちはまた返事をしなくなったが、X君と一番後ろの子供たちは諦めずに声掛けをし続けた。途中で、X君は一度声掛けをやめようとしたが、大声で「ファイト」と返事をした私や後ろの隊列の中で小さな声で返事をした仲間を見て、また前に向いて、「1－2，1－2」と大声で呼び続けていた。

考察：

最初Xくんが「1－2，1－2」と声を出したのは、後ろの隊列から大きな掛け声の影響を受けたからと考えられる。私も子供たちの掛け声を聞いて、掛け声に返事して頑張りたいと思ったから、Xくんもいいなとか、掛け声でテンション高くなって、頑張れるとか、自分も声掛をして、疲れているみんなに応援してあげたいとかの考えで行動したと考えられる。そして、Xくんの掛け声に応じて、後ろの子供たちが少しずつ返事をするようになったから、Xくんは自分の掛け声はちゃんとみんなに届いていると思ったに違いない。だから、もっと声をあげて掛け声をした。また、疲れていても、掛け声を続けたのは、後ろの隊列から、彼の掛け声に返事をした仲間が何人かがいたからと思われる。人数は少ないけど、頑張っている仲間を見て何かをしてあげたいという気持ちが生じて諦めなかったことも考えられる。私も頑張っているXくんをみて、疲れていても、Xくんのために返事をしてあげたいとか、応援してあげたいと思ったから、ほかの子供たちのそういう感じがあったはず。だから、隊列の中で、そういう頑張っている仲間のために、チームのために、掛け声を諦めなかった子供がいたと考える。

時間：2016/06/27
場所：氷ノ山
内容：登山
人物：Mu（青組の先生・男）
状況：登山途中の出来事だった。

観察記録 47「Mu 先生の話」

2 時間ぐらい登ったから、子供たちは疲れて、登ることだけを考えていた。そのとき、頂上からおじいさんとおばあさんが降りてきて、でも、挨拶をした子どもは少なかった。すると、Mu 先生は「何で挨拶しなかったの？ここに来る意味があるの？ちゃんと考えてください」と少し厳しく言った。その後、下山する時、山を登ってくるおばさんがいて、今度、子供たちはちゃんと挨拶をした。

考察：

Mu 先生は子供たちにマナーを教えていることが分かる。

観察記録 48「Mu 先生の話」

頂上に登った時の出来ことだった。昼ご飯を食べた後、子供たちは、ごみを拾っている。そろそろ終わったとき、Mu 先生は二つ飲みかけのミネラルウォーターを持って、集合した子供たちの前に「・・・これをゴミとして置いていくの？・・・・誰が捨てたかは問わない。ただし、君らの中で、まだそのようなことをする人がいることを忘れないでください・・・」と言った。

考察：

Mu 先生の話から、環境保護という意識を子供たちに教えていることが分かる。

時間：2016/06/28
場所：民宿のところ
内容：バス乗車
人物：Mu（青組の先生・男）
状況：帰るとき、みんな全部乗車したが、一人の男の子が遅れている。

観察記録 49「Mu 先生の言葉」

Mu：はやく。みんなが待っているでしょう。もっと周りのことを考えなさい。
（すると、男の子は荷物を持って、はやいスピードで、車に乗った。）

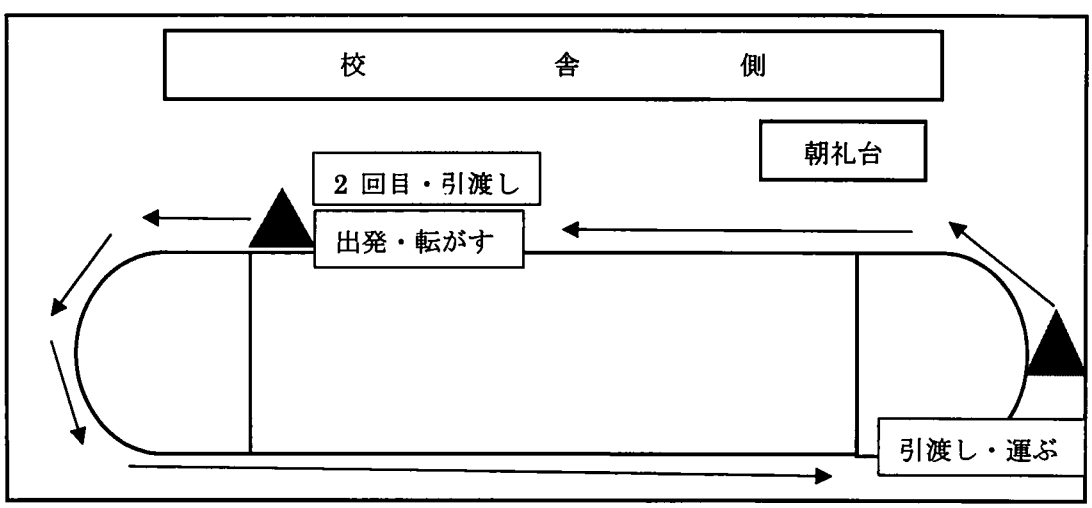
考察：

ここで、Mu 先生はその男の子に、自分一人のことで、みんなに待たせたりするのはよくない。周りの人を考えて、行動すべきだという周りの人、仲間の人への配慮が必要だという思いやりの態度を育てたいと感じる。

活動名称	大玉リレー
活動時間	2016/07/01 (8:30~9:10)
活動場所	附属小学校の運動場
活動過程	1. 色別ミーティング 2. ルール説明 〈大玉転がし〉 → 〈大玉運び〉 2 年→1 年→3 年 → 4 年→5 年→6 年×2 巡 ・大玉転がし(1,2,3 年)でトラック内に大玉が入った場合,すぐに外に出すこと。

	・大玉運び(4,5,6 年)で大玉を落とした場合は,落としたチームが大玉を拾って次のチームに渡すこと。(落とした地点付近まで戻る) ・大玉の受け渡し区間は,セパレートコースとし,他のコースに入ることはできない。 ・大玉転がし・大玉運びともに,前グループの全員がバトンゾーンの始点を通過するまで,次のグループはスタートできない。 ・ゴールは大玉を保持した状態で,班員全員がゴールした地点でゴールとなる。 ・どの学年も教員の先導は認めない。 ・3 回戦で争う。 ・得点は 1 位ー 3 点,2 位ー 2 点,3 位ー 1 点とする。 ・4 年生の人数不足分については,競技人数が 4 人になるまでの補充を可とする。ただし,補充できるのは,1 人 1 回までとする。 3. 競技 ①1 回戦　2, 1 班　VS　8, 7 班　VS　14, 13 班 ②2 回戦　4, 3 班　VS　10, 9 班　VS　16, 15 班 ③3 回戦　6, 5 班　VS　12, 11 班　VS　18, 17 班 4. ふり返り

表 11 活動説明



時間：2016/07/01
場所：運動場
内容：大玉リレー
人物：Q（小 5・男）
状況：各班が集合し、色別ミーテングが終わった後、試合の場所に向かって走っていく。

観察記録 50「隊列を守る Q くん」

試合が始まる前のことだった。リーダー長の話や先生の言葉を聞いてから、「走れ！走れ！」という声の中で、青組の子供たちは試合の場所に向かって、飛び出していく。そのとき、低学年生をリードする高学年生の Q くんは、周りを見ながら、両手で自分の後ろについている子供たちがぶつからないように心掛けていた。また、「危ない、危ない、待っててよ。ちゃんと並んどいて」と言いながら、低学年生たちを守ってやった。

考察：
　Qくんが低学年生に指示を出したり、守ってあげたりしたのは、自分は高学年生だから、責任をもって高学年としての役割を果たしていると考えられる。

時間：2016/07/01
場所：運動場
内容：大玉リレー
人物：1年生たち
状況：試合が始まって、子供たちが応援しているときのこと。

エピソード51「応援する1年生たち」
　試合が始まった。場面が急に盛り上がってきて、応援する声がグランドに満ちている。私は青組のところに立っていた。隣には1年生がいた。試合に出た子供たちは一生懸命に大玉ボールを押しながら走っていた。途中で、躓いて転んでも、素早く立ち上がって、みんなと一緒にボールを押していく子どもは何人かがいた。そのとき、応援する子供たちの顔は心配やら、緊張やら、非常に鮮明だった。声の大きさも変わって、頑張っている仲間を見て、我慢できずに座っているところから立ち上がって「頑張って、頑張って」と大声で叫び出した。そして、ボールが軌道から外れて、違う方向に転んでいくときや、試合に出る子供たちがなかなかボールを手車に載せないときなど、応援する子供たちの感情も激しく変わる。そして、一回目で、青組が勝ったとき、私の隣にいた1年生たちは、うれしさのあまりに、座っているところから急に立ち上がって、お互いの手を握り締めて、「勝った、勝った」とジャンプしながら、笑っていた。

考察：
　応援する子供たちの感情が激しく変わったりするのは、チームのために戦っている仲間を見て、頑張っている仲間の姿を見て、自分も熱くなって、集団の一員として彼らのために応援してあげたいという気持ちが生じたからと考えられる。

時間：2016/07/01
場所：運動場
内容：大玉リレー
人物：先生たち
状況：青組が勝った時のこと。

観察記録52「先生たちの姿」
　試合中、先生たちも応援する子供たちと一緒に、頑張っている子供たちを見て、緊張したり、心配したりした。そして、青組が勝ったとき、うれしくて、手を握り締めて、ジャンプしたり、子供たちの手を叩いたりした。

考察：
　先生たちと子供たちが仲間関係であることが分かる。

時間：2016/07/07（8:30~9:10）
場所：運動場
内容：玉入れ大会
人物：2年生たち
状況：集合する時のこと。

観察記録53「2年生たち」

青組の2年生たちは校舎から飛び出して、前回と同じところに向かって走っていた。私も彼らの後ろについて、歩いている。そして、すぐ、「並んで、並んで」という声が聞こえた。その中に、一人小さい女の子がほかの子供たちに声をかけている。すると、ほかの子供もお互いに「並んで」と言い始める。でも、ざわざわして列になっていない。「こっちは16班、こっちは13班、そっちは18班」ともう一人の女の子は何かを思い出したように、集合するところを指している。すると、ほかの子供たちも、声をそろえて、「16班、13班、18班」と言い始める。

考察：

2年生たちが自ら「並んで、並んで」と言ったのは、何回も大会に参加して、先輩たちが隊列を並べている姿を見たから、自分も真似して言ったことは考えられる。先生たちはまだ来ていないし、隊列を並べる人もいない。だから、このような状況で、先輩たちの姿を思い出して、自ら行動を取ったと思われる。また、ほかの子供も、声を出した子の影響を受けて、自分もそのような行動を取ったから、活動の中、お互いの姿を模倣することも多いと考える。

時間：2016/07/07（8:30~9:10）
場所：運動場
内容：玉入れ大会
人物：Y先生（青組の先生・男）、L（小5・男）
状況：集合するときのこと。

観察記録54「Y先生のお話」

ほかの学年の子供たちが走ってきた。みんなすぐ同じ場所に集合し、ざわざわしている。すぐ、子供たちの中に、「座って、座って」という声があっちこっち聞こえてくる。それから、先生たちも次々と来た。でも、子供たちはまだ、ちゃんと並んでいない。Y先生は「OO、座らせて」と、人込みの中にいるLくんに言った。すると、Lくんは力を入れて、ほかの人に指示を出している。しかし、効果はなかったようだ。「近くに言わないとわからないでしょう」とY先生はLくんの近くに行って、そういった。

考察：

ここで、Y先生がLくんに対して、「座らせて」とか「近くに言わないとわからないでしょう」とかを言ったのは、Lくんに、自分の役割を意識させて、果たせるためだと考えられる。

時間：2016/07/07
場所：運動場
内容：玉入れ大会
人物：A（小1・女）、B（小1・女）、C（小1・男）
状況：試合が始まる前の出来ことだった。子供たちは地面に座って、これから試合に出る仲間たちのために、応援する準備をしていた。

観察記録 55「はちまきを結ぶ1年生たち」

試合が始まる前に、私は隣にいる1年生たちをずっと見ていた。地面に座っている1年生たちは、先輩たちを見ながら、小さな声で話し合ったりしている。そのとき、Cくんのはちまきが落ちた。すると、後ろのAさんは鉢巻きを拾って、Cくんの帽子に結びようとしていた。でも、帽子が斜めになっていて、結びにくい。そこで、C君の隣に座っているBさんは二人の様子に気付き、C君の帽子を頭から取って、また、彼の頭にきちんと被った。Aさんは鉢巻きを持って、やっとCくんの帽子に結び付いた。Cくんはずっとおとなしく座っていた。この一連のやりとりは無言の中で終わった。

考察：

Aさん、BさんとCさんは友達のはずである。だから、Cさんは二人の動きに何もおかしいとか不自然な顔とかしなかった。AさんはCくんのはちまきを見て、友達のために、何かをしてあげたいと思ったに違いない。そして、Bさんも困っているAさんのために、はちまきが結びやすいようにCくんの帽子を直してあげた。そして、Cくんは二人が自分のために行動していることを知っているから、おとなしくしていたと考えられる。

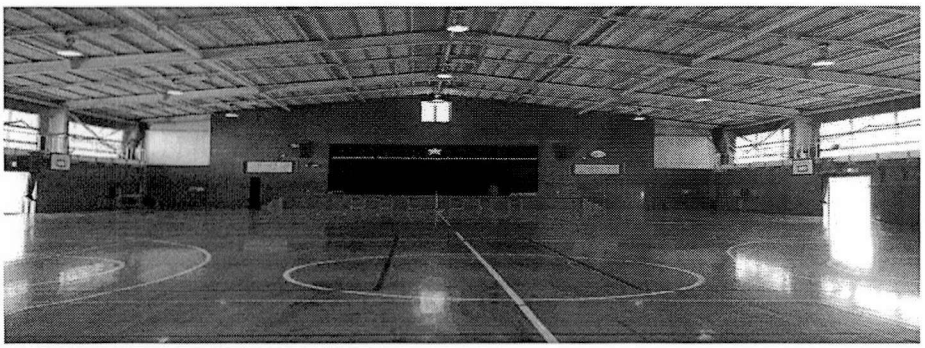
活動名称	終業式
活動時間	2016/07/20 (8:45~9:15)
活動場所	附属小学校の体育場
活動過程	1）一同礼 2）初めの言葉（副校長） 3）校長先生のお話（校長） 4）児童作文朗読「1学期の思い出」 5）校歌斉唱 6）おわりの言葉（副校長） 7）一同礼
活動写真	

表 12 行事説明

時間：2016/07/20
場所：体育館
内容：終業式
人物：C 先生
状況：終業式で、C 先生が話している。

観察記録 56「C 先生のお話」

C 先生：・・・4 か月の間に、いろんな出来事があったと思います・・・どんな出来事があって、自分の頭の中に何をして、どういう気持ちで見なしたかということを思い出してください・・・うまくできなかったことを振り返して、反省して、次からできるようにするというのが一番大事です・・・さて、明日から夏休みが始まります・・・この長い休みに、C 先生からみなさんにしてもらいたいことが一つだけあります・・・それはですね、おうちの人のお手伝いをしてほしい・・・お部屋の掃除でもいいですし、片付けでもいいです・・・何でもいいですから、何か手伝うことを見つけて、それを、できれば毎日してください・・・おうちの人は皆さんのためにいろんなことをしてくれています・・・今度は皆さんの方から・・・何かできることをしてあげてください。

考察：

C 先生の話から、自分の経験したことを振り返すことから、学ぶということが伝えていると分かる。また、子供たちに家族がいろいろしてくれたから、感謝の気持ちを込めて、手伝ってあげたりするという話は、子供たちに、家族のみんなのやさしさに意識させていると感じられる。

時間：2016/07/20
場所：体育館
内容：終業式
人物：E くん（小 5・男）
状況：児童作文朗読

観察記録 57「E くんの感想文」

E くん：・・・一番心に残っているのは林間学校です・・・僕が学んだのは、下山の時のことです。〇〇が先頭で歩いていた時、僕が声をかけるとありがとうと〇〇が言いました。僕は人にお礼を言える気持ちや思いやりは大切だということを学びました・・・この林間学校で学んだことを普段の生活や学校での生活にも生かしたいと思います・・・

考察：

E くんの話から、林間学校を通して、思いやりや社会生活上のマナーを覚えたと分かる。また、学んだことを頭の中で整理して、生活に生かすという意識が備えている。

時間：2016/09/06（8：35~9：20）
場所：運動場
内容：大玉リレー
人物：U 先生（青組の先生・男）
状況：試合が終わった後、先生たちが振り返りをしているところである。

観察記録 58「U 先生の話」

U 先生：青組勝ちましたね・・・やっとはね・・・やっとここで 1 位、嬉しいですね・・・なんで勝ったと思いますか？・・・先生は、もうね、技術とかじゃないと思います。赤も、青も、黄色も、練習時間はなかったわけです。作戦もあまり立てられなかった。そこで、一回戦、二回戦、三回戦・・・これだけの大差が出たってことは、もう気持ちしかない。勝つぞっていう気持ち。・・・ここまで、ずっと苦しかったから、その分も嬉しいじゃないですか？先生は嬉しいです。たぶん同じ気持ちだと思います。・・・

考察：

U 先生は、子供たちの努力や価値を認めて、褒めることによって、子供たちに青組の一員として、よくできたという集団への帰属感が生じて、自尊感情も高まると感じられる。

時間：2016/09/06（8：35~9：20）
場所：運動場
内容：大玉リレー
人物：Mu 先生（青組の先生・男）
状況：試合が終わった後、先生たちが振り返りをしているところである。

観察記録 59「Mu 先生の話」

Mu 先生：・・・今日青組が勝ったのは、青が速かったわけじゃない。・・・黄色と赤のミスがすごく多くて、見てて分かるでしょう。・・・・カーニバル本番に向けて、今の分、よしよし、出ると思ってたら、本番もし赤と黄色のミスがなかったとしたら、接戦になるよ・・・ぎりぎりの勝負っていうのはやはりそれ経験しないと力にならない。楽勝で 1 回戦、2 回戦に勝っただけど、やっぱセットの時は焦るでしょう・・・だから、やっぱり、あなたたちが、気を抜いたらいけない・・・今以上にもっと速くできないかなと、しっかり意識していく。それが大事・・・

考察：

ここで、Mu 先生は子供たちに勝ったとはいえ、気を抜いたらいけないと教えている。つまり、自分の気持ちを整理して、次のカーニバルのために、自己管理をしなければならないと感じられる。

時間：2016/09/15（10：00~10：40）
場所：運動場
内容：綱引き大会
人物：X 先生（男の先生）
状況：今回はうれしのスポーツの最終回である。試合が終わった後、X 先生が子供たちに話をしている。

観察記録 60「X 先生の話」

X 先生：・・・で、みんなはたくさんのことを学んだと思います。例えば、チームの仲間と力を合わせて、心ひとつで頑張ることとか、チームの中で、自分の役割を果たすことの大切さなど・・・それぞれいろんなことを感じ取ったと思います。この経験はね、次のうれしのカーニバル、生かしてほしいなと思います・・・

考察：

X 先生の話から、「チームの仲間と力を合わせて、心ひとつで頑張ることとか」は「仲間意識の育成」の期待が読み取れる。そして、「チームの中で、自分の役割を果たすことの大切さ」は「役割取得能力の育成」の期待が読み取れる。